

# 川柳塔

昭和四十一年一月九日（三種郵便物認可）  
平成十七年三月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通卷九三四号



● 百川協加盟

No. 934

三月号

## 反戦反核平和と詩歌句集へのご参加を

反戦反核平和を願う文学の会は、表記の詩歌句集に掲載する作品を募集しています。川柳部門では若佐ダン吉・川端一步・塩満敏・田中正坊・森村美花の五名が呼びかけ人となり、あかつき川柳会（日川柳加盟）が協賛しています。

参加負担金は、一ページにつき二千円で、七句を掲載し、句集二冊を配布します。新作・旧作いずれでも結構です。四月十五日までに原稿用紙に「川柳」と明記、住所・氏名を記入の上、負担金を添えて左記の送付先または呼びかけ人宛てにお送りください。ご参加を心からお待ち申し上げます。不明の点は、呼びかけ人にお尋ねください。

送付先 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊

あかつき川柳会

## 予 告

6月12日(日)

広島原爆被爆60年追悼

全日本川柳2005広島大会

10月10日(月・祝)

第11回川柳塔まつり

10月29日(土)

第20回国民文化祭・ふくい2005川柳大会

## 第6回 文学ルート川柳募集

文学ルート（松江市・尾道市・今治市・松山市・高知市）

募集作品 文学ルート（5市）周辺の自然や衣食住・信仰・年中行事等に関する習慣・民俗行事などを題材とする川柳。（未発表のオリジナル作品に限ります）

宿題・応募先（宿題に応じてご応募下さい。各2句）

松江市「橋」「神話」	松江市産業振興部 観光文化課 〒690-8510 松江市末次町86	TEL (0852)55-5293 FAX (0852)55-5564
尾道市「クレーン」「石畳」	尾道市企画部 観光文化課 〒722-8501 尾道市久保1丁目15-1	TEL (0848)25-7366 FAX (0848)25-7293
今治市「燈台」「楠」	今治市教育委員会 文化振興課 〒794-8511 今治市別宮町1丁目4-1	TEL (0898)36-1608 FAX (0898)25-1700
松山市「雲」「太鼓」	松山市総合政策部 国際文化振興課 〒790-8571 松山市二番町4丁目7-2	TEL (089)948-6634 FAX (089)943-9001
高知市「さんご」「闘犬」	高知市教育委員会 生涯学習課 〒780-0870 高知市本町4丁目3-30	TEL (088)822-6394 FAX (088)823-1095

### 応募方法

- 専用の応募用紙、または官製はがき、封書に書かれた作品（FAXによる応募可）。
- 応募作品には「宿題」及び、氏名（ふりがな）、郵便番号、住所、年齢、性別、電話番号等、必要事項を明記してください。（柳号の場合は本名も明記）
- 入賞作品の著作権は主催者に帰属します。応募作品は返却しません。1人2句以内。

応募締切 平成17年3月31日（木）（当日消印有効）

出品料 無料

選考表 平成17年5・6月

選考委員 平成17年7月、入賞者に通知します。（表彰式は、17年10月予定）

（第二次選者）吉岡龍城・塩見草映・橘高薫風  
（第一次選者）武内すみこ（松江市）・角本華峰（尾道市）・田ノ窪岩泉（今治市）  
一色美穂子（松山市）・尾崎呂谷（高知市）

賞 大賞 1点 奨励賞 5点 佳作賞 若干

## 定本 西尾 葉句集

河内 天笑

二月十一日建国記念の日からの三連休は依頼されていた原稿と精力的に取り進むことにして、一番目に「時の川柳社」の雑詠の選評、二番目に「中日川柳会」の誌上大会「群れ」の選評、三番目に「日本現代詩歌文学館」への色紙と小文。気に懸っていたこの三点を無事書き上げてほっとした十四日はバレンタインデー。朝から大きな郵便物が二つ届いた。一つは鳥取市からの「ジュニア川柳・太鼓」の句箋。東が四つで合計一七〇〇枚ほど。一枚二句ですからすごい量だ。もう一つは、「川柳マガジン社」から二日前に電話で依頼されていた「定本西尾葉句集」から百句を選出する旨の内容だ。ジュニア川柳は彫大だから先に葉先生の句集からとりかかる。チョコレイト色の分厚い本とマル一日取り組んで百句を選出。

元旦の一步国旗を揚げに出る

二月十七日に葉先生のご息女古今堂蕉子さんとお会いした際に、この句のことを言いましたところ「父は国旗を揚げるのが好きでしたんよ」と大変懐かしそうでした。「川柳マガジン」の四月号にはその百句が掲載されます。

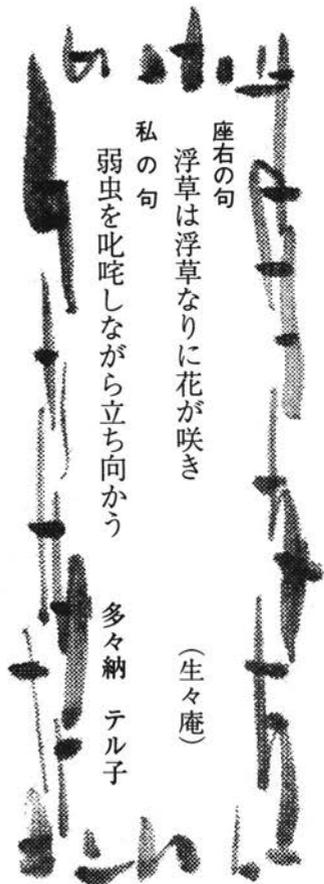
それ以外の『定本西尾葉句集』に載っていない私の好きな先生の作品のいくつかを紹介いたします。

おいしいコーヒを淹れますという野心  
軍歌しか唄えぬ社長憎めない  
更年期薬局真面目にきいてくれ  
さりながら痴漢の心少しもち  
この妻にして口下手の夫たり  
芸者もうベストセラーを読んでいた  
寝ころんで大きく蠅も旅のもの  
好きただけのませてやれと見放され  
呼び捨てにしてもええかと惚れた方  
裏切られても相手を許す齢となり  
邪魔ですかしらと紅一点が来る  
生殖の翅をひろげた美しさ  
気のきいたギャグを女に吐かれたり

### 自選句

揃うたらごはんにしますユートピア  
何が立ちはだからうとも進むのみ  
一所懸命の結果が喜劇でも  
蠟梅をひとひら入れて梅だより  
田楽と地酒ただいま旅の人

天笑  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃



座右の句

浮草は浮草なりに花が咲き

(生々庵)

私の句

弱虫を叱咤しながら立ち向かう

多々納 テル子

## 川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 定本 西尾 栞句集	河内 天笑	：(1)
一字の推敲	仁部 四郎	：(2)
川柳塔(同人吟)	河内 天笑 選	：(4)
川柳塔の川柳讃歌 (3)	木津川 計	：(54)
自選集		：(55)
水煙抄	奥田みつ子 選	：(59)
愛染帖	波多野五楽庵 選	：(81)
誹風柳多留二四篇研究 76	政岡日枝子 選	：(86)
茴香の花	藤井正雄 選	：(88)
「準 備」	永田俊子 選	：(88)
一路集「叶 う」	西原艶子 選	：(89)
「ポイント」		

### 一字の推敲

仁部 四郎



平成十七年は、西暦では二〇〇五年であり、戦後還暦の年である。六十歳は、孔子の言葉で言えは「耳順」である。「人の言うことがよくわかって、すなおに聞き入れられる」という年齢である。

「還暦」「本卦がえり」の年ということである。後の日本の歴史の見直し、政治や経済や教育や文化や社会のあらゆる分野でなされることであろう。「秘史」も明るみに出てきてこれからのことの判断の資料になることであろう。

平成十六年の一月に、衆議院に議席を有する政党の「年頭の所信」のようなものが新聞に出て、日本共産党が、「天皇制の容認」とも言うべき考え方を表明したので私は感心した。いわゆる戦後民主主義の成果の一つであると私は理解したのである。皇室に関するニュースが、平成十六年の重大なニュースとして衝撃的に報道されることになろうとは、私などには全く予想できることではなかったが、有識者を

初歩教室「合併」	三宅保州	90
秀句鑑賞	同人吟	92
水煙抄	田中正坊	92
二月本社句会	坊農柳弘	100
西村早苗氏のご逝去を悼む	恒松町紅	98
長谷川淳さんを悼む	丹後屋肇	99
■エッセー 丸い地球	林昭三	101
川柳塔社各地川柳会代表者会		102
各地柳壇（佳句地十選／小澤幸泉）		103
柳界展望		117
三月各地句会案内		118
■編集後記	楓葉・希久子	120

座右の句

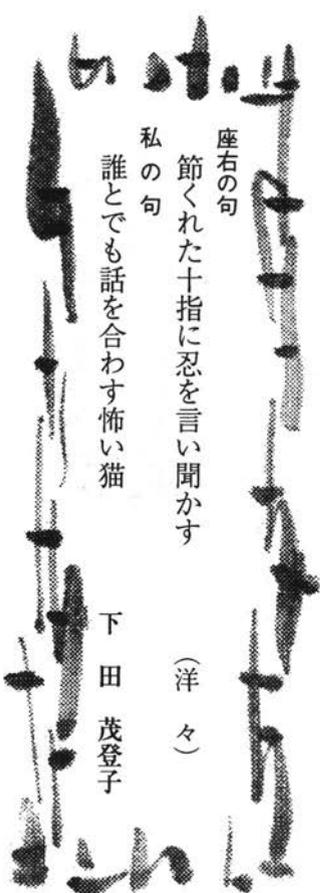
節くれた十指に忍を言い聞かす

(洋々)

私の句

誰とでも話を合わす怖い猫

下田茂登子



集めての論議が、近代の日本の歴史をふまえて深められ、一般国民の間に、風通しの利く見解がまとめられることを期待したいものである。

「耳順」から十年後には、「不踰矩」という年齢に達すると孔子は言うが、これは「耳順」よりも更になりたいへんである。「七十にして心の欲する所に従えども矩を踰えず」とは「耳順」よりもずいぶんと積極的自律的であって、国家の針路にこの言葉を置くことすれば各界のリーダーシップを取るべき人々は途轍もない重責を担うことになるし、太郎や花子も受動的な位置に佇立しているわけにはいかない。

「ふつうの国」という表現の使用頻度が高くなってくるらしいが、この原稿は三月号で活字になるわけで、それまでの平成十七年度の二か月間に、意外な展開があるのかもと考えよう。

春に出る予定の句集の最後の一句に、当初は、「愛それはいわゆる戦後民主主義」を置いた。印刷に出す段階で、「謎それはいわゆる戦後民主主義」に替えた。二句並べようかと実はまだ迷っている。

一字の修正に迷う胸中は、うぬばれて言えば複雑なものがある。私が、十二歳の八月から体験してきた戦後民主主義が、今後の展開という意味では「謎」であることは実感しているが、「愛」といえるものがある、川柳でいえるのかという迷いのうちにある。



河内天笑選

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

久し振り前後不覚の美酒だった  
弾みつつ銀紙剥がす丸いチョコ  
寄りかからないでわたしは頼りない  
見せられぬ写真きれいに撮れている  
正面を向いて不足はよう言わん  
喜びの伝わる文字が跳ねている

京都市 都 倉 求 芽

青空の青さが素直になれと説く  
荒れる神 命まとめてとりにくる  
穢された夜景に徒花さえ咲かぬ  
利用法ひとつでウランもケータイも  
死ぬるまで天引きされてゆく暮らし  
あかあかと無事が炎えてる茜空

宇都市 平 田 実 男

変声期嘘も上手になりました  
結局は自分の嘘にけつまずく  
ハンドルの遊びぐらいの間が欲しい

崩されて積木大人になりました  
つけホクロ仮面の一つかも知れぬ  
表面の錆だけ落し刑を終え

寝屋川市 坂 上 高 栄

黎明の空ふるわして鶏の声  
しきたりが廃れ文化が消えてゆく  
誤字脱字我が一生にさも似たり  
岐路に立つ一人思案の月を踏む  
浦島になつた腕組み山や川  
天災に戦争なんかしておれん

大阪市 板 東 倫 子

マリア様母がわが子を殺します  
皇室も親と息子の悩みあり  
賢いが扱い難いコンピューター  
中国に十三億人目が生れ  
傘寿 喜寿 古稀と兄弟揃いぶみ  
お受験で子を苦しめる親のエゴ

八尾市 生 嶋 ますみ

笑い皺ふやし上手に年をとり  
風掴み風大空を動かない  
破れないで欲しい体の袋たち  
仏さま香華の中のいいお顔  
日に一度公園歩き冬に勝つ  
夜行バスみんな無口で孤独なり

東かがわ市 池 内 かおり

世知辛い世に倅からお年玉  
ケイタイを無礼と思う趣味切手  
天井の海老ほど厚着して暮らす  
大地にも似て暖かい父が好き  
長命のDNAを疑わぬ  
長所つて鼻につく日もあるのよね

富田林市 大 橋 鐘 造

前歴をかくす男の向こう傷  
妻の愚痴相槌うって喜ばす  
過ちをしでかしそうな朧月  
ピリオドの先に転がる僕の首  
決断が遅れ努力を棒にふる  
温い手だきつと私を迷わせる

東大阪市 笠 井 欣 子

コーヒーを少し残して友は去る  
脳低下ゆうべのおかず出てこない  
存在感 時時旗を振るしゅーと

ライセンスもつております主婦という  
この頃は主人へそくりしています  
初忘れもろた年玉雲隠れ

羽曳野市 三 好 専 平

にんげんが冷えて地球が熱を出し  
先生をババアと呼んで平気なり  
ウィルスでコンピュータが死んでゆく  
ケイタイのために生きてる人が増え  
国中が墓場と刑務所だけになり  
冬すみれ人に知られず咲いており

鳥取市 有 沢 せつ子

平穩を祈って吊すカレンダー  
若者の店で若さの気を貰う  
昼食に妻を誘って仲直り  
親馬鹿の流れが孫へ向きを変え  
疲れると荒い言葉が出てしまう  
温暖化悪い予感がしてならぬ

出雲市 小 白 金 房 子

しめかざり付けて団地も里帰り  
元日へ虫干がわり着る和服  
笑い声乗せて港に船が着く  
マナーなどいらぬ農家のこたつ酒  
嬉しさを包む風呂敷胸に抱く  
鍬胼胝に喜寿の祝杯しかと抱く

大阪市 川原章久

オレオレ詐欺俺様チャンと家に居る  
ドッコイシヨ言わんと立てん手と足に

風運ぶ奈良町からの童唄

誘うのは俺かと指で鼻をさす

錆落し頭でこする繩のれん

風のように無灯火でくるひつたくり

鳥取市 徳田ひろこ

一度だけ軼んだ疵がお守りに

半世紀も味の変わらぬ間から

絵画みるように周りの窓あかり

自画像の仕上げに笑くは足しておく

病巣を食べ尽したい鶴千羽

低迷が続くも起き上がり小法師

寝屋川市 森

茜

昨日会った人から友情の手紙

遠い人が一番早い待ち合わせ

先頭を走ろうとして蹴躓く

盲導犬見つめてくれる目の涼し

沈黙は返事のもり咎められ

鉛筆の4Bずっと世話になり

枚方市 安達忠央

世間からけむたがられるほどまとも

何がなくても母ちゃん的笑みがある

大丈夫世間が放っておきません

ケイタイで妻に白菜頼まれる

大事なことと忘れをしてぞっとする

考える力も失せる二日酔い

広島県 藤解静風

さわやかに笑うと生命線延びる

感情線すこし歪んでいるらしい

運命線妻に振り回されている

湯豆腐の湯気をはさんで妻という

やさしさを使い果たしてから逝こう

回り道した分人がよく見える

岡山県 大石 あすなろ

成り行きで吹いた法螺から責められる

新風を若い上司が売り歩く

歴戦の父老い給う日向ほこ

機密費を食べてるらしい門構え

ゴメンネの言葉で消えたわだかまり

酸欠の脳にびっくり水をやる

八尾市 高杉千歩

年金がギリギリ有難いではないか

血液サラサラ手当り次第試してる

新曲をテープで習う春の宵

合鍵を三つ作ったうすら呆け

いいご趣味どころか苦行絵具皿

古地図の道頓堀がなつかしい

富山市 島 ひかる

瑞雲を法名に付く義兄の死  
母の忌を待たずに兄は逝ったまま  
蔵出しの酒に冴えてる祭り笛  
残雪を登る靴ひも締め直す  
足音は一つに揃う山登り

大津市 中 宗明

納豆も寿司ネタならば食べられる  
腰痛へ遊ぶ計画宙に浮く  
古希迎え母さんの味思いだす  
ギブアップまだまだだしな気力あり  
楽々と到達したい白寿まで

京都市 高島 啓子

弱点のところ矢印つけてある  
五時帰宅言い訳せずにする時間  
本物を見ておかないと騙される  
八百円ロツカー子供をひとり仕舞えそう  
ほろほろの仮面を燃えるゴミに出す

亀岡市 井上 森生

何かある荒ぶる神のこの次は  
高い方のケータイを買う好奇心  
毎月のビッグな忘れ競い合う(若い仲間 3句)  
長命は笑顔で気楽そうな人  
百歳にまだ頑張れと声が飛ぶ

京都府 丹後屋 肇

一番鶏ビデオで聞いている炬燵  
くちばしが分けへだてなく餌を運ぶ  
グッドラック水平線に消える船  
怒鳴り合う2DKの緊迫感  
正月の急患唸るホスピタル

大阪市 西出 楓楽

畳の上で転んだことは内緒です  
食べ過ぎるたびに陥る自己嫌悪  
ハガキには建前だけを書いておく  
コンビニのおでんが好きでまだ独り  
三人の息子中年とはなりぬ

大阪市 前 たもつ

元旦へ新婚来の二人膳  
九十はまだまだ若いわが家系  
仮の世だ失敗などは気にしない  
Uターン炭焼く友に憧れる  
わが主治医わがまま言えて美人です

大阪市 古今堂 蕉子

ポランティアへ行つた子の部屋ポランティア  
騒ぐ血も沈む血もあり外は雪  
親の出来比べず子供だけ比べ  
喜びが蒸発せぬよう蓋をする  
米朝の名が出てこずに話止め

大阪市 鶴田遠野

青信号だけです恋の交差点  
人生暮色揺らぐ心で見つめてる  
綾取りがうまい男に見つめられ  
DNA突然変異待つ家系  
笑顔だけ入れている老母の薬箱

大阪市 神夏磯典子

正月の軸 夫と巡った集印帳  
早春の風が車椅子を誘う  
夕食のワイン リッチにしてくれる  
あの人に会うと心臓弱くなる  
もう少し生きねば帳尻が合わぬ

大阪市 津守柳伸

叩いたら開く扉を信じよう  
袖口の重さへ礼を言いそびれ  
健康な友ルンルのエアメール  
水仙が笑うて見えぬ浪の華  
出世魚プリでもてなす思いやり

大阪市 川端一步

古希の春妻看護師に見えてくる  
健やかな明日のために第九条  
人間が地球と心中するつもり  
返り打ち怖くて人は切らぬ主義  
春ヒット松井選手の五千万

大阪市 岡本久峰

仕事しいもって死にたいと思う  
弔吟に耳傾ける遺族席  
不惑の歳幼女に毒牙のばす鬼  
古漬けに目刺し二匹の昼の膳  
みくびつた孫にかぶとを脱がされる

大阪市 津村志華子

ついでんだ夢のかけらが落ちている  
もう少し燃えてみようか八十路坂  
盗み聴きとつても好きな隙間風  
不惑の息子まだ案じてる母であり  
追憶を抱いてアルバムセピア色

大阪市 町田達子

暖冬予報くつがえしてるこの寒さ  
また一つ歳を重ねた誕生日  
公園に凧上げの子も見かけない  
とても気になるこれからの地球  
無心さを元気な雀にあやかるう

大阪市 川久保睦子

二センチの段差に鬼が住んでいる  
天に星地にはいのちの詩がある  
稲光 眉半分を剃りおとす  
ロゼワイン今夜悪女になってみる  
水を得た魚に嫉妬しています

大阪市 玉置英子

電飾の並木よあなたいつねむる  
咲かず場所無いのに種のおまけつき  
電話で頼まれ断りは絵ハガキで  
物忘れ自分に腹を立てている  
これからも一生頼る広辞苑

大阪市 中田 あい子

さと帰りする娘に盛った母の味  
何不自由ない世に邪魔と子を殺す  
サッカーを応援する人ふえること  
阪神の新人投手にかける夢  
よしあしは別にテレビですぐ報道

大阪市 小糸昭子

暖かい生駒連山雨煙る  
夢にみたぐうたら人生あきてくる  
マンションの窓を水滴流れ落ち  
あの靴で日本わかした金とった  
魔女にでもなれば世の中面白からう

大阪市 安達 はじめ

発泡酒神様も酔う秋祭り  
純白のドレスが抱いた明日の夢  
古里のやさしい母は過疎に生き  
縄のれんレースであてた酒に酔う  
失意の日孤独をかくすサングラス

大阪市 小泉 ひさ乃

勤勉な人と一緒に気疲れれる  
ちぐはぐな夫婦コントをして平和  
カルテには神から届くメッセージ  
点滴がザイルに見えてくる命  
煩わしいことも大事にして暮らす

大阪市 渡部 さと美

神さまにぐっと近づくとお正月  
桜まで梅の気合で貫こう  
裸木のなんとすがすがしき勇者  
ひま出来てさりとて朝寝つづかない  
友逝つて街で似た人よう見かけ

大阪市 大川 桃花

まつげにも白髪がまじり出る吐息  
若すぎる遺影に言葉凍りつく  
正装をすると気になる空模様  
歳ですと医者はおっさり告知する  
母が居る以外なんにもない田舎

大阪市 清水 絹子

売り込みの声も際立つ年の暮れ  
おみくじの吉に祝われ当り年  
当り年亡母の色紙の尾長鶏  
地下鉄を上げればさてもどこの街  
梵鐘にふと立ち止まる迷い道

大阪市 井丸昌紀

風切つて歩くスーツがほつれてる

駐車場一度で入れた事がない

屋台にも一言あり酔いがたし

いよいよとなり腹心が横を向く

雪の降る街住めばロマンも絵空事

大阪市 杉澤汀

五十三次今は五駅の三時間

ほれ富士の山よと妻をゆり起す

着いた日からもうお土産の指を折る

偉なつた人に賀状を省かれる

榎山へ送るペンツが泣いている

大阪市 近藤正

博士号見る影もなくフリーター

亡き人のタイムカプセル便が着く

台風禍天橋立虹渡る

公平にやれと晋三口を出し

災が年の漢字になる憂き世

大阪市 奥村五月

枯枝におみくじ結ぶ初詣で

歳の暮れ儲け自慢の友破産

思う事ずばずば言つて仲が良い

使われず幸せですと非常口

トイレまで嫌な点滴ついて来る

大阪市 小谷集一

夢語るとき少年の顔になる

人を恋う父のDNAだろう

幸せに慣れて幸せ見失う

妻がいるただそれだけで暖かい

古稀すぎてから捨石が効いてくる

大阪市 中村叡子

ペンギンが注連縄飾り千支初め

不景気と言うのに群れる福袋

贖札が罷り通つた嫌な初春

豆乳キムチ土鍋料理は冬の美味

老いふたり林檎こうこも小さく切り

大阪市 津守なぎさ

雪解けの道ぞろぞろと兼六園

豪雪もスノータイヤでカニの宿

人なみを縫う赤ボボの人力車

雪ダルマほっこり春の陽に映える

雪吊りのたるみ枝への思いやり

大阪市 松尾柳右子

プレゼントガラス玉でも嬉しいの

その昔ガラス越しでのキスでした

古稀の手と顔のシワ見て自覚する

子育てのヤンママ強い弾んでる

どうしても懐かぬスズメ可愛いね

大阪市 榎 本 日 出

大阪市 熊 代 菜 月

その言葉しつかり貯金しておこう  
サイフよりカード無くして悲鳴あげ  
音読で脳の働き確かめる  
本棚にぎっしりつまり拗ねたまま  
混浴と聞いて喜ぶことにする

大阪市 岩 崎 公 誠

年金を削りましたと着くはがき  
ゼロ地点人とは何か立ちつくす  
猫めしが好きだと美人笑ってる  
そのうちに地球あちこち穴だらけ  
とある日に根掘り葉掘りの辛い酒

大阪市 榎 本 舞 夢

新年もたのんまつせと墓参り  
しゃくなので豆腐くちやくちや切っている  
目と鼻の先で携帯かけている  
出前すし頼んで私忘年会  
初詣で土鈴の酉を二つ買い

大阪市 星 野 きらり

宝くじ猿の終りに賭けてみた  
お供えは早めに下げる好きな物  
悩みごとストレス申へ置いてきた  
金の卵こわれぬように抱く阪神  
文明の利器は持たない後れても

古希すぎてまだ迷ってる人の業  
札節の言葉どこかへ置き忘れ  
カルチャーの教室毎に友がいる  
カルチャーでいつも元気をもらってる  
指折れば失敗ばかり思い出し

大阪市 伊 藤 博 仁

山寺を市になおさせた年賀状  
賞味期限見て仏の菓子も買う  
食器棚娘が整理して妻迷う  
そりゃいかん言つて先生ポケットへ  
絵馬の数少ない宮で頼みこむ

大阪市 西 川 更 紗

バーゲンへ財布が空になる早さ  
暖冬の銀杏師走で黄に染まり  
寄せ鍋で残った野菜片付ける  
未来図を描いて心弾ませる  
縁かつぎ十日戎で福を買う

池田市 栗 田 久 子

鶯の初音と気づき庭に出る  
寒空の中たくましさ見た鳥  
挨拶が凍てつくような今朝の風  
庭に出て生きてますよと日向ほこ  
侘び茶点てひとりくつろぐ昼下がり

和泉市 中川 楓

初詣で終えて安堵のごときも  
来し方は夢 先も夢齒を磨く  
古日記いくたび人と別れ来し  
恥じらいを溜めて蓄の梅たちよ  
悪友に会って元氣をもろてくる

和泉市 西岡 洛 醉

残照を追いかけ子等の夢帰る  
悶悶と午前三時の床の中  
忘却の昨日とならず罪ひとつ  
痛みふと消え三月の空仰ぐ  
賞味期限峠を越えし老い託つ

泉佐野市 山本 蛙 城

大津波ヒト科の驕り撃つように  
GNPの中で居据るパチンコ屋  
老春を煽る記事から明けた朝  
百円シヨップでミニ門松を買う所帯  
野球拳柳人作と言ひ触らす

茨木市 藤井 正 雄

いそいそと誰にも言えぬ出掛け先  
当確を待つてる小豆煮えたぎる  
アンテナが月を串刺ししてる窓  
勇み足フアイトをほめてから論す  
鼻の差の無念が並ぶ屋台酒

大阪狭山市 矢野 梓

ここまでが限界あとは神様に  
やつと終えはつと一息つく祝辞  
二人して探し合ってる置き忘れ  
ばらばらに夫婦でかける趣味の会  
愚痴みんなホットレモンで溶けそうな

柏原市 永浜 加津子

名案が欠伸の中へ飛び込んだ  
五キロ増え喜ぶ友の年賀くる  
側にいるだけでほんわかそんな女  
わが家にも極楽はある仕舞風呂  
離婚する若い勇氣に狼狽える

交野市 山川 日出子

紀宮 見事に薫る菊の花  
大津波インド洋発十ヶ国  
青い鳥に金の卵を頼んでる  
寒くてもだまって金魚踊ってる  
笑顔から元氣が出ると寂聴尼

交野市 森本 弘 風

恙なく今年も開けた除夜の鐘  
人混みに妻が腕とる初詣で  
管理人女便所もチェックする  
本当の事は寝言で言うてます  
笑い声心のシワを伸ばす音

交野市 田岡九好

ドラマ佳境片っ方ずつふく涙  
大銀杏振り立ててゆく異邦人  
大人にはなれないままの古希の春  
日本語が美しかった小津映画  
安らぎの佐渡で開いた初暦

河内長野市 植村喜代

怖いことばかりで終る申の年  
人を呑む地震に逃げ場ない怖さ  
何ごとも話せば心軽くなる  
温かい心がほしいいじめ親  
鏡見る数を減らした皺の数

河内長野市 山岡富美子

リフレッシュ春の風追う白い靴  
新鮮な水はボトルで買う暮し  
冬帽子脱いで私を新鮮に  
恋をする度に女をリニユール  
日めくりの一枚ずつに夢の跡

河内長野市 加島由一

負けながら人は大きくなっていく  
幸せは手に手重ねるところから  
煩惱が弥生の雨にうずき出す  
間の抜けたギャグで女を油断さす  
日本というオアシスで酔っている

河内長野市 村上直樹

台風禍地震禍戦禍大津波  
見えすぎる眼鏡だんだん気が減入る  
何となく安心できる群れの中  
韓流の雪崩わが家もキムチ党  
広辞苑渴く心の常備薬

河内長野市 井上喜醉

スタミナを見せる駅伝ゴボウ抜き  
ひと嵐来そうな妻の売り言葉  
じゃじゃ馬が表彰台で嬉し泣き  
にせ札へ顔を背けるえびすさん  
成長のパンダへ嫁を借りてくる

河内長野市 水谷正子

OLよサーヤの風で目を覚ませ  
改名でない脊椎管狭窄症  
永さんの大往生を読み返す  
久々の電車の席に落ちつかぬ  
チャンスだがブレーキかかる軍資金

岸和田市 原さよ子

やつと余裕出来た頃からボケはじめ  
瑞宝章夫ささやかなる誇り  
母さんを便利に使いまだ一人  
まわらない口で大人をふり回す  
パソコンの便利になれて文字忘れ

岸和田市 岩佐ダン吉

マスコミが騒ぐ弱者を糧にして

お世辞とは思うが耳に快い

九条をいたぶる平和口にして

拘りを捨てたら軽い僕になる

アングルの果てまでもある青テント

岸和田市 土橋房枝

初日記楽しきことを書き残し

成人式自己責任がついてくる

便利さが人間馬鹿にする時代

褒められて妻は手料理手が抜けず

量るのが怖くてのれぬ体重計

岸和田市 亀井皎月

消費税かからぬ切手葉書だけ

よい明日を望めば今日を戒める

別腹を何のこっちゃと言うて食べ

朝一番それが何時か解しかね

死に場所を畳の上と決めたとして

岸和田市 中島寿海

役人も経営陣も謝罪馴れ

天満宮梅に群がる受験生

大津波来ない所に家建てよう

拉致家族 他人の骨は要りません

知らされた自然のこわさ大津波

岸和田市 井伊東吉

不祥事に紅白下降の歌合戦

誘拐犯逮捕も女兒は還らない

三が日過ぎてカレーが欲しくなる

冒瀆の自然に怒り大津波

リズム良い和歌誦じつつカルタ取る

岸和田市 雪本珠子

躓いたおかげで知った人情味

我儘は寂しがり屋の裏返し

変人になればかえって気楽かも

ライバルが居てくれるから頑張れる

曲り角体の声に耳澄ます

堺市 河内月子

これ以上贅沢言わぬ今がいい

お手入れを毎日しても荒れる指

庭に来る鳥の餌場をふたつみつ

防寒着ラッタターで何処へでも

大寒の小枝に梅がふくれ出し

堺市 石堂潤子

いい人を止めたなら角が生えて来た

美しく手入れしてます笑い皺

薬草の風呂たて寒の贅少し

うるさいと家で言われている無口

何も彼も許して青空を仰ぐ

堺市山本半錢

まだ欲があつて荷物がすぐ増える  
お守りは半跏思惟像弥勒さま  
ゼンマイの壊れた猿はわが姿  
病室の夜中を独り覚めている  
眠られぬ舌へコーヒーあめ旨し

堺市神原文

修羅の旅忘れて仰ぐ初日の出  
水仙に自己陶醉のはなし聞く  
悔い多きわたしを照らす初茜  
正直になろうなろうと酒を酌み  
寒明けに深紅のパジャマ選っている

堺市近藤豊子

わた菓子屋の屋台へならぶ父と子と  
わたあめふわふわ忘れたゆめのよう  
かえりみち空のわた菓子あかねいろ  
ひなぎくのしずしずならぶプランター  
球根はまだ夢の中みぞれふる

堺市源田八千代

寒空に蠟梅香る初詣で  
三世代 十人揃うちゃんこ鍋  
大運氣黄色財布で験担ぎ  
一年生自信たっぷりカルタ取り  
五臓六腑七種粥で休ませる

堺市西村りつえ

梅さくら約束多い春の章  
梅干しの皺は知らないホーホケキヨ  
初物を次次食べて生きのびる  
でこぼこ道老いの気合いでかけ抜ける  
重い命一氣に奪う大津波

堺市矢倉五月

口火切る役です後は任せます  
関取りの眼鏡優しい顔になる  
気まぐれに与えた餌で慕われる  
メール交換サプリメントにして元氣  
夫より家電頼りの暮しです

堺市和田つづや

坊さまに風邪いだいた年の暮れ  
生きたいと思う感謝の証しから  
愛情の振れに爪を噛むばかり  
詫びる気のマスクメロンを提げている  
ほどほどの冒険心を持って古稀

堺市柿花和夫

雪の夜は女将がお酌してまわり  
寒行の顔で続けるウォーキング  
父親のギャグを寒いと言う勿れ  
湯豆腐に上中並のある老舗  
豹柄のスーツ女の戦鬨着

堺市 志田 千代  
待ちながら待つてる人のウオッチング  
これ以上迷うと彼を傷つける

孫の手で猫の背中もかいてやる  
ポチが死にそれから散歩しなくなり  
歩道でも自転車がそのけと言う

堺市 村上 玄也

ルビ振ると優しい顔になる漢字  
追い風が希望を野心へと変える  
本性か変節なのか説を変え  
濡れ衣を乾かせぬまま忘れられ  
屠蘇横目 お粥で祝うお元日

堺市 宮本 かりん

脇道へ一人で逸れる面白さ  
座りこむわたし口先だけ達者  
七十路入りせつかちの芽が伸びてきた  
しあわせと思う小さな傘の中  
渋滞へ嘔みつきそうな大型車

堺市 齋藤 さくら

小包を開ける子供の顔浮かべ  
味方にはならぬが喧嘩聞いてやり  
元気やと言うたあとから風邪を引き  
かあさんが元気でみんな元気です  
放つといったアロエこんなに株太り

堺市 國見 蘭香  
何事かあつて身内が近うなる  
馴れぬ床猫が添い寝をしてくれる  
型破りの腕白未来が望ましい  
人間が退化しそうな便利な世  
神様に笑顔いただく初日の出

四條畷市 吉岡 修

わっはっはなんやのあんたほっほっほ  
宿替えと言つてた頃は軽貨物  
ライバルに譲られてたと今わかる  
神さまが心開けばすむ戦  
風向きでいつでも笑うつもりです

吹田市 山本 希久子

啓蟄や忘れたきこと顔を出す  
信ずれば願いは叶う青いバラ  
黄水仙春は足踏みしてじらす  
古稀の坂プライドも捨て欲も捨て  
余生を楽しく足し算ばかりする

吹田市 太田 昭

褒め足りぬ男に女そっぽ向く  
爽やかな少女の嘘は裁かれず  
はやり医者愚痴をたつぷり聞いてやり  
戎っさん書き入れ時と笹を売り  
無情にも訃報吐き出すファクシミリ

吹田市 穴 吹 尚 士

残照と承知の上で燃えてみる  
言いやすい男に無理を押し付ける  
ポーナスを押し戴いて取り上げる  
散歩するつもりで出たがパチンコ屋  
肌合いが似ているらしい貧乏神

吹田市 瀬 戸 まさよ

千年の歴史を刻む京和菓子  
国産に凱歌肉類青果類  
美味なのに店頭のはげ見栄えせず  
元旦はホテルでお屠蘇核家族  
淡々と器械が診ます若い医者

吹田市 須 磨 活 恵

またひとつ齢重ねて古希の春  
一病に負けまいしっかり背を伸ばす  
くよくよとせずに生きよと冬の梢  
なるようになるさと眼鏡強く拭き  
寒鯨の青さふるさと海のいろ

吹田市 早 川 棲 世

土俵燃える古武士の顔と農の顔  
マスコミと世論に可燃性部分  
キリストも釈迦も信者はいくさ好き  
師匠存命で師の芸越えられぬ  
抱いて逝く持病はひとつ秘事いくつ

吹田市 岩 屋 美 明

内緒ごと大きな声で聞きなおす  
落ちてからのんびり空を見る風  
ふる里を丸ごと縮めたさんま鮎  
ケータイで火種をまいている雀  
風向きが怪しくなつて席を立つ

吹田市 大 谷 篤 子

幸せが漏れそうなので窓をしめ  
或る別れ駅の時計の無表情  
聞きにくい耳も人の輪丸くする  
待つ五分険しい顔になつてくる  
夜明け前月がベッドにしのび込む

吹田市 木 下 敏 子

仕来たりが緩んでいます注連飾り  
添え書きに温もり貰う年賀状  
あたたかいリズムで刻む七つ草  
勘違い共に笑えるひとといる  
偽札に笑顔忘れた恵比須さん

吹田市 野 下 之 男

世間には優しい妻で通して  
指切りを忘れてあの子嫁に行き  
家計簿は足りそで足りん癖を持ち  
ヨン様と似ても似つかぬ鏡見る  
熊達の初夢に出る柿の山

大東市 児玉 蛙

辻褃を合わすと突かれ近寄れず  
ブライドを捨てると人は寄つて来る  
人の中溶け込むすべは聞き上手  
秋風に浮気心を見透かされ  
冗談が本気になって物笑い

大東市 南原 正和

ストープに寄るな触るな赤ん坊  
鬼の父菩薩の母で子が育つ  
年一度花買う妻の誕生日

松葉川月に網打つ漁夫の影  
今もまだ墓掘り続くイラクの地

高石市 浅野 房子

私にも御先祖様という味方  
この世での業を果して行くあの世  
毎日を情性で生きていいいか  
痛む歯があつていいねと言われたり  
成るようになるとは甘い考えだ

高槻市 瀧本 きよし

寺参り白寿迎えて数が増え  
これ幾ら百円シヨップで聞くおひと  
職に就かず心配嵩む末息子  
養つてくれるはずの子フリーター  
郵政より人口増やす策急げ

高槻市 田中 千莞子

レシーブのミスで逃がした遠い恋  
バージンロード尻尾隠しのドレス着て  
魔女だって鴨の水かきしてるのさ  
今年こそ翔んでみせると籠の鳥  
ペラペラとボロが剥がれる生半可

高槻市 左右田 泰雄

案内図頼りに急ぐ忘年会  
夕焼が催促してる寺の鐘  
満面に笑みをたたえた有頂点  
災いの年締めくくる大津波  
カウントダウンすませてからの初詣で

高槻市 江原 秀夫

この指とまれとまったままの半世紀  
羽搏いて去年の災い追い払う  
ゆく年くる年愛と情けの夫婦旅  
去年今年赤が濃くなる夫婦傘  
実と虚のバランスもよし夫婦坂

高槻市 乙倉 武史

人情の善意に縋る義援金  
人倫も堕ちて偽札横行す  
偽札に精巧コピー機の嘆き  
熊さんよ空腹抱え眠れたか  
春めいて馥郁梅の便りきく

高槻市 執行 稲子

高槻市 井上 照子

悩ましい姿危うい向かい席  
招き猫千客万来待つれのれん

片言の童に還る母の病み

お下がりが気楽に着れる貧乏性

野仏に懺悔の涙罪一つ

高槻市 傍 島 克 治

孫には恵比須私には夜叉妻の顔

お役に立てずと萎れる絵馬佯し

恥ずかしい明るすぎるよお月様

喜寿近し時効にしてもいいじゃない

包み隠さず話せばきつと嫌うでしょう

高槻市 西 谷 治三郎

鬼も留守することもなく昼の酒

につこりとえくぼを見せて断わられ

子捕り居るばあやの言うてた世に戻り

振り込め魔取引きしたい銀行屋

ふところはデフレ税金インフレに

高槻市 生 田 義 一

よかつたね笑顔や嬉し紀宮

師走の夜おでんの匂う裏通り

幸せを謝しつ晦日のそばを食べ

妻と来て甘酒祝う初詣で

添え書きがあつて嬉しい年賀状

腹わつて話したことで切り抜ける

仲人の大阪弁でよりもどす

過去ひとつ告白してのわだかまり

握手して相手の腹をみぬいてる

指導者の鞭も度胸のいるところ

豊中市 江 見 清

酒飲んだ男は頼りなくてよし

骨粗鬆おじゃこもようけ食べたのに

ひらひらのお賽銭です今年こそ

楽をするための苦勞に精を出す

酔うている女も拝む法善寺

豊中市 吉 田 あずき

初光 荒れた地球はどんな色

天界にやがては消える子も孫も

UVカット今は日だまり追いかける

着ぶくれて老猫めいて日向ぼこ

おいしさに今日のいのちを噛みしめる

豊中市 安 藤 寿美子

八十歳身体障害者四級

八十歳遺族年金ありがたや

八十歳義歯は廉い方にした

八十歳寝酒日本酒一〇〇CC

八十歳あと十年は生きてやる

豊中市 山門タミ

あくせくと正月迎え食べて寝て  
父さんの時計この手に生きている  
屋敷跡あつという間に家三軒  
幸不幸何が人生変えるやら  
年賀状いろんな酉の品評会

豊中市 藤井則彦

十円の切手不足を根に持たれ  
来年も来れますように初詣で  
寝不足の妻に濃い目のレモンティー  
愛妻の弁当開く部屋の隅  
ケータイで聞かぬモシモシさようなら

豊中市 岸田知香子

街の中人も車も帰省中  
初参りふりかかる雪お神酒受け  
御利益はいらぬと万札にせの札  
持ち切れぬ土産嬉しいUターン  
福袋一重二重と店囲む

豊中市 水野黒兎

鬼は外せつせと産業廃棄物  
グチばかり聞いて屋台の椅子軋む  
シンデレラ ガラスの靴に足が冷え  
子をいつも見守る母の目が仏  
カーナビの妻うたた寝の春の旅

富田林市 池森子

棒線で抹消されたのが本音  
天国の亡父へ梯子をかけている  
計算も打算もあつて割り勘に  
冷徹な方程式の中に住む  
新春の笑顔をもらうもみじの手

富田林市 片岡智恵子

暖冬と言われ寒波が牙をむく  
度忘れの女優の名前三日ぶり  
パトカーの前で優秀ドライバー  
金婚式やつと揃ってきた歩幅  
タンポポやスマイレを避けて除草剤

富田林市 中井アキ

かしわ手の中に確かな春の音  
挑戦のたびに限界知らされる  
傷口にあわあわ浮いている未練  
つつがなく食べて吐息の出る独り  
みな去んで七草粥の祝い箸

富田林市 中崎深雪

木蓮の芽一日ごとに膨らんで  
春色のカーテンに換え蝶をよぶ  
天変地異 熱き信仰何になる  
春だもの避けてた色も溶いてみる  
おじさんも愛の呪文で若返る

富田林市 藤田泰子

趣味多彩極めたものが何も無い  
友が逝き一入寒い冬になる

大いびき たった二キロの小犬です

ワンちゃんと同じレベルで戯れる

身動きができないほどに着ぶくれる

富田林市 稲川恵勇

安心の手駒たつぷり子が五人

天罰かバナナの皮で転けました

掃除機が当たりちらした不意の客

雑草の意地青あおと天へ伸び

混浴と知って長湯の風呂ざらい

寝屋川市 江口度

カンニングするにも金が要るらしい

もう届く頃とポストの前で待つ

信じても信じなくても話しく

振り込め詐欺もだんだん魔法になってくる

いつの間にかのろけ話になる囲炉裏

寝屋川市 山本三郎

朝だよと犬が催促する散歩

永遠にさらばさらばと柩車去る

深呼吸生きる力が湧いてくる

青空に妻のハミング布団干す

風邪薬効いて今夜は良く眠り

寝屋川市 平松かすみ

おかげ様削る歯がありひなあられ

羽根つけて飛んでいるのは夢の中

アドバールン揚がり小売りが泣いている

赤ちゃんに好かれる顔でよかつたわ

流し目の桜吹雪を追いかけた

寝屋川市 太田とし子

どうやら無事にお餅祝った小正月

悪友は十日もたてば久し振り

伝統の料理に飽きて外歩き

母さんの人形になるお振袖

災害地やがて咲くだろ梅さくら

寝屋川市 富山ルイ子

軒借りています恩義は忘れぬ

褒められて嬉し七つも七十も

今年また四季駆け抜けていくようだ

古希すぎて元気な笑顔絶やさない

心まで華やかにしてくれる春着

寝屋川市 籠島恵子

蠟梅は咲いているかと遠回り

うっかりと一日早い七草を

堪忍袋の底をときどき縫っている

一言が根雪になっっているようだ

公園に明るい未来笑い声

羽曳野市 安芸田 泰子

長電話女同士の憂さ晴し  
言い訳で自分の傷をさらけ出す  
後五年は生きるつもりの日記買う  
雑草と知らず大事に育てあげ  
ネジ巻けばそこそこ動く古時計

羽曳野市 吉川 寿美

ハードルを越えたい喜寿の羽繕い  
如才ない男本心覗かせぬ  
月半ばやおら取り出す広辞苑  
年齢に比例 度忘れ物忘れ  
四代の御世生きぬいた骨拾う

羽曳野市 酒井 一壺

ああ夫婦 鎖ではない絆です  
音立てて崩れ去る日の砂の塔  
マンネリを崩して会社再建す  
ろくでなし群れを飛び出す気概なし  
人間が群れると自分見失う

羽曳野市 徳山 みつこ

留袖がゆるり味わう梅毘布茶(長男再婚 3句)  
バイクで五分息子一家がいる安堵  
何よりもまず嫁さんと手をつなぐ  
解約をするのに未練ない利息  
イラクから全軍スマトラへ回れ

阪南市 森村 美花

気がつけば平和崩れる音がする  
のり越えた石段の数いくつだろう  
大胆な告白花の便箋で  
ひよいと言う愛の言葉は信じない  
葉には頼らないのが私流

東大阪市 谷口 義

蘊蓄をかたむけながら餅を焼く  
キッチンに立つと本気になる男  
ちゃらんぽらんなことを教えるおばあちゃん  
元栓を確かめてから夢を見る  
こだわりを捨てて表を掃いている

東大阪市 安永 春

思い出し笑いの中に潜む夢  
寒いふところ温いところでカバーする  
夢叶い朝日夕日を見て暮らす  
信じても返って来ないブーメラン  
脳の錯笑うて落す渦中に

東大阪市 中岡 妙

霜柱踏んで初日の出を拜む  
賽銭が人波越えてストライク  
おみくじの恋愛運にときめいて  
温泉地きつと夫婦でない二人  
歩幅合う友と語らう人生譜

東大阪市 北村賢子

生きるため離婚する女出来ぬ女

お月様地球のこことを見守って

幸せをメモるノートを買ってある

老父のふところいつも葉の匂いした

ご馳走へ心奪われ聞く祝辞

東大阪市 指宿千枝子

来る年へ心を洗い墓洗う

死にたいと贅沢言うて生きている

わたくしも生きとし生ける仲間です

不足がちな暮らしに馴れて恙なし

若作りしてもお席を譲られる

枚方市 海老池洋

卒業証書手に振り返る時計台

弱気と強気 棒立ちと仁王立ち

ポールぎりぎり右と左の運不運

夫婦喧嘩きつちり勝負つけぬまま

のつべりの瓜でゴーヤに憧れる

枚方市 荘司弘之

一年の活力もらう初日から

足るを知る人はあつさり初詣で

失敗談どんだん銚子空いていく

だんだんと世渡りうまくなるペット

初風呂やお腹の中も洗えたら

枚方市 森本節子

旧友と賀状で出逢うだけとなり

氏神様は歩いて程よい距離にあり

雪のこる鷲林寺の手すり冷たく

いらぬこと聞こえぬ耳で幸いする

冷気のなか春を感じる日の光

枚方市 二宮山久

孫台風去って我が家はしずかなり

新春の川面をゆらす万華鏡

初春を祝う両手に雪がふる

ほら春が来てます散歩のつくしんぼ

年金へねだる笑顔のお年玉

枚方市 宮川珠笑

つつこみをボケで受けあい古稀夫婦

妬いてなどいますすかいなど古稀の妻

人に貸す軒をつくらぬ家が増え

子の逝去知らされぬまま介護棟

三世代私の靴が隅にある

藤井寺市 高田美代子

鳥ばかり書いて一月が過ぎる

独楽回しくらいは出来るおばあちゃん

今年また日記替わりのカレンダー

マンションに住んで雨漏りなど知らず

時時は歳を忘れてみるもよし

藤井寺市 太田 扶美代

ラブソング耳はあなたにあずけよう

みぞおちに私だけの手榴弾

おだてると少しぐらいはまだ走る

古い恋にこだわる情緒不安定

怖いなと思うおんなの透明度

藤井寺市 中島 志洋

人生の節目を飾る花と酒

自惚れがあるから続く趣味の道

気取らない後ろ姿に付いてゆく

出無精を優しく誘う花便り

道ならぬ恋に燃えてる彼岸花

藤井寺市 楠 昭子

板さんに命あずけてふぐ料理

母さんの匂いすやすや児はねむる

追伸にいつも川柳書いてくる

外国の大豆で福は内とまく

故郷にいつの間やらビルが増え

箕面市 出口 セツ子

青春を冷めてる子らが気にかかる

大切な時間謳歌をして欲しい

落ち込んだ時優しさが身にしみる

老いだらう喜怒哀楽が失せてくる

フィーバーができず終った誕生日

守口市 結城 君子

初春のミスはアハハで済ますなり

オニババの顔も鏡へして見せる

八十を過ぎても誤字に気付きます

八十の影を見つけてこれ私？

正月料理の本が机であくびする

守口市 井上 桂作

長生きに夢は若さのエネルギー

物忘れ勘とり戻すすべもなく

やりかえす言葉少なに胸おさめ

お人よし世話やき過ぎて嫌われる

鉄塔も山の紅葉の絵にそまり

守口市 石森 利昭

事も無し正月が来て春近し

ペン先が尖り過ぎると敵になる

旅客機を見上げ平和な初春の空

勝つ事は簡単でない妻である

時刻表一つ楽しい旅プラン

八尾市 吉村 一風

なるようにしかならんわとビール干す

からくりを知らぬお酒の有頂天

夕焼けを呑んで明日の夢えがく

平凡に生きる 口では楽に言え

おでんの湯気話を丸くしてくれる

八尾市 宮崎 シマ子

いい夢はバラの雫に漬けてある  
残雪のそこだけ溶けて露の臺  
縁あつて釣つた魚に餌をやる  
おもしろくなつて夫婦がやめられん  
女みな胸に抱いてる裏おもて

八尾市 長谷川 春蘭

秋灯やすつぽかされてつもの恋  
恋文は要らぬこたつの二人きり  
来る来ないきつと来るはず雪催い  
着ぶくれてワイン売場に迷いけり  
雪が降る罪ある恋を消すように

八尾市 村上 ミツ子

笑われて担がれてたと思ひ知る  
筋がいいなどとお世辞を言われても  
被災地へ広がれ温い支援の輪  
わがままなヒップだんだんでかくなる  
ラジオからわが名流れたお正月

八尾市 宮西 弥生

人の世にもまれた札の皺のばす  
いい風が吹いてる出番待つ蕾  
転んでも病んでもひとり絵の中で  
おだてたらどんだん生きる力こぶ  
歳月が離れたところを引き寄せる

八尾市 内海 幸生

居直つて生きるか病と手を組んで  
知らなんだ知つたときには遅かつた  
フラメンコ女は怖いほど元気  
無礼講 下戸の視線に蹴躓く  
バカンスの絶頂へ牙を剥く津波

八尾市 井尻 民

受け皿の溢れた酒にオチヨボ口  
逢いに行く日はスキップになる心  
振り向けば夫婦茶碗に愛と憎  
いたわりと自虐を胸に合わせ持ち  
恋人のドレスアップを見る動悸

八尾市 山本 宏至

どんぴしゃの言葉思わず膝を打ち  
勘定をはらう所が出口です  
無視されて男の意地が顔を出す  
老い二人ひとつの皿をつつき合い  
金婚でやつと愛の字書けました

大阪府 前田 ゆい

子を抱けば優しさ戻る女の目  
機転利く孫秀才と勘違い  
痛いとは言わぬ老木切る疼き  
携帯の鈴をつけられババも子も  
最後かも知れぬ握手に想い込め

大阪府 澤田和重

順路かく矢印神に近くなる  
作られた笑顔の裏を読み切れず  
機転さく嫁を母さんもて余す  
いつて来な優しい人に気をつけて  
傷つけぬ言葉探しにくたびれる

大阪府 桑田ゆきの

嘘書かぬ日記と決めて心澄む  
湯ぼてりにマツケンサンバ踊り出す  
酉年のばたばた癖が手と足に  
七草を凶鑑で教える若い母  
探梅に北野の牛の腹撫でる

大阪府 米澤俣子

ひといろを足して少うし若返る  
ひそやかに五分咲きほどの恋をする  
空元気若さに嫉妬してただけ  
ここだけの話がやたら胃にたまる  
庭の花四季のけじめをつけてくれ

大阪府 野田栄呼

十三の孫に連れられ法輪寺  
昇降の飛行機孫と車窓から  
炬燵守り口も守りして脂肪ふえ  
コマーシャルないから見てるNHK  
バイトの娘送迎してる甘い親

大阪府 初山隆盛

神苑をさくさく歩む寂の刻  
鐘いくつ撞けば災い去つてゆく  
バンドラの箱へ災い封じ込め  
襖越し母の作った咳払い  
回遊魚自由の海に輪を求め

神戸市 山口光久

井の中の蛙もでかい夢を見る  
生き生きと明日に続く太い足  
火の車だけど笑顔は絶やさぬ  
躓いた小石がヒント喋り出す  
ぬるま湯に浸っていると鈍りだす

神戸市 山口美穂

臉のうらに震災前の家がある  
真夜中に目覚め震災の傷撫でる  
自他共に老いを認めて古希の坂  
庭を椿が飾ってくれる寒の入り  
千両万両鳥がきれいに食べてくれ

神戸市 伊勢田毅

古希過ぎて夫婦しみじみ屠蘇を酌む  
古希過ぎて日々アンテナを磨いてる  
古希過ぎてなお新しい趣味探す  
古希過ぎてふと巡礼の旅想う  
古希過ぎて酒量規制を試みる

神戸市 木村 貴代子

今もなお二階から呼ぶ君の声  
あなたへの手紙書いてる日記帳  
夢描き夢追いかけて年齢忘れ  
神様が結んだ糸もよくほどけ  
淋しさの極みにマンガ読みふける

神戸市 池田 善守

災を福に変われと初詣で  
初詣で偽札神は見抜いてる  
屠蘇気分かき消してゆく消防車  
初詣でたこ焼き鯛焼きリンゴ飴  
大切に過しているか今の今

芦屋市 黒田 能子

プライドの背すじ真つすぐ伸びている  
なじんでる我が家の匂いくつろげる  
センスよく幸せを盛る白い皿  
諍いのもととはつまらぬ勘違い  
世間体気にせず嫌なことは嫌

相生市 中塚 礎石

不況風リストラの顔もてあそぶ  
傘寿からローカル線に切り換える  
ジーンズの膝の穴から美がのぞく  
スランブになつたと自慢気に話す  
聖戦というて互いに墓標立つ

伊丹市 山崎 君子

ボタン雪庭は絵となる大晦日  
お年賀にひとりひとり命あり  
七草に合わせて届く里の匂  
ビンゴ優勝まさかまさかのお年玉  
肩でサラサラ福笹ゆれて春近し

川西市 米原 雪子

贋札が初詣でする世の乱れ  
守られて育った恩は忘れ勝ち  
曾孫には何でもなぜと攻められる  
いそいそと料理並べて笑顔待つ  
馬耳東風自分のペース守る友

尼崎市 田辺 鹿太

めでたさもそこそこでよいお正月  
歯を出して笑う世相よ早く来い  
今年から自分を責めるのは止める  
ご無沙汰の道頓堀を歩こうか  
差らいのあるうちはまだ救われる

尼崎市 山田 耕治

電話にはいつも元気な声を出し  
これちよつとはでかか聞いてみる遺影  
三回忌美容院からまだはがき  
女房の噂ばなしの人にあう  
二世帯の下でめざしを焼く匂い

尼崎市 軸丸勝巳

百八つわが煩惱に撞き足らず  
あの人のあの字懐かし年賀状  
初夢を見たいバジャマはサラを着る  
駅伝の生のドラマにテレビ漬  
風揚げに昭和が残る河川敷

尼崎市 長浜美籠

何もかも忘れた日よ速度一〇〇  
手に残るもの何一つなく多趣味  
待ち合せブーツ脱ぐ間がじれったい  
ポリシーは曲げずに行こう粉雪舞う  
成り行きに押され私を見失う

尼崎市 春城 武庫坊

柚子風呂につかり心をよく洗う  
酉は空 陽は燦々と二人生き  
戦死した友等の加護か八十路坂  
お目出度く四代揃い鍋囲む  
初鏡はつきり見せる腹の線

尼崎市 春城 年代

梅かおる頃慶びごとのふたつ三つ  
酒粕を焼くふるさとに親はなし  
年頭の誓いは老いの初ごよみ  
大正生れに人恋うる唄哀しかり  
ふんざりをつけて明るく見送ろう

尼崎市 松下比ろ志

枯れ葉にも春に托する思いあり  
親離れ子離れみんな独り立ち  
独り立ちしてから目線高くなる  
苦も楽も夫婦両手で分かち合う  
トップもピリも孤独の思い変らない

川西市 西内朋月

あの世からサインをくれる流れ星  
お喋りの群れを横目に飲んでいる  
飲み足らぬわたしを誘う途中下車  
どん兵衛の蕎麦で聞いている除夜の鐘  
嫌煙の波に負けじと吸っている

三田市 北野哲男

百円を手付けに欲な初詣で  
枯れてなお からの棘バラの棘  
矢印の先に香典受けがある  
立呑み屋泣き上戸には不向きなり  
早技でゴキブリ叩く写経の手

三田市 久保田千代

埒あかぬ話にさっと口火切る  
下戸にでも酔いつぶれたい時もある  
波風にもまれて強い赤い糸  
金星をさらい乱れがない呼吸  
温もりのまだある椅子を片付ける

西宮市 西口 いわゑ

秒針に追い込まれゆく午前二時  
わくわくと怖い秘密と手をつなぐ  
始発から最終までの家出なり  
責任を果たしたように菊くずれ  
わたくしをまとめた一冊のノート

西宮市 緒方 美津子

春飾る紙のひいなどランドセル  
電話せぬ夫が払う電話代

あした会う人とこんな長電話  
クラス会おしゃれ談議も杖のこと  
何となくどことなく似て葬の客

西宮市 秋元 てる

ゆるんでた絆を締めた大腸癌  
癌手術強がり母子の減らず口  
泣き言の代りか老母の喧嘩腰  
朝毎にミルク届ける子は六十  
庭のものの葉味にひとり蕎麦すする

西宮市 菊池 トミエ

回り来る早十年のルミナリエ  
今チャンスその一言で始められ  
責任者ずらり並んでお詫びする  
口火切る勇気を出して話合い  
夢を見た四国遍路の春の道

西宮市 坪井 孝一

鈍行の旅で無欲のおまけ来た  
乙女座の父は悔いずに夢を追う  
酒瓶の底にはいつも天女の顔  
夫忘れバツハの券を見せに来る  
父の日を毎月あげる頑張って

西宮市 牧 淵 富喜子

バラ一本仏にこつと笑わせる  
裸木に窓のふたつは閉めたまま  
うっかりと子供に声をかけられぬ  
通学路ぐらいは立って上げれそう  
カレンダーの丸まり取れて宵えびす

西宮市 井上 松 煙

年賀状趣味の友から増えてくる  
初詣で気休めに行き風邪を引く  
触れ合って世間の風に乗っている  
坂道が四キロ瘦せる言っている  
結婚より自由気儘の独り者

西宮市 門谷 たず子

シクラメン炎える形で咲いている  
表札の子の名信じてついて行く  
元気におなり餅がふつくら焼けました  
鉛筆を五本削るとわく意欲  
レモン一きれ浮かべて午後の贅とする

西宮市 山本 義子

生き給え学び給えとさくら咲く  
野あざみの群生地まだあるかしら  
野水仙に生きざま学ぶことばかり  
菜の花畠ここは戦の跡なりき  
野のつつじ甘えは疾うに捨てました

西宮市 亀岡 哲子

もの忘れしたぶん生きる知恵がつき  
夫からきれいと言われ夢一夜  
大声で歌うところ満ちてくる  
とも知らずあなた恨んだ日を悔いる  
お国なまり優し史跡のボランティア

姫路市 古川 奮水

点灯に歓声あげるルミナリエ  
飲んで食い歌って食うて寝正月  
友が来て相変らずに爛つける  
軒してテレビ消されて腹立てる  
初詣できつねうどんで暖をとる

兵庫県 大谷 幸次郎

お値段の事には触れぬ招き猫  
外されて独りが好きと見栄を張る  
白髪にも新しいのが生えて春  
かるた取り昔の記憶光りだす  
碑が詩の心を光らせる

奈良市 天正 千梢

駆け込み寺敷居がひくうなりました  
八十路坂少うし闘志ふところに  
鍵だけを預けときたい人が出来  
フラメンコ踊る女はおおがらで(スペイン)  
ブラボーと帽子の中へコイン入れ

奈良市 米田 恭昌

回り寿司さえ割り勘の元夫婦  
もじもじと言いくそうにのろけてる  
春日参道出店風景見て飽きず  
ヤキトリの出店に並ぶ外人さん  
射的場ガンマン気取る茶髪の子

生駒市 飛永 ふりこ

雪の精 妥協したらと仄めかす  
胃の中がごった煮になるバイキング  
欠点をずばり言ってるお人よし  
三箇日わんさわんさとお賽銭  
三社参り福を追っかけバスツアー

香芝市 大内 朝子

今年こそ平気で生きてゆく勇氣  
災の口の御祓いしてもらう  
親離れ子離れ出来ぬまま迷路  
吹っ切った未練がまたも舞い戻る  
心機一転梅一輪に気を貰う

榎原市 居谷 真理子

新春に花の名ひとつまず覚え

えじゃないか恋に恋でもえじゃないか

煎餅をバリバリ噛んで晴らす鬱

大海を夢みる一滴の誇り

老人がふえて大人のふえぬ国

榎原市 安土 理恵

春の七草すらすら言えてほっとする

情にもろい女 近ごろ減ってきた

自己流に生き方円に随えず

洗い髪逢うた余韻は流せない

栗ぜんざい苦い恋などもうやめる

大和郡山市 坊農 柳弘

蘇生する余白残して春に立つ

母系女系祖母から孫へひな飾り

フィクションを重ねざんげの写経堂

子午線に佇って弥生の風を読む

酒たばこ止めてやる気を裏返す

奈良県 渡辺 富子

大津波見ているふたり掘炬燵

偽札の賽銭神も怒り出す

認知症の母迷い込む里の道

五臓六腑の悲鳴を聞いているスキヤン

逃げ足の速い月日を追うわたし

和歌山市 桜井 千秀

忙中閑亡夫と昔話など

一人遊びで覚えたコツで生かさされる

赤い花部屋ごと活けて淋しがり

言い放題で曝け出している若さ

出しゃばると冷たい視線遠くから

和歌山市 福本 英子

新春の雑談酒の量内緒

心付け弾んでいます松の内

紅白の見過ぎで逃がす初日の出

伝説でなかつた津波牙をむく

わかやまの雪だ雪だと騒がしい

和歌山市 牛尾 緑良

絵手紙の茄子が初夢乗せてくる

冬眠を終えたが春が眠くする

人並みという一線が難しい

手品師の誘いに乗ってみる小銭

肩凝りの原因だろう自閉症

和歌山市 木本 朱夏

コーランの響きしらしらと夜明け

謎はまだ解けず微笑むスフィンクス

ピラミッドの天辺欠けて王は不在

さらさらとリビア砂漠に風の声

エジプトの背骨悠然たりナイル

和歌山市 玉置当代

元氣出しなはれと背なを二つ三つ

空元氣出して踏ん張る木守栞

まだ半年 もう半年の遺影抱く

木枯しに孫のパワーを貰っている

足早に下っています老いの坂

和歌山市 榎原公子

ライバルの背中へ闘志失わず

疑問符を握りしめてる掌

疑問符が解けて急場の間にあわず

元氣な土だから野菜も人間も

美女ばかり捜す夫のカメラアイ

和歌山市 古久保和子

野良猫に餌やる人と友だちに

思考回路に接触不良あるらしい

寄るな触るな痺れた足が沸点に

溜め息でガラスが曇るシヨーケース

駄菓子屋にプラスチックの竹とんぼ

和歌山市 楠見章子

すれ違うニューモードから春もらう

捨てられぬ性でどんどん着ぶくれて

気取り屋の男パイプを離さない

寄付集め見栄っ張りから回される

襖の傷かわいいシール貼っておく

和歌山市 田中みね

めでたさは達者で拜む初日の出

お疲れは雅子妃だけと限らない

頭痛に肩凝り二千五年も変わりなし

なにをあほな死にたいなどと聞く電話

罵声にも動じぬ器大きいな

和歌山市 武本碧

初笑いジョークが回る夫婦独楽

見合写真 親の欲目を添えて出す

まだ蓄黄色い口を尖らせる

たつぷりのメニューがあつてまだ不足

人生のつるべ落としに急かされる

和歌山市 細川稚代

小正月うれしい便りくれました

七草粥独りの無事を祈ります

足腰が丈夫な友の旅だより

スーパールで見栄を張っても知れたもの

目と耳をおおいたくなるニュース聞く

和歌山市 松尾和香

子育てに信念通す父の背

ふるさとの母のふところ自然体

若返る魔法の薬飲んでいる

傷ついた人を支える義捐金

天災も人災も受け古希の坂

和歌山市 宮本 三喜夫

富士山を二見より見る運の良さ  
初日の出雲に覆われ拝めない  
子と孫に囲まれ過ごす旅の宿  
ありがたい葉に縁ないこの歳で  
お互いに元気で酉年を過ごす

和歌山市 堀畑 靖子

ボケ封じ地藏にも寄る宵えびす  
有名なケチで通してリッチです  
病院とますます縁が深くなる  
男こきおろし花やぐティータム  
結論は男弱いに落着けり

和歌山市 山口 三千子

迷路から抜け出せそうな初曆  
つまずいた時から転びくせが付く  
メリハリがなく一日が過ぎていく  
良い事がありそうパズル解けていく  
せせらぎに春の光がはねかえる

海南市 三宅 保州

考えた揚げ句考えないことに  
思い切り野次りたいので外野席  
日の丸のことかシンブルイズベスト  
追いかけるものがあるから強くなる  
今日の心配は天気のほかになし

海南市 谷口 義男

着色をされた噂が乱れ飛ぶ  
国債を乱発して少子国  
婦巢性信じた息子遠く住む  
正論を出せば困った顔される  
愚痴聞いてくれて味方と勘違い

海南市 堂上 泰女

火の国の外輪山に見る樹氷  
野の宿の馳走チツプを弾ませる  
子に甘え子の自尊心立ててやる  
雄大な阿蘇の自然へ湧く畏敬  
機窓より月へキッスの雨降らす

鳥取市 武田 帆雀

ハッピーニューイヤイ勢のくじを当て  
裏方も主役も初春の五目飯  
評論家ばかり二の膳三の膳  
後一つ信号の先コーヒーの匂い  
御辞儀癖つき南天は雪の下

鳥取市 宮脇 道子

叩いたり伸ばした皮膚に化粧する  
福寿草笑顔ならべて春を待つ  
成人式荒れは天災だけにして  
雪だるま悪を睨んでとけて行く  
日捲りの速度の早さ目が回る

鳥取市 田村 邦昭

地酒から温い訛を買ってくる  
その昔捨てた男におごられる  
少年に理路整然と愚図られる  
砂丘から亡母の柔肌つかんでる  
楽々と合格してからの怠惰

鳥取市 春木 圭一郎

明確な目的あつてたじろがぬ  
強さは弱い自分に気づくこと  
毎日が楽しくあればそれでいい  
よく聞けば相手の気持ち見えてくる  
日常を過ごすリズムは自分流

鳥取市 夏目 一粹

テレビ消ししばし語ろう子供らと  
感動をするとお腹が減ってくる  
思い出を廃棄するのは難しい  
林左真守りんざまきもりという名の曾孫です  
金あると超気持ちいい夢叶う

鳥取市 土橋 睦子

着飾って爺婆さんの勇み足  
心拍数あげる話はよしてくれ  
心意気買われ息子のひとり立ち  
飽食の皿に昭和を重ね見る  
陸海空インド洋までひた走る

鳥取市 土橋 はるお

何だこりゃ尻餅ついてまた笑う  
よく笑う脛を足湯で温める  
爺ちゃんがさかずき受けてお念仏  
ケセラセラ我慢続けるしかないな  
嘘ついているのは確かでも笑う

鳥取市 近藤 佳子

元旦のいのちに感謝するばかり  
一命をとりとめた運かみしめる  
幸せも不幸も知った枯葉舞う  
出番なし春が来たとして出番なし  
炎のような恋をおもって相聞歌

鳥取市 吉田 孔美子

縫いぐるみ一つお伴に家族旅  
ママの秘は上京のばばに筒抜け  
不味公と彩雲堂とボテボテ茶  
いい笑顔 母性も味も繋がれる  
居酒屋の味わたしには濃いすぎる

鳥取市 西川 和子

健康を願いお屠蘇の三が日  
時どきは愚図つて愛を確かめる  
引導にはっと自分を取り戻す  
目を向けて笑顔で交わすご挨拶  
祝宴にさかずき二杯は戴ける

鳥取市 西村 黙光

若き日の忘れはしないキノコ雲  
金になる話は脳がコピーする

自分史へタイムトンネルくぐらせる

故郷の想い出失せぬ童唄

呑み交わす相手の名前出てこない

鳥取市 福西 茶子

威張るたび器小さくなっていく

鳶にも鷹にもならず蛙の子

修羅踏んだ足がこの頃よく笑う

健康に猪口一杯の梅酒飲む

昨日まで元気な母の訃報くる

鳥取市 裕 寛子

この一步 一步一步のおかげさま

如何せん杖生涯の伴侶とは

右杖三段昇り降りるリハ

人さまの情けあらたにしみる初春

留守三月書齋を埋める音信の山

鳥取市 録 沢 風 花

熊野古道世界遺産の気を貰う(熊野本宮を訪れて)

熊野杉天へ向かって主張する

ひとり旅まだ出来ましたお月さま

新年の風を五体に入れ替える

思ひ出を詰めてアルバム重くなる

鳥取市 加藤 茶人

戦争が好きなのは神かも知れず

冷えて来た夫婦で飯と風呂で足り

書き留めておけば良かった夢が覚め

正月も忙しく母の仕舞風呂

現実には迎えも来ない雨宿り

鳥取市 美田 旋風

悪友と飲んで歌って若返る

衣食住足りて未婚が増える国

階段の上下がきつい傘寿坂

友達的笑顔みたくてみな褒める

老化した歯がぐらぐらと震度六

鳥取市 吉田 弘子

ボランティア出来る健康ありがたい

運命は共同体というツアー

半額の魔法にかかり損をする

野鳥たち山の荒廃訴える

晩婚のすすめ宮様お手本です

鳥取市 平尾 菜美

落ち込んだ杵を餅屋に預けてる

手習いを始めて隙間風吹かぬ

ひたひたと迫る第九に背を押され

闘争心丸めて歩く父の背な

荒波に咲く花時化に耐えている

鳥取市 林 露 杖

大方は省いて老いの年用意  
朝寝してかわらぬ老いの三が日  
寒林の梢にいのち抱く日射し  
雪女にでも逢いたし雪夜道  
地球上戦の絶える刻が無い

鳥取市 山 本 益 子

木守柿 触れることなく天仰ぐ  
未知数の余生ゆつくり闊歩する  
古稀の坂ゴールは百をめざして  
大金をワシ掴みする宝くじ  
念仏寺苔むす墓によだれ掛け

鳥取市 奥 谷 彩 子

杯重ね天下国家をななめ切り  
焼芋を包んだ拉致の新聞紙  
無防備に背なライバルへ見せていた  
うれしい日影もスキップしてはしゃぐ  
一たす一が三にも五にもなる夫婦

鳥取市 富 山 檳榔樹

この地球キャンパスにして愛を描く  
未来図をほのほのと描き生きる快  
さもあらん意地を張り過ぎ後悔す  
夢抱いたまま骨壺に入り給う  
取りあえずメールで打診デートする

鳥取市 岸 本 孝 子

届く物予定通りに来て暮れる  
除夜の鐘終ればみんな新しい  
穏やかなところで参る初詣で  
皆無事で柏手打てるありがたさ  
平凡な幸せ思う雪月花

鳥取市 岸 本 宏 章

合併の地図に地域のエゴが見え  
渡り鳥豊かな国と知って来る  
よそ様の旦那を妻が誉めちぎる  
結局はお客が払うチラシ代  
歯が立たぬときはにつこり引き下がる

鳥取市 福 田 登 美

皇室の慶事に心温まる  
お正月丁寧言葉最初だけ  
幸せを願う玄関派手な花  
長生きに税がたつぷりついてくる  
福の神わが家を通り過ぎていて

鳥取市 中 村 金 祥

川柳を忘れゆつくりお正月  
国境を知らぬ鳥から教えられ  
ムチ振れるトリの学校懐かしむ  
白がいて赤がいるから燃えあがる  
傷つき合い許し合っては愛深く

鳥取市 永原昌鼓

しがらみを脱いで余生をふたり旅

自画像へ少し紅彩足してみる

代々のガラクタ隅に積んである

良識を行方不明にするお酒

楽々と掴んだ金は身につかぬ

鳥取市 近藤春恵

麻醉から覚めて自分をとりもどす

自分には肩書きがないが愛はある

自分の事は他人が評価してくれる

指先でもりガラスに好きと書く

熱いうち打てばよかつた子の躰け

鳥取市 田中瞳子

多すぎる訳のわからぬ犯罪が

お通じがあいさつ代わり父と母

依存症辞書がなければ句もできぬ

妻を看る夫も米寿腰さする

リハビリで絵をかく母は童なり

鳥取市 福島庸二

偶然を必然に変え道開く

好き勝手きままに過ごす一人者

待ち切れず違反無視する悪いクセ

前向きの姿勢で開く第一歩

瀬戸際で五感がフルに動き出す

鳥取市 上田俊路

ふる里を地震と雪で追い出され

自叙伝のところで点と線

かけ抜けた昭和平成花ふぶく

ふる里に古いポストのある安堵

百円の傘で百円分凌ぐ

鳥取市 倉益一瑤

不器用で逃げるチャンスを見失う

わくわくすれば小走りをする癖がある

花ことば抱いて走った青い日々

わたくしを磨いてくれたのは仲間

そよ風よ吹け母はいま要介護

鳥取市 植田一京

ボサノバのリズムで朝が始まった

鉛筆を倒して今日の予定決め

花言葉花に罪など無いのです

ちよつとだけ触つてみたい赤い花

聴こえない振りを上手に使いわけ

倉吉市 猪川由美子

修羅場では打たれ強いが自慢です

死刑でも心の闇は晴らされず

北朝鮮よくも次々嘘騙し

拉致家族お偉方より有名に

皇室にも家庭の悩みあるらしい

倉吉市 牧野芳光

故郷へ向かぬ日はなし母が住む  
焼き芋をはさみ楽しい仲になる  
人間をのらりくらりとやっている  
停電で知る文明のありがたさ  
指折れば両手に余る幸がある

倉吉市 山中康子

宮さまの愛ほのほのと鳥も舞う  
着飾って一日だけのお人形  
五感今リスト作りもまだたしか  
体調が良いか母さんよく笑う  
ほのほのと厨が動く母の笑み

倉吉市 淡路ゆり子

着ぶかれて無病息災どんど焼き  
おくれても歩きつづけた八十路踏む  
雪かきを押しつけあつて老い二人  
夫一人置いて外出鍵掛ける  
八十路来て気ままに出来る今が好き

倉吉市 最上和枝

右左別れた駅のジャンプ傘  
一寸一杯誘い水から千鳥足  
その先は言葉にならぬ突然死  
十指みな生き生き会話弾みます  
嫁姑褒め合いながらいくさする

倉吉市 松本よしえ

ウヨウヨと泥棒 詐欺が増えてくる  
雑踏の中を颯爽ハイヒール  
フリーターそれでいいのか若者よ  
おばあちゃん百円バスで医者と鮎  
溪流の径を辿れば平家村

倉吉市 山本玲子

酒の爛人肌という難しさ  
あれこれと目で味見する惣菜場  
しっかりと新芽ささえた冬木立  
小さいが指のささくれお痛い  
ひと呼吸おけば治まる癩の種

倉吉市 野口節子

そこそこな理想で家族恙ない  
名工の腕で丸太が命吹く  
赤を着る老いの心が愛おしい  
ばあちゃんが一つ覚えの卵酒  
勿体ない勿体ないでよう食べる

倉吉市 米田幸子

意のままにならぬ自分かもどかしい  
なだめても脳が時々駄々こねる  
志なかばで筆を折る無念  
真実は玉虫色にぼかされる  
若者に負けぬリングの丸鬻り

米子市 政岡 日枝子

桃は桃らしくしようと正座する  
母の手でなおしてくれる桃の傷  
少年になつてうるさい桃太郎  
日に幾度角度をかえて陽に当たる  
太陽を吸い取るような子等の声

米子市 林 瑞枝

モーツァルトの曲で心の棘をぬく  
今年こそ何処までかなう夢の地図  
勇気凛々女も負けぬ大太鼓  
行き摺りの御縁ほほ笑む花回廊  
機首下げて丘の桜と踊らんか

米子市 野坂 なみ

皇室が大好き日の丸の小旗  
学校の空気はいかがモハマド君  
待ち焦れるのは平成の桃太郎  
偽札へ神は仕返し考える  
三度目のジャンプが鍵をにぎってる

米子市 木村 春枝

人柄がほのほの匂う電話口  
新刊書の表紙ときめき抱きながら  
指さりで別れた人の鬼籍入り  
古新聞過去を積んでる収集日  
古傷に触れて昔の顔になる

米子市 門脇 晶子

太陽が昇ると人が動き出す  
太陽は無限を抱いて神さまだ  
心の信号老いてテンポが早くなる  
桃の花春の音符で出ておいで  
桃が今含み笑いをして見せる

米子市 中井 ゆき

年一度絆をつなぐ年賀状  
皇室のニュースはなぜか見のがせぬ  
青春がこぼれ落ちそう水蜜桃  
束の間の日ざし心もあたためる  
そろそろとリーチをかける手の内に

米子市 澤田 千春

太陽の恵みに花がワツと咲く  
久しぶり話したげに雪が舞う  
さわらないでねうぶ毛がゆれる水蜜桃  
苦虫のような顔だが情がある  
響き合う人に出逢うたさわやかさ

米子市 白根 ふみ

正月はもつとけじめがあつたはず  
首を出し殻めりめりと初日の出  
初春は一面神の銀世界  
福袋初売りなどと言わせない  
ぶかぶかと柚子のお風呂のひとり言

米子市 青戸田 鶴

サーヤお嫁にみんな嬉しい祝婚歌

ま冬日はこたつテレビで日が暮れる

鈍行の旅でゆっくり腹話

母の在所は見渡す限り桃の花

光ってる人をしんどいなどと思う

鳥取県 新家 完司

潜望鏡そつと上げるとお正月

太陽が隠れたままのお元日

躓いて今朝もカラスに笑われた

子は親の鑑で孫は子の鑑

ホメラレモセズ苦ニモサレナイ人になる

鳥取県 下田 茂登子

一人いて金を仇に生きている

空っぽの財布時どき振ってみる

情けなや犬より粗食老夫婦

柔肌は亡母にもらった宝物

振ってみて脳の働きたしかめる

鳥取県 山本 正光

花の種もう春のこと聞きたがる

幸せを一杯包むよい素顔

ふんばって我がまま言わぬ足のうら

銀行も税務署さんも縁遠い

拉致に核嘘もいわぬと言ひ張られ

鳥取県 蔵本 悦子

世界遺産にそのうちきつとなるおでん

騒がしいきつと地球も眠れない

一葉は女の意地よ札に乗る

十二月女神もほうきに持ち替える

人間にまだまだ愛が足りません

鳥取県 国森 武子

人間はアホウと烏笑ってる

赤ちゃんの笑顔は神の作られし

鏡台も私と一緒に古くなり

時うつり百人一首眠ってる

一人いて百人一首出して読む

鳥取県 澤 裕子

今年こそ自分のためにジャンプする

赤い靴はいて気持を切替える

生きのびるためには赤い嘘もつく

鈍くなる五感へ発破かけている

子離れの達人鳥を見て思う

鳥取県 山下 節子

息抜きが下手で一日フル回転

破れない堪忍袋持ったまま

一喝の効果その時だけ素直

ゆつくりと姑のレシピで豆を煮る

合併に表に出ないデメリット

笑うため食後きれいに歯をみがく

親が子の鑑にならぬ世の乱れ

ふり向けば泣いて笑った走馬灯

バックミラー信じ電柱ぶつかつた

熨斗袋はでで中味が照れくさい

鳥取県 深田 俱久

天帝に想い届けととんど焚き

コマーシヤル保険貸金補助食品

還暦の平和憲法ドック入り

三割減学力低下は成果です

特攻幹生きて傘寿の大儲け

鳥取県 竹 信 照 彦

無償援助どうせ国債気前よく

大晦日吹雪で止めた初詣で

新年にプラスする歳減る寿命

山陰の景色が戻る雪模様

陽の当る方から落ちる屋根の雪

鳥取県 鳥 羽 直 市

リング狩り赤い方へと人群れる

幸せだ大空をみて夢を織る

湯あがりか女にもどし母となる

直球しか投げぬ男で浮かばれぬ

言い過ぎて空しさ残し帰る道

生きもののように眼鏡の度がすすむ

花見頃 花に負けないちらし寿司

降り続く雨に食欲までなくす

露天風呂の風情に酔っている

心から丸いと顔に描いてあり

鳥取県 石 谷 美 恵 子

電線で世相愚図っている雀

お悔みの挨拶不明瞭で良い

その昔の汗が年金だと思ふ

不明瞭な陳謝で終えた医療ミス

母妻女わたしはオール3どころ

鳥取県 盛 田 夢 路

百点を取るいい笑顔忘れない

分別臭い世間に厭きた草臥れた

穏やかな老母にもあつた苦悶の日

リストラの波を被って喘いでる

啓蟄の一番乗りには歩を止める

鳥取県 佐 伯 や え

手の内みせず孫は仕事に誇りもつ

ぶじ退任静かな部屋で雪見酒

趣味ふたついい妙薬ではなされぬ

捨てられずはなされもせず畑三反

木を切った跡地どうしよモグラくん

鳥取県 谷 口 次 男

国民を救わぬ国に住む哀れ  
袖子落とす迷惑顔のイワシの目  
ニセ札を遣つて去つたベレー帽  
納豆とリンゴミカンで腸元氣  
明言もどこか濁つた答弁だ

松江市 松 本 知恵子

本棚の余白へ未来詰めてゆく  
松明けて氣を引き締める雪マーク  
にわとりが羽ばたくほどにしておこう  
大津波先に察した象の耳  
似た様な話何度も聞くこたつ

松江市 三 島 崧 丘

古希の背などどこか親父に似る誇り  
雄鶏がトサカを立ててツメ立てて  
猿にまで嗤われてゐる猿芝居  
止り木のカラス陽氣に喋りだす  
残虐な記事に呆れる老眼鏡

松江市 川 本 畔

宇宙の不思議猫も私も首ひねり  
目に触れるものみな冬を纏いつつ  
肌の冷え猫も夫もみんな留守  
おでんには六十路の味を散りばめて  
車から蟹の男が降りてくる

松江市 佐野木 みえ

玉葱の芽が出て野菜かごの乱  
砂時計今年の時を刻んでる  
災の字を希に変え生さる今年こそ  
清水の舞台に佇てば朱に染まる  
鞍馬山息はずませて峠越す

松江市 安 食 友 子

ひらめきも善悪までは藪の中  
善根を亡夫にウインクして休む  
舞い降りて来るものナイトならよいが  
無惨なり病のあかし残す骨  
人情もペーソスもない空つ風

松江市 小 川 注 湖

席一つ上がって祝う宮仕え  
一言が喉をひつかく忘年会  
雑草は踏まれて耐えて春起きる  
丸ポスト今日も笑顔で立っている  
貴方へと書いた文字には未来絵図

松江市 銭 山 昌 枝

頂いたケーキ独りで食べたイブ  
神様もスキップで来た福笑い  
床の間の鶴もわたしも翔ぶ構え  
反応が遅くて何時も置いとかれ  
夫の留守つい鼻歌が出てしまふ

出雲市 富田蘭水

鶏の絵馬がはばたくように売れ  
純白の雪のころにまだ勝てぬ  
よい年と願う運命が笑つて  
散髪に笑顔もそえて若返り  
待つ手紙しびれ切らして電話する

出雲市 小玉満江

おさい銭はずんで拝む初詣で  
百歳は生きたく思ふお正月  
賑やかに山茶花散つてお正月  
お正月大阪弁のお客様  
のぼる陽も落ちる夕陽も一人ぼち

出雲市 園山多賀子

自己愛に溺れてならぬ水仙花  
長寿とや幸福招く福寿草  
千両は可憐な富を蓄える  
如月に梅が匂えば心澄む  
幽玄な恋弄ぶ百日草

出雲市 久谷まこと

のんびりと句帳はおいで旅に出る  
初旅の車窓の景色みな新た  
お雑煮を祝いそれぞれ歳もらう  
父と子の希いは同じ未来像  
ここまでが精一杯の力こぶ

出雲市 石倉美佐子

包装紙きちんと畳む癖がある  
これからはてんでこ舞などしないよに  
余生とやらはおしゃれ上手に楽しげに  
ひよんな時新兵さんに戻る夫  
傘寿と喜寿へんでこりんな夫婦道

出雲市 佐藤治代

友達が転ぶついつい笑つちやう  
よく遊ぶ人だと夫呆れ顔  
燃えろ燃えろと言われても困る歳  
石段で転び石段恐くなる  
幸せのてのひらに乗る大欠伸

出雲市 青山久子

ころころと笑い転げる孫の毬  
しめ縄をすればキラキラ光る海  
年金の袖を振つてはお年玉  
初夢にネクタイしめた亡夫がいた  
うぬぼれを許してくれる初鏡

出雲市 伊藤玲子

泳がせてくれるあなたの海がある  
あと少し二人で生きる蜆汁  
瘦せ我慢ちよつぴり足が涙ぐむ  
おとこの事で女同士の大笑い  
塩少しふつてわたしを引きしめる

出雲市 岡 あきら

風向きに逆らうことはもう止める  
健康の二文字に弱いお札入れ  
つぎの申まではと下ろすカレンダ―  
ふる里の新年の水飲んでくる  
温もりを山盛りにした年賀状

出雲市 多久和 敬子

私の心も映す三面鏡  
古手紙秘密ちよつぱり話し出す  
新年の日記に夢が満ち溢れ  
日記にも書けない事が少しある  
孫を見る眼鏡はいつも笑つてる

出雲市 小豆澤 歌子

初春の夢へ平和の鐘鳴らす  
庇い合う四人家族の窓明かり  
弛みがちルールしつかりしめ直す  
夕茜斜めに揺れてから消える  
ドクターの通りに薬飲んでいる

出雲市 吉 岡 きみえ

地の底を春の唄声水の音  
人生をドラマの中で生きている  
慰めてくれる息子とのむお酒  
私用には大きい丸をつけておく  
打つ釘にわたしの力馬鹿にされ

出雲市 岸 桂子

母に会う古い梅干含んでは  
ぬくもりが欲しくて嘘も聞いている  
もう一度寝たいフトンを畳んでいる  
消息を知る由もない秋の雲  
一年は保険の切れる早い事

出雲市 城 多喜

悪妻と言われた頃は超元気  
意地張つて一人暮しが未だ続く  
ふんばつてみても所詮は痩せ我慢  
相談は仏様だと決めている  
ハイヒールもう履けません転びます

雲南市 毛利 幸

あれこれとマナー乱れて狂い出す  
うろたえてみても明日が掴めない  
ときめいてペンがふらふら踊り出す  
人の世は背中合わせの渦の海  
合併で生まれた町に首かしげ

島根県 伊藤 寿美

わたしの胸に亡夫のルール生きている  
侘助とむかし話が長くなる  
うつとりと眺める海が里にある  
哀しみを入れた袋がパンクする  
淋しくてわたしのための花を買う

島根県 柳原秀子

一碗の七草粥にあるなさけ  
みかんむくきれいな指に恋がある  
何日も人と話をしない冬  
庭先へぬけがらおいていつた蛇  
切り傷のいじわる未だ治らない

島根県 多々納テル子

じっくりと子等へ民話語つて  
方言も煮込んでぬくい家族の輪  
人生の四季を歩んだ二輪草  
両の手でうす茶いたたく老い二人  
ボケ防止恋をするのがいらしい

島根県 持田多輝子

プライドも意地もあるので転ばない  
味噌つばに家伝の味を蓄える  
もみ消しで泥をかぶるは秘書の役  
血縁の絆八十路の仲間入り  
逆境で差出す友の手は温い

島根県 森茂美

開戦のラジオが耳に鳴っている  
一葉が明日を見ているすかし刷り  
新婚さん挨拶まわりお正月  
煌々と月が冴えてる屋根の霜  
飽食の彼方に飢えた子らが居る

岡山市 井上柳五郎

平凡な家族に揃う祝箸  
差し出し名洩れた賀状が今年また  
東天に捧げ銃した遠き日よ  
メモをして備えたことをまた忘れ  
土壇場を重ね女も強くなり

倉敷市 小野克枝

まん中に水の流れがあり平和  
勇退の朝も光った靴が待つ  
やさしさを杖に試練の坂を越す  
毒になるタバコとうまが合いすぎる  
仏前に賞味期限の過ぎた菓子

岡山県 國米きくゑ

受話器から悪魔やさしい声を出す  
ドンと胸たたく黄門様さがす  
ポケットが浅くて嘘を覗かれる  
指揮者なく回り続ける独楽一つ  
生い立ちの上に積もっていく桜

岡山県 小林妻子

黒髪の先までおんな性みがく  
雪積んだ仮設で冬を越したんだ  
一杯の屠蘇も飲めない下戸もいる  
路も柳も一番乗りを競う春  
パンクではない自転車は杖がわり

岡山県 福原悦子

大地も芽吹いて春の彩をだす  
父の介護いつつも神と手を結ぶ  
本音もぼちぼち出て来る曲り角  
老父の背結び直してダイヤ婚  
勝つ事に心孤独になつて来る

岡山県 山本玉恵

信じよう求めばきつとある幸を  
眠れないで夢の切れはし追いつづけ  
ひたむきな母の手紙の誤字脱字  
マイペース プラス志向の女道  
道草も咲き人生に彩を添え

岡山県 福嶋智恵子

お隣のおせちが届く独り者  
功成つて息子夫婦は遠く住み  
三代の屠蘇で賑わい父光る  
実感に孫に越されたお正月  
二十年ひとり暮しも板につく

竹原市 小島蘭幸

句碑遥か塔遥かなり初春よ  
一月一日比翼塚から鳥になる  
ワンカップ比翼の句碑を初春にする  
さくらさくら比翼の句碑の中に咲く  
句碑の艶夫婦の艶もこのように

竹原市 正畑半覚

朝食に妻手作りのリンゴパイ  
愚痴一つ言わぬ大樹の鼓動聞く  
軽井沢のみみじ竹原の紅葉  
バスツアーよかった妻が喜んで  
宍道湖に遊ぶ無数の子鴨たち

竹原市 岩本笑子

夜空の突当りで星が生まれるよ  
山茶花をこぼしてゆくか庭スズメ  
広告がどつさり春はすぐそこに  
ころりんこ松ほつくりの旅立ちか  
パソコンとしゃべっています二度の職

竹原市 時広一路

負けられぬ気持ちへ朝が早く明け  
早く寝た方がいいよと鏡言う  
満ちて干く潮も毎日違う顔  
離れてはくれぬ肩書き持て余す  
パズル埋め尽くし真つ赤な夕陽見る

竹原市 森井菁居

ビジネス運信じはばたく事に決め  
一寸の虫にも理があるから認め  
絶好のトライ吸い込む春の風  
大口の祝儀袋に初春の音  
口外厳禁秘密を旨に生き延びる

竹原市 石原 淑子

枯野原下萌えもえて春を呼ぶ  
鉛彩の空からフワリと天使  
草餅の薫りとどける人のあり  
籤運の佳さを夫に感謝です  
桃活けて孫と一緒に雛飾る

広島県 福島 万年

いちめん山茶花たんと泣いたのね  
満月に瞳が澄んでいくテロリスト  
テイクオフ明日に向かつて機首上げる  
変換キー叩いて恋を募らせる  
0だから何でも入る何でも消せる

美祿市 安平次 弘道

逆光線海に沈んでゆく命  
結び目がゆるくて跳べぬ水たまり  
たわいない話にとける修飾語  
秘策などないが平常心はあり  
飯面などいらぬ場末で酌み交わし

熊本市 永田 俊子

重ね餅に齡重ねている挽歌  
手を叩く元気がなくて隠居する  
ひもじさを知らぬ子供のダイエツト  
ジャズの馬車にのりおくれてるナツメロ派  
時を消す真つ正直な砂時計

熊本県 岩切 康子

枯草焼き枯れてはならぬ古稀の春  
古稀迎え元気な写真撮つところ  
小為替が旅して戻る手続きし  
先輩の親切抱いて旅終る  
誘われて決断つける世界地図

熊本県 高野 宵草

掛時計電池替えから垢ぬける  
口喧嘩しつつ金婚たどりつき  
めでた過ぎ初夢もない二日酔い  
ひ孫まで揃う葬儀もめでたかる  
格言に頷きながら不実行

唐津市 久保 正剣

そして朝大人になった姫鏡  
反論は不発のままに押し切られ  
目には目の棘が平和の虹を消す  
本業はコメディアンです医師免許  
つまみ食いのカロリー叱る血糖値

唐津市 山口 高明

長生きをして良かった熱一等  
老人の孤独を埋める慰問団  
燕来ぬ軒も淋しや改装後  
行く所敵なし日本の自衛隊  
世直しの黄門さまはテレビだけ

唐津市 坂本 蜂朗

児に還る母私の道しるべ  
母卒寿またこげ臭い台所  
棺桶に入りそこねて欲が出る  
酒壺の中に浮輪を入れている  
行列のある病院に並んでる

唐津市 宗 水笑

初詣で帰りはすでに欲の顔  
キッチンが二つ親子の別メニュー  
ストレスの介護役する長電話  
日替りの恋をたのしむ古稀の贅  
神仏を信じる日まで生きなけりや

唐津市 市丸 晴翠

よく動き無事晩酌に辿りつく  
病葉は土に還って樹の乳に  
通学にシヨッピングにと監視増え  
少子化にお下がりできぬベビー服  
冷蔵庫整理化石の餅と会う

松山市 高橋 宏臣

似顔かく僕の影武者できあがり  
作戦の真っ只中に俄か雨  
砂時計反転ゆめをもう少し  
定位置で淡い願いを抱いている  
いい音で日記を閉じる嬉しい日

松山市 古手川 光

脱ぎ捨てて眠り込んで冬木立  
マニユアル通りの言葉ロボットでもしゃべる  
不整脈のワケが女医さん解らない  
故郷の小径を足が覚えている  
耐えること形で見せる雪の竹

松山市 丹下 美津子

真つ白な布巾も新春の台所  
一筋の川墨絵のような銀世界  
雪見障子開けて親子の屠蘇機嫌  
雪山ブーム甘く見るなど山の神  
恋一途 森の深さをまだ知らぬ

松山市 宮尾 みのり

本心の見えぬ自画像描き慣れる  
透明な灰汁は欺瞞と澱が言う  
目を詰めて詰めて大局見失い  
引越しへ年季入ったたこやき器  
カレンダーに置いてきぼりを食らう古い

西予市 黒田 茂代

淋しさや哀のかたちに雪積んで  
追憶を風に流して二月とや  
真の愛だったのかこの淋しさは  
雪の精にあなたがなった白い夜  
裸木のレース冬青空画布に

大洲市 中居善信

しけた顔してる鏡のなかの僕  
一寸の虫も嘔みつくから恐い  
閉町へ村の歴史が消えている  
もう次の時代であろうマツケンサンバ  
すれ違いばかりして来た凡夫婦

東かがわ市 川崎ひかり

こぼれ種抱いて大地はドラマ生む  
久びさに帰る故郷の様変わり  
人ひとり許せず重い冬の天  
天災が世界の地図をぬりかえる  
長短があるから丸い輪が出来る

東かがわ市 神保坊太郎

人生は西へにしへと歩く旅  
福耳の欺し上手に踊らされ  
この顔は本物かいな初鏡  
どこまでが芝居だろうか妻の乱  
増税だまた裏金をこしらえよう

東かがわ市 成重放任

老人と呼ばれど若さまだ負けん  
はりつめた心を癒す妻と居て  
繰り返す話気長に相手する  
何回も見直してみるハズレくじ  
百歳の義母隣人の生き字引き

東かがわ市 清川玲子

宵からの雪が聖夜を盛り上げる  
結局は回るお寿して済ます宴  
食通がこだわり使う備長炭  
生きて来て何度さよなら言うたやら  
掘り下げるほどに味出る芸の道

東かがわ市 伊勢八重子

一年が行きつ戻りつ除夜の鐘  
じわじわと国が長寿をしめつける  
ゆずの香が素肌をまとう冬至の湯  
喉飴を舌でころがす風邪の床  
来た道は地図の無い道つづら坂

東かがわ市 原賢

坪庭の鼓動の中に春の詩  
花が咲く庭で余生の夢を追う  
程ほどで居るからきつと生きられる  
山頭火の句碑を巡りつ結願寺  
溜息をするたび倅せ消えてゆく

高知市 北川竹萌

肺炎につながる噎せる話聞く  
口中の不潔の話テレビから  
やや遅くきた盟友の年賀状  
祖父様の紅梅奮膨らみて  
体力の保持一番の散歩から

高知市 小川 てるみ

歳と共泣かぬ女になつてくる  
つらくても心の窓は開けておく  
気が利いた友が近くにいる強味  
水仙郷こもやっぱり温暖化  
お茶漬けで旅の終わりを締め括る

高知県 赤川 菊野

しみじみと幸せ思う初詣で  
爆竹の音が聞こえる年賀状  
ばあさんがマツケンサンバに今夢中  
あんな男夫だったら釜茹でに  
耐えぬいた涙の向こうに夢がある

高知県 小澤 幸泉

それぞれに語るわが家の鍋の音  
引き出しのこだけカギがかけてある  
口ずさむ父の演歌にある含み  
四ツ辻で半分泣いた幼な顔  
過ぎた日の景色に遅いペンをとり

砂川市 大橋 政良

凍てついただらだら坂の救急車  
襟立ててバス停雪の横なぐり  
人形の靴が浮いてる水たまり  
靴下の穴履き馴れたころ捨てる  
一本の糸につながる握りめし

弘前市 岡本 花匠

上かんや意気統合の雪見酒  
長寿スキー三浦親子の雪賛歌  
K点を越えておとこの華開く  
雪転げ子供にかえる老童子  
鞆当てのおとこを試す向かい風

弘前市 福士 慕情

解禁日川の濁りに掃される  
深淵で息潜めてる川の子  
水温み岩魚ゆらりと動き出す  
濁り水澄めば小石の光りよう  
源流へ行くから掛ける釣り保険

弘前市 今 愁女

降り止まぬ雪にメルヘン言つとれず  
雪二尺潰れそうなる兎小屋  
雪よ降れ旗ふつてるはスキー場  
雪国の春待ちきれぬ梅見酒  
ものの芽が明るさ増して四温なり

弘前市 宮崎 ヒサ子

今日もまた右往左往の雪のんの  
雪道に今更歳を知らされる  
正月の潮さつと引きまた二人  
始まった暦に明日を書き添える  
実南天 雪の重さに堪えて反る

弘前市 相馬 銀波

弘前市 須郷 井蛙

野仏の雪を落すも僕の役

切り株に山のドラマの跡を見る

多数派に頼ると目立つ隙間風

体調は呑めた量から確かめる

被災地のニュースに箸の重い日々

弘前市 櫻庭 順風

結核が食べてしまった新家屋

悪夢から覚めると姉が死にました

一言で餓鬼大将について行く

暮れるまで遊び惚けているわらし

修理したスキーが滑り切れぬ日々

弘前市 高橋 岳水

古稀の掌にのせる人間讃歌の賦

人間の業知りつくす札の束

来る年のつきを占う福袋

古い受容シニアカードと妥協する

竹の花活断層を言い当てる

弘前市 高瀬 霜石

ケータイは持たぬ淋しくなんかない

春だからここぞと古い靴捨てる

進んでる真面目な人の腕時計

勝算はないがとにかく会いに行く

時々は見せぬと錆びる隠し芸

おれおれの電話が来てもお金なし

長寿国孫に負担が重過ぎる

忠告をされて晩酌まずくなる

フルーツの出番で酒も終りです

地下水のうまさに観光バスも止め

十和田市 阿部 進

カタカナ語街にあふれて疲れます

普段着の温泉さがし一人旅

全国へ津軽の幸を贈ります

この町にしみこんでいる祖母の味

漬物のおいしい時節酒すすむ

黒石市 相馬 一花

楊貴妃もモンローも居る飲み屋街

歳月は待ってくれない君と僕

ドカ雪が遠慮なく食う体脂肪

むだ骨を折ったと知らぬラブレター

腰据えて飲めば女性にかなわない

青森県 小寺 花峯

早くにもストレス溜まる春の酔い

つまずいた石には昼寝などはない

時代劇目ざしを焼いて見るテレビ

一升瓶振ってにつこり虹を飲む

蟹が出てみんな無口になる花見

さいたま市 八田 敏

元日は真白き富士を先ず拝み  
富士眺む終の住処に菊と棲む  
菊あとに福寿草植え早春を呼ぶ  
八十歳初めて地球の無事祈る  
年賀状年毎に減るさみしさよ

東京都 清原悦子

嫁ぐまで父の涙はとつてある  
福引きの外れの音が高響き  
幸せをつなぎ留めてる細い糸  
真つ白い風に出会った一人旅  
正直に生きた火種は絶やさない

東京都 岸野 あやめ

行きずりの二人が杖を見較べる  
ヨン様に似た人客を引く渋谷  
地上波のままのテレビで意地を張り  
大層なCMただの痛み止め  
道端で拾った宝籤当たる

八王子市 播本充子

怒りが消えてゆく二つ目のケーキ  
抱負沸沸七草がゆを食べながら  
年始客介護の話ばかりする  
小石一つにバランスを崩される  
年賀状だから受け取り拒否しない

武蔵野市 亀井 円女

元旦の上座は亡夫の指定席  
夢だけは自慢じゃないが星の数  
還暦すぎて娘もそろそろ円うなり  
恋一文字に泣いた笑ったあの頃は  
ジャズ聴けば横でタンゴがすねてはる

佐倉市 岡井 やすお

イラクより東シナ海波高し  
民営化姿隠した担当者  
郵便局消えたら書留どうしよう  
三月は祝儀袋がよく売れる  
定年あいさつ一枚も来ず九十三

横浜市 小野 句多留

印鑑の行方探しが年を越す  
船旅の海の広さに目の疲れ  
風邪らしい三日は木偶の日向ぼこ  
孫共の誰か泣いてる三箇日  
追っかけの写真アップは喜劇です

横浜市 菊地 政勝

借金を無くして喉の骨が取れ  
背伸びせず等身大でやると決め  
人柄の良さが隠れている遠慮  
国訛り抜けない人で頼られる  
幸せが誇張されてるペアルック

静岡県 菌田 獭 杏

爽快に風を掴んでやっこ風  
手短なうまい祝辞で的を突き  
酒蔵が観光コースになる銘酒  
一度会い絶対忘れぬそんな顔  
傷つかぬように他人に点をつけ

静岡市 安本 晃 授

正月も三が日過ぎ祖父の唄  
漫画字の母の手紙は絵にならず  
はげ防止新築部屋では祖母踊る  
歓迎の声に誘われ孫踊る  
書く度に辞書を頼りの父の筆

可児市 板山 まみ子

初雪の予報カーテンそつとあけ  
初泳ぎいつもの顔におめでとう  
万歩計きのうの分もとりもどし  
買いおきはみなあきてきた三が日  
バーゲンのレジは我慢の一時間

愛知県 早川 盛 夫

白梅の気品に負けぬ京言葉  
酒ちびりちびりと外は雪催い  
絵ハガキで私の町を自慢する  
一日が終る時間を無駄にして  
生きることに死ぬこと風の吹くままに

第87回 大阪川柳の会

日時 4月5日(火) 17時開場 18時締切  
会場 サンケイビル本館3F 322号室  
会 題と選者 △脇役・久保田半蔵門 △騒ぐ・住田英  
比古 △四月・籠島恵子 △カラー・磯  
野いさむ(各題2句) 席題なし  
欠席投句 4月4日迄(会員のみ) 本田智彦宛

川柳塔のぞみ 4月句会

日時 4月26日(火) 13時から  
場所 人形町区民館  
場 宿題「一大事」「プランコ」「どうぞ」各題2句  
欠席投句 4月23日必着  
〒193-0832 八王子市散田町2-31-3 播本充子宛

原稿募集

— 思い出の歌(曲) —

六月号掲載の同人の原稿を募ります。  
「歌は世につれ世は歌につれ」と言われるよ  
うに、人生においても忘れられない歌や曲を  
持つておられることと思います。歌や曲にま  
つわる思い出を題材にしたエッセーのご応募  
をお待ちしています。

締切り 4月15日 本社事務所宛

本文 400字詰原稿用紙1枚半〜2枚(600字  
800字)タイトルは別につけて下さい。

ただし原稿の採否、添削は編集部に一任し  
て下さい。

編集部

# 川柳塔の

## 川柳讃歌 ③

木津川

計

自分史の処どころで鳴る太鼓

田 辺 鹿 太

偉い人は自叙伝をしたため、庶民は僕同様  
に自分史を書くのです。

取るに足りぬ生活とはいえ、血の騒いだ昔  
があり、肉躍る時代があったのです。そんな  
とき、聞えていたのは勇壮な太鼓でした。

鹿太さん、まだまだお元気で。燈明の鐘に  
聞き入ってはなりません。

一行詩ほどの人生歩んでる

中 岡 妙

妙さんの控え目です。わたしは人さんのつ  
いでに生きてきた一行詩ほどの人生ですも  
の。いいえ、妙さん、一行詩には重みがある  
のです。「馬」と題して北川冬彦は「軍港を  
内臓している」と。芥川龍之介は「人生は一  
行のボードレールにも如かず」です。それほ  
どボードレールの一行には人生が描きつくさ  
れていたのです。一行詩の川柳の目指すところ

ろもボードレールでなくてはなりませんまい。  
妙さんへの応援です。

人生双六振るサイコロのままならず

傍 島 克 治

ルンペンと失業者が再起を約して十年後の  
再会を誓ったのです。その日が来ました。失  
業者は副社長になり、ルンペンはうだつが上  
らず。さらに十年後に会おう、と去っていく  
元ルンペンに零落を予感させる雨が降りかか  
り。松竹新喜劇の名作「人生双六」もまま  
ならずでした。藤山寛美の名演でした。

志半ばで歌う枯れすき

木 本 朱 夏

立身出世主義に突き動かされたこの国の近  
代以後であります。文部省唱歌「故郷」が煽  
り立てました。志を果たしていつの日にか  
帰らん、と。ですが夢は破れ、今は利根川の  
船の船頭で暮す、というのです。そんな挫折  
者の死屍累算の上に経済大国は築かれたので  
す。真さんの主題歌もまた身につまされます。  
奮闘努力の甲斐もなく、今日も涙の雨が落  
ちる。朱夏さん、人生の切なさですねえ。  
老いてなおテープ切る夢捨てられぬ

鳥 羽 直 市

麻生路郎の句に「改札を出るも先駆者たら

んとす」がありましたね。そんなに急いでど  
こへ行くのでしょうか。やはり先駆者のつもり  
でありましょうが、改札如きでは知れたこと  
ではありませんか。が、テープを切るとなる  
と、これは本格です。老いてますますアカン  
老人が一杯いますのに、直市さんのますます  
盛んな意気軒昂に祝杯を上げます。

夢捨てた瞬間から時間の逃亡者

出 口 セツ子

そうです。夢も見なくなつては文字通り人  
間でなくなるのです。ですがセツ子さん、こ  
こは「理想」と置き換えませんか。人間が夢  
を見る、それを「儂い」と綴ってきたのです  
から。それにしても「時間の逃亡者」は名言  
です。時間から逃げていくのですね。もはや  
成長はとまり、徒に老いていくだけです。

見上げればまだ半ばかな坂に立つ

小 川 注 湖

司馬遼太郎と藤沢周平の違いは、畢竟「坂  
の上の雲」と「坂の下の雨」と言いますか、  
鳥の目と虫の目の対比であります。実はどち  
らの目も必要なんです。さて、注湖さん、  
坂はあと半分です。ゆつくりとしつかりと。

「川柳塔」1月号から

〔立命館大学教授・「上方芸能」誌代表

# 自選集

橋 高 薫 風

研ぎ澄まされた果ての元旦  
矢舁の一番似合うシャンゼリゼ  
お大尺という世がかつてありにけり(吉原)  
スコッチと囲炉裏で遠野物語  
雪が来て合掌造り合掌す

阿 萬 萬 的

ちぐはぐなときもあります夫婦ごま  
隠したって駄目よと妻の目が笑う  
背伸びした言葉に自分縛られる  
仮面などいらんよのんびりする老後  
お人好し次々無駄な日が続き

石 川 侃 流 洞

喜怒哀楽便りすぐ来るガキ仲間  
アウトドアこんななうまい握り飯  
野菜苦手青汁にして責められる  
逆上り邪魔引力が強すぎる  
仕合せな膝です猫が来て眠る

板 尾 岳 人

母の夢ばかり見ていて叱られる  
盆梅の枝を撫でて細い指  
梅一輪一生勉強せよと言う  
東風吹けば梅も私も恋をする  
恋をしたらしいぞ梅が咲き誇る

奥 田 み つ 子

瑞鳥がふところに入り目が覚める  
限りある命だ 今日も思いきり  
みんなみな淋しいそして生きている  
言葉飾る 心の傷が深いから  
冬晴れのどこかにきつといる貴方

河 井 庸 佑

バランスを崩しあわてるやじろべえ  
度忘れがたび重なって自己嫌悪  
振り上げた拳下ろすに困る父  
マイペースモットーにして老いの坂  
ほどのよい高さに目当て置く余生

川 島 諷 云 児

もうすこし生きてみようかにぎりめし  
誰か呼んでる誰か泣いてる風の中  
心ない言葉に切れた赤い糸  
合掌が素直にできるありがたさ  
おくびにも出さぬつもりが顔に出る

木村 あきら

明日散る花だが天を向いて咲く  
地球儀が壊れてしまう核武装  
ササヤカナ城を守って七十年(90翁)  
辣腕を買われ職場の花となる  
栄転の内示我が家に春が来る

工藤 吟笑

叶わぬと知りつつ淡い夢を追う  
墓掃除無縁仏の草も抜く  
年金を当てに誘いの羽根布団  
飾り気のない付き合いで長続き  
霊場で道連れとなる廻路旅(お四国)

黒川 紫香

病室の悲鳴思わず立ち止る  
また明日同じ薬で過しそう  
お隣は賑やか過ぎる見舞客  
看護師に励まされながら飲む薬  
病室はぬくいが外は雪模様

小西 雄々

走馬灯逆回転で亡母に会う  
民話聞く囲炉裏の外は雪しきり  
決断をさえぎるように虎落笛  
釣針にかかって困る罪と罰  
賞味期限切れたパンにも雪積る

小林 由多香

初詣で出雲大社へ五年ぶり  
賽銭は出雲の神も五円だけ  
日帰りの旅へ両手にみやげ提げ  
みやげ屋も旅のコースに組んであり  
試食する度にみやげが増えてくる

斉藤 姦

ハイだけはしっかり言える子の育ち  
躓いた石がにつこりしてくれる  
今になり役立つ古い農日記  
童謡をとつても好きな冬苺  
初競りの声いきいきとりんご達

田中正坊

花の芽も私も春を待っている  
生きていくハードル一段ずつ上げて  
いつごろがピークだったか下り坂  
にんげんの臭いが消えていく八十路  
七色の薬でつないでいる生命

玉置 重人

ほどほどが一番と知る車間距離  
ひたすらに歩き続けてゆくテーマ  
輪廻とや土に還ってゆく枯葉  
ここだけの話が怖い誘い水  
惚けたフリ忘れたフリの年の功

恒松町紅

新しい年へ力んでいる八十路  
五体満足祝つてくれる長寿箸  
風が鳴る今日は予定のない炬燵  
善人の相と思っている鏡  
呆けたふりするのも手だと笑つてる

遠山可住

長生きの本ちよございにまだ八十  
冒険野郎それに生まれてそれに死ぬ  
山画けばみな富士になる幼稚園  
神さまが賽銭覗いている深夜  
助け合う残り火夫婦になつて行く

土橋 螢

何もかも忘れて今は墨をする  
災いを転じる餅を搗いている  
新たな極楽行きの夢の中  
両手で捌くあんなことこんな事  
未来からこい来いという行つてみる

仁部 四郎

市役所の車今日から早春賦  
春めいてきたか小川をのぞき込む  
童謡でいいなら二つ春の歌  
春寒や初号活字のスポーツ紙  
三月の家計簿運氣読み直す

野村 太茂津

地球儀を回し優しく問いつめる  
自分さえ良ければよいという卒寿  
桜咲く庭で宜しく待つ卒寿  
仰向けに叢に寝て叱られる  
地球儀を回し考え深くする

波多野 五楽庵

最高の癖は泣く癖生きる癖  
縁という重荷を抱いて生きている  
腰痛の一つがいつも眠らせぬ  
くじけずに歩き続ける花の種  
雪椿今日の記憶が途切れがち

芳地 狸村

群生のサンゴ誇っている白保(石垣島)  
天井のシヤコ貝化石が生きている  
展望台にハイビスカスの登り口  
かご抱いてヤエヤマヤシのお出迎え  
舟底がたのしいサンゴ熱帯魚

宮口 笛生

生活のリズム狂った三が日  
朝酒のうまさ正月極上酒  
味の良い妻のおせちでうまい酒  
極上酒とうまいおせちに酔うている  
酔いざましに薬師寺近く初詣で

喝采もなく照れ咲く赤い曼珠沙華  
 黙々と底辺駆けて老いの愚痴  
 心音の騒ぎを揺する湯灌の儀  
 愛抱いて風に命の溶ける音  
 一輪のバラに答を出した愛いくつ  
 内親王に春が来ました都庁から  
 まだ重いけど春を感じている帽子  
 桃桜 春のめまいが始まった  
 めいめいの楽器鳴らして春の家  
 雲間から春の息吹きさの柔らかな  
 とつぎ先姉妹にある運不運  
 文楽の涙はそっと袖に入れ  
 落石に注意古びたままに立ち  
 病む父へバイト覚悟の受験する  
 緑濃い森には童話が落ちて  
 言葉尻にたっぷり毒が塗ってある  
 あの世には無欲になってから逝こう  
 自爆テロ神がほんやりするからだ  
 小泉よ君の愚痴など誰が聞く  
 恋するとためらい傷が疼き出す

森下愛論

八木千代

八十田洞庵

両川洋々

<p>くらわんか番傘川柳会  <b>創立25周年記念川柳大会</b>          本田智彦句集「てげてげ」発刊記念</p>		<p>阪神・淡路大震災10周年ふあうすと川柳大会  <b>平成16年 年間賞発表</b></p>	
日時	4月29日(祝)12時開場 締切1時 各題1句	日時	4月10日(日) 午前11時開場
会場	三井アーバンホテル (地下鉄・JR環状線「弁天町」すぐ)	場所	兵庫県民会館 TEL078-321-2131 JR元町・阪神元町より歩7分、地下鉄県庁前駅すぐ
挨拶	住田英比古	講演	「揺れて変わって創った暮し」
祝辞	田中新一氏、吉岡龍城氏	宿題	「水」 中村 順子氏 「祈る」 永藤 我柳 選 「起きる」 原田否可立 選 「助ける」 白井 孝司 選 「いのち」 奥田みつ子 選 「灯」 田中 新一 選 「希望」 平山 繁夫 選 泉 比呂史 選
清興	落語 桂 三若	出句締切	12時 (各題2句) 欠席投句拝辞
事前投句	(専用ハガキ)「鍵」磯野いさむ選 3月31日(休)必着	会費	2,000円(記念品・発表誌呈、昼食各自)
宿題と選者	「過ぎる」杉森節子・「色」森 東馬	懇親会	当日受付(80名まで) 5,000円、同会館内
(欠席投句拝辞)	「ひらがな」森中恵美子・「わくわく」泉比呂史	主催	ふあうすと川柳社
	「返事」河内天笑・「記録」今川乱魚	後援	兵庫県、神戸市、(社)全日本川柳協会 兵庫県芸術文化協会他
会費	2,000円(句集・記念品・発表誌、昼食各自)		
懇親宴	7,000円(同ホテルにて開催、要予約)		
投句先	事前投句のハガキに懇親宴出欠、宿泊等明記 足立淑子 方 〒573-0081 枚方市釈 尊寺町28-4-301 TEL072-853-8153		
主催	くらわんか番傘川柳会		
後援	番傘川柳本社・(社)全日本川柳協会		

# 水煙抄

奥田みつ子選

藤井寺市 若松雅枝

神棚の手入れ卒寿が余念なく  
蟠り解けて朝日が柔らかい  
地球危機暖冬謳歌しておれぬ  
考える事も似てきた老夫婦  
明日逢う期待ほのかに髪洗う  
文庫本一冊買って旅に出る

カタカナ語上司論語で立ち向かい  
割り切れぬ気持ちのままに握手する  
言い負けて表に出たらにわか雨  
なりゆきで妻に言いつぎ気が滅入る  
気を回しお世話したのに疎まれる  
天才は汗と涙のあとと見せず

東京都 やまぐち 珠美

雪ぶすま東京駅に描く民話  
白湯香る真冬が凜と気を正す

鈍き音たてて新聞から事件  
コーヒーが苦くて丸くする愚考  
ただあなたの笑い袋になりたくて  
優しさを下心からほどく雪

泉佐野市 稲葉 洋

小羊が待つ春らしき春の世を  
夕焼けに鴉一羽が舞う暗示  
こせこせとして大仏に睨まれた  
深淺や方円がある人の情  
時として友の情けが血に優る  
呼び捨ての苗字飛び交う同期会

羽曳野市 森 下一知

勝ち組の靴に戦の火の臭い  
昇格の椅子に気負いの空回り  
どちらにも転がるようない笑  
後継ぎの肩に重たい向かい風  
悪友が棘を抜き合う茶碗酒

八尾市 松葉君江

踏みこめば次の階段見えてくる  
老母の心揺さぶる童歌

思い出をふやし根っ子を深くする  
大好きな母の顔にはどろぬれぬ  
亡き母が節目ふし目にアドバイス

岐阜市 平野 あずま

糸切った風に広がる未知の空  
目標があるので亀は坂登る  
酒房から書店へ夜の散策路  
無器用なペンでヒントが見付からぬ  
連れ合う絆向田邦子読む

高知県 桑名 孝雄

奉安殿をそつと覗いたクラス会  
稽古着の匂いなつかし武徳館  
のんだくれが静かに四方拝の歌  
ITに一矢報いた地獄耳  
心眼は未熟眼鏡を忘れた日

長岡京市 山田 葉子

送れずに戸の閉まる音さいている  
目印がまだ見つからぬ赤い糸  
言い勝つて心に寒さ抱いている  
帰れずとも待つてくれている山がある  
綿菓子にとけてる父の肩車

和歌山市 柏原 夕胡

介護突入栄養剤の一気飲み  
わたしには弱味を見せてほしいのに  
きつといいひとだろうとつても字が下手だ  
夕焼けに染まるころは風いでいる  
投げかけたころを吞んでくれる海

今治市 渡邊 伊津志

贈るのが好き貰うのは恥ずかしい  
おでん屋の豆腐の艶にある年期  
何気ない親の言葉があとで生き  
躓いた石に焦りを覗かれる  
年輪が袂紗さばきの中で活き

大阪市 三浦 千津子

古稀の春膨らむ夢を追い求め  
心地よく荷物は軽くして生きる  
五感健在神の気配りかも知れぬ  
売り言葉丸めてポイと聞き流そ  
老いて子に従う絆惹なし

奈良県 江波 正純

年金を食わせ財布がよみがえる  
新札もやはり出口が好きらしい  
薬代たんと取り上げお大事に  
スーパをジングルベルで歩かされ  
抜け道は沢山つくり規正する

今治市 塩路 よしみ

雲南市 菅田 かつ子

底辺に生きて哀しい走り癖  
空白のページに本音吐いておく  
自称詩人星へほろほろ泣きもする  
雑兵の靴磨いてもみがいても  
雑魚なりの哲学もって群にいる

日立市 加藤 権悟

計算が合わぬ事だが楽しくて  
ストレスが溜まらぬほどの距離をおく  
キッチンは蜷の愚痴も聞いてやり  
こんなとき支えてくれた夫の腕  
舵とりを顎で指図をするあなた

藤井寺市 俣野 登志子

羽ばたきは今だと父のゴーサイン  
大空の凧に少年期の大志  
かたくなに春を信じているつぼみ  
春風に律義な妻の花粉症  
少年の貌で駄菓子屋さん覗く

大洲市 花岡 順子

人伝に聞いて嬉しい誉め言葉  
娘来る二日がうちのお正月  
シミにシワ増えて今年も健やかに  
お世辞だとわかっていても弛む頬  
ペダル踏み春をみつけに河原風

羽曳野市 吉村 久仁雄

春の足さえぎる雪が柔らかい  
水雨降る時は心がすれ違う  
野良猫と心が通う挫折の日  
うっとうしい心晴らしてくれた空  
偶然に逢えて心が温かい

大阪市 升成 好

キムチ鍋つつき野心に火を点ける  
方便の嘘にこじれる夫婦仲  
家族哀史見てきた萱の温い屋根  
幸せな他人へ今日が少し枯れ  
来た道の微温微風に飽き足らず

草加市 飯土井 健翁

もの忘れ今順調に老いてます  
道楽も芸のうちなり喜寿傘寿  
群集の歩みに溶けて同じ顔  
長生きへ用もないのに歩かせる  
トゲのない嘘に相槌打ってやり

あと五年百歳までの道遥か  
匂に浮かぶおその人となり徳の人  
知恵だけは幾ら積んでも税はなし  
根性を磨くと汗という味方  
浄土かも庭一面の菊の花

米子市 猪 森 スミエ

老化など今年の予定表にない

ドッコイシヨそれでも五感まだ達者

大漁に恵比須顔して五本松

太陽を鱈腹浴びた自然食

太陽がパツと顔出す園児の絵

三田市 堀 正和

煮え切らぬ男へ地雷仕掛けとく

他人のツキちよつと頂くハイタツチ

じわじわと手抜ききの過去が攻めてくる

左遷地を終の棲家として生きる

自分史を書く鉛筆の丸い先

堺市 大久保 伸子

夕焼は刻の流れを忘れさせ

金縁の奥様すごい値切り方

つまずいた小石一つに落ちこむ日

政治家の嘘平然と通用す

生きている音さわやかに庭を掃く

和泉市 横山 捷也

ヒヨイヒヨいと娘が嫁に行つてもた

ネギ刻む音激しくて妻の乱

ぬくもりが欲しくて途中下車をする

つっこみが過ぎて老人会で浮く

何事も流れにまかす老いの知恵

北九州市 岡田 幸生

ただ酒に押え込まれた雑魚の意地

溜息を洩らす受話器と冬籠り

二浪には内緒で母の百度石

五分五分の禍福に生きてゆく輪廻

古里の想いほのかによもぎ餅

今治市 野村 清美

待ちぼうけ心を癒やす花時計

無我夢中猫がじゃれてるねこじやらし

炬燵から指図している懐手

神様のおかげ偶然友に逢う

湯けむりの幸せお湯が溢れ出る

大阪市 尾崎 黄紅

はがきにもさようならとは書かぬ主義

声上げて涙していた夢が覚め

格言がない母のひと言温かい

貯金玉から出してくる義援金

座椅子にも革より布の温かさ

三田市 阪本 藤朗

大根の煮ても漬けても下ろしても

わが子でもやさしく抱けぬ母もいて

朝起きが日ごと遅れる冬の朝

六三三絶えず入試が待ち受ける

一日目だけ浮きうきのフルムーン

札幌市 三浦強一

また妻と言った言わぬで揉めている  
真相を知らぬ他人がよく喋る  
ライバルと握手に飛んだ静電気  
いい人と言われて損な役回り  
逃げられてから気が付いた福の神

日高市 根岸方子

のぞみ号夢の世界へ第一歩  
師の影へせまる歩幅も小刻みに  
落ちこぼれ救う友の手師の笑顔  
白髪染め嫌いですかとまた聞かれ  
肩書はないが信念ありと見る

東京都 小川賀世子

ミレナリオ孫と光の海渡る  
仲見世を覗いて遠い浅草寺  
年頭の抱負も少し光らせる  
年明けのニュースも津波地獄絵図  
おかしいぞ地球の怒りおさまらず

東京都 井上つよし

百年目 日露戦う国技館  
イヴで飲み正月で飲む不信心  
世の中を四次元で見ると年の功  
天災が人の情けを目覚めさせ  
赤錆の鉄路歩いたウツの日々

横浜市 川島良子

焦らずに一步一步を積み上げる  
大吉のみくじと初春を歩きだす  
向き合って瞳と瞳ティータム  
人は人 都会暮しが性に合い  
母という立場に勝るものはない

横浜市 金森徳三

湯豆腐で今年を送るコップ酒  
妻厨房夫ウロウロ大晦日  
今日だけは善男善女初詣で  
ネクタイのしめ方忘れ呆け走る  
平成の常識昭和遠くする

横浜市 巖田かず枝

非常ベル地球が鳴らし続けている  
辞書二冊読書時間のかかること  
妻は口 夫はへそが曲がってる  
痛くても動く手足に感謝する  
義理チョコを配る女の逞しさ

佐渡市 高野不二

年金と賀状はへっていくばかり  
虫食いも少し残して無農薬  
両の手で握手している頼み事  
膳につくまでは呑まないはずだった  
四捨五入切り捨てられる事ばかり

犬山市 吉田 幸子

筆跡に勢いが乗る新春日より

若さっていいなみなぎる始発駅

春色へ力沸きたつ地球博

猪口一杯幸せ色に溶け笑う

譲れない母の味する雑煮椀

京都市 清水 英旺

歳一つとって失うもの一つ

元日の朝深々と清め雪

酉年を思いめぐらす風邪の床

ご婚約会見に咲く地味な華

鬢染めて若く見せたい気の迷い

池田市 多田 契子

願望は走る事ない師走です

すみませんなぜか人より多く言う

なぜいつもこの淋しさに突き当る

血圧に急ぎの用はテロリスト

ダイエット守って私恋つかむ

泉佐野市 備後 三代子

この先は流れにまかそ入院日

二十五時秒針と居る院個室

上澄みの汁と重湯に生かされて

夫ひとりわたしの留守の温め酒

生業を必死で守る新当主

柏原市 伴 洋子

被害妄想の風に巻かれた年の暮れ

どう飾ろうと影に尻尾も角もある

ふたたびを信じて進む茨道

白浜をのんで虚ろな海の彩

揉み消したはずの火の手が身内から

門真市 矢阪 英雄

峠まで楽すぎましたあと苦惱

下る坂鍛えたおかげ軽やかだ

孤独でも若葉が舞えば満足だ

知りあつた仲間がふえて汗忘れ

一人旅折れば仲間増えてくる

河内長野市 大西 文次

軸足を変えて世渡り楽にする

新築のよそのピアノに起される

極楽の字形閻魔に頼んどく

アッパツパ着ても脱いでもアッパツパ

九十五明治の影も黄昏れる

河内長野市 木太 久正

平凡に夫婦ふたりのお正月

孫来ない正月これもまたよしと

病む妻に代り家事をも手際よく

初めてのクリームシチュー作りすぎ

この頃は人のやさしさ身にしみて

河内長野市 印 藤 智 子

大津波古い歴史を問うてみる

叱るより褒めよと本に書いてある

大晦日無言で夫とそばすする

正月の初雪拍手しました

門松に代えて小さい雪だるま

堺市 羽田野 洋 介

気がばりが過ぎて余分な仕事増え

扉開け風も仲間に加えない

近道を教えたことでうらまれる

いそいそがとほとほになる帰り道

サービスよりほしい笑顔とありがとう

高槻市 富 田 美 義

紅白の画像の裏にある驕り

井の中でケータイ食べてるニート族

長寿ほど肩身の狭い長寿国

雪積りセールス日誌留守と書く

言い訳は雪で始まり雪で締め

高槻市 佐 甲 昭 二

すりへった靴の愚痴聞く定年日

約束に背いた遠い日が痛む

内視鏡臓器がざんげさせられる

それからは問わず静かに酒をつぐ

若き日の夢のかけらが眠る駅

高槻市 安 田 忠 子

めずらしく鬼ごっこする子供達

あやとりの出来て小二に拍手され

証明のための更新免許証

ぞっとした運転たまに思い出す

幽玄の山焼き添える冬火花

羽曳野市 永 田 章 司

孫りっぱお年玉から義援金

年賀状幼なじみの数が減り

鑑定に怖くて出せぬわが家宝

ポチ袋増えて爺婆えびす願

スローライフあくびの声もゆつたりと

枚方市 二 宮 紫 鳳

子や孫の声が飛び交う三が日

孫帰り風船一つ部屋の隅

新春の夢をたくして露天風呂

幸せは孫と手を取り初詣で

初雪が舞って詣でる願いごと

藤井寺市 西 村 栄 一

一徹の男がにぎる寿司の味

冗談の巧い夫と丸く住み

少年の心を癒す花の世話

もう食べてしもうた あかん言うたかて

平凡に生きる余生の大欠伸

藤井寺市 伊藤アヤ子

不景気を切りさく刃物探してる  
独り居に笑いを連れて友が来る  
雪も解け心もとける露天風呂  
この命あなたに預け五十年  
カニツアー墨絵ぼかしの雪化粧

箕面市 寺井柳童

四月堂あるのを知った二月堂  
朱雀門 大極殿で日が暮れる  
災の字を福にとり変え二〇〇五  
駅伝の走路背を押す白い富士  
第九条守る自信が揺れはじめ

八尾市 脇俊子

生きている証拠と夫は髭をなで  
年始め恵方を探す風になる  
古希になり見えないものが見えて来た  
人の川私流され角がとれ  
寒波来る足が日向を探し出す

八尾市 鷺見章

カレンダー一枚めくれば冬の景  
兵の日のパンは乾パンうまからず  
有難きかなおいしく食べて朝のパン  
早朝の病院の窓まだ暗く  
飛行雲流れ流れて空青く

八尾市 田邊浩三

母ちゃんの筋書き通り生きてます  
一言が担ぎ出される羽目になり  
担がれて満足そうなギャル神輿  
ストレスが出口をさがすコップ酒  
バーゲンの供は出口で待つてます

八尾市 西川義明

お年玉孫には奮発してあげる  
のんびりが嫌いな母の手内職  
屠蘇に酔い鏡の顔が福笑い  
合格に受話器の先もうれし泣き  
この先は趣味に楽しむ風に乗る

大阪府 神野千恵子

いよいよと節目節目に思うだけ  
ゆつたりと空気が動くとんびの輪  
遠景の中で平和に見える町  
華やきも静けさも無いお正月  
福祉とは無縁の人の介護論

大阪府 若月祐作

正客は茶碗の銘をじつと見る  
核問題我が列島に迫り来る  
背を伸ばしスタミナつけて恋をする  
一に前一二にも前へと出る相撲  
卒寿生き額に刻む深い皴

神戸市 両川 無限

あの頃の野心が森に埋めてある  
甘口のワインに本音吐かされる  
指切りをするから嘘が重くなる  
ばんやりと政治見ていたツケが来る  
こぼれ種思わぬところで咲きほこる

神戸市 田中 章子

無いところ補い合つて妻と居る  
あるところ主張し合つて夫と居る  
持ち点は平等要は使ひ方  
内容の重い本なら軽く読む  
青春の日々の火種は胸の底

神戸市 木村 忠義

搗く人が居なくて眠る白と杵  
寒くない懐にして同期会  
雑草のように悔恨顔を出す  
冬が好きみんなで囲む鍋が好き  
目をつぶることができない美女のミス

相生市 村木 信子

若水を汲む朝の気よ凜として  
人間が好きで一途な白い足袋  
逃げ足の早い月日よ我がこよみ  
脇役に甘んじ明日へ螺子を巻く  
多数決正論が消え負の気持ち

尼崎市 河津 正治

災難も己が試練と受けて起つ  
還暦の女心が揺れ動く  
ときめきの旅を誘つた花暦  
捨て石のひとつも無駄をさせぬ欲  
終章を飾る言葉に四苦八苦

伊丹市 延寿庵 野鶴

おんおんと鐘の余韻がまだ響く  
社会鍋余裕はないが寄付少し  
せせらぎにこころ解け行く無の時間  
変色の諭吉をこすり見る透かし  
密室のノロウイルスが喋り出す

三田市 石原 歳子

知らぬ間に歳を取つたと試着室  
細やかな願い大きく鈴を振る  
妻の留守ぎこちない手で米を研ぐ  
柔らかな温もり貰う猫の背な  
摘み草の野道車に奪われる

西宮市 片山 忠

どっちみち駄目なら酒も呷ります  
脱税の見本のようにされる医者  
大抵の電話は妻が留守で済む  
恥じらいを少し残したい女  
走る人見ているだけで出る元氣

奈良市 乾 春雄

雪が降る待ち人想う身は炎  
名人戦部屋一杯に鬼気迫る  
うたかたの恋も左遷と共に消え  
無理しても渡つてすます義理の橋  
レシートが小さな秘密かくして

奈良市 矢野良一

いつの間にか身の丈孫に追いつ越され  
四十年尻に敷かれて恙なし  
古賀メロデー一心にしてみる哀調歌  
誕生石間達え妻に責められる  
臨席に美人ママ来て進む酒

和歌山県 森下順子

いつそ雪になればと思つうつの日は  
一人になつてどんだん強くなるわたし  
一片の雲に恋する風になる  
お正月寒波に心締め直す  
起承転結ほど良い嘘がまぜてある

和歌山県 辻内次根

幸せは何処にでもあるうどんすき  
雨の音遠い昔を聴いている  
捨てるには惜しい要らない物の数  
病む人に時計の止る夜になる  
軽四の広さで足りる老い二人

和歌山市 喜田准一

充たされぬ今を紐解く過去で埋め  
やせ腕に気力みなぎる力瘤  
我の強い人生訓で生き延びる  
成り切つて唄うカラオケ出るクシャミ  
ほろ酔いでずつとこのまま居たい夜

和歌山市 山田侃太

誉められて肉ジャガ旨くなつていく  
診察室出てスキップをしたくなる  
いい値段するはず有機無農薬  
この星の軸がぶれているニュース  
判を押す機械となつて監査前

和歌山県 村中悦男

笑わせておいて泣かせる芸がある  
いい話してくれそうな妻の笑み  
凶星だね目だけ笑わぬ顔になる  
笑顔よしすんだ瞳に出る温み  
赤ちゃん笑顔に怒る者いない

鳥取市 森美智代

被災国へ日本もどんと太つ腹  
大津波の前に帰ってきた娘  
連休のこの静けさよ外は雪  
胃カメラにストレスためて叱られる  
わたしより元気な猫が恐ろしい

鳥取市 横田 春名

寝正月できる我が家は安泰だ  
年賀状想い溢れてやつてきた  
厭だった人も許せて老いていく  
長電話老いた姉妹癒される  
成人式平和をキープしておくれ

鳥取市 山岡 紀子

ありがとう今年も貰ういい笑顔  
しあわせを確かめている非常口  
にんげんを忘れてカモと遊んでる  
人間を生きているから欲が出る  
大吉に期待はしないことにする

米子市 小塩 智加恵

口達者小さく縮み喜寿迎う  
墨のあと枯れてきました年賀状  
型だけ尻の下です妻笑顔  
お年玉頂くときはおばあちやま  
箸袋孫に書かせて三が日

鳥取県 橋谷 静江

西年の父子で迎える福の神  
西年へ羽搏く夢がある若さ  
人の世話出来る元氣を持って立つ  
新年に新町となる夢を追う  
のこされた余生いきいき暮したい

松江市 山根 邦代

古希までの道いろいろの花が咲き  
笑いあり夢のふくらむ老い仕度  
振りむいて若さ貰えるわけもない  
降る雪も私も同じ気候な日  
過疎の地も賑やかになる雪化粧

出雲市 荒木 英子

初春に玉砂利ふんでみくじ引く  
母娘 喧嘩しながら仲がいい  
余生まで背すじのばして八十路行く  
花の精美しく咲きよい知らせ  
残り火は唯ひたすらに趣味の道

出雲市 加藤 スズコ

家族の輪夢それぞれに屠蘇に酔う  
息子夫婦に契り深めた虹を見る  
余生すごろくサイコロ委ね羽づくろい  
やさしい言葉生きる元氣を貰います  
自分史に秘めた契りを抱いている

鳥根県 武島 ちよえ

年新たプラス志向で行くとする  
傘寿とや未だ子の事孫のこと  
新札が弾んでいきますお年玉  
こんな時支えてくれる友が居る  
反省は心のゆとり出来てから

倉敷市 撰 喜子

同病の人と話して乗り過ごす  
ゆつくりと余生楽しむ趣味がある  
財布から自由に飛びたがるお金  
一人住む夫に逢う日のメーキャップ  
子育て論ぶって吾が子は意に染まらず

府中市 馬場利子

風を選ぶアンテナ張って生きのびる  
人生に疲れて明日の面を彫る  
嫌いですわたしを晒す風がいる  
雪道の靴の音にも春を待つ  
吹雪く夜のワインの味のまろやかさ

府中市 藤岡ヒデコ

七草が済んで暮らしは現実  
暮れよりはゆつくり進めなあ時計  
主役の座下りて気持ちはまだ主役  
悔いのないのを探して球を投げ  
一月は元氣今年も大丈夫

高知県 近森 功

松とれてもとの夫婦の長い夜  
鬻られた脛を曾孫にしゃぶらせる  
肩書きはいらぬ屋台のコップ酒  
初恋をそつとためとく冷凍庫  
さがし物歩きつかれた万歩計

高知県 百田 幸

父母逝きてふるさと遠い姉妹  
ボロボロの辞書父さんの匂いする  
採算は言わず私は農が好き  
再会へときめく友が一人いる  
いつも待つ妻が抱いてる不発弾

シドニー 三谷 たん吉

総理より俺がましだと思える日  
鏡拭き見直してみたいいい顔だ  
ろくでなしばかりの世から神隠れ  
底がゆれ魚もびつくりしたろうか  
今年また何度見るのかお詫びシヨウ

シドニー 坂上 のり子

今の今だけが確かな命かも  
雪と熱クルツと天を回せたら  
神業にかなわぬと知れテロの策  
今の世はどんな知恵いる時代だろう  
悪さの孫叩くと嫁がびつくり目

メルボルン 藤原 ポン吉

この国で溺れるものはサメつかむ  
こちらではおせち煙まくパーベキユー  
初夢が悪夢でしかも二本立て  
おみくじを吉がでるまで引きまくる  
俺はみそ妻はすましと初げんか

堺市 藤井 一三三

逝く姉の髪を涙で梳いてやり(姉茂子逝く)  
姉に似た背を師走の町に追う  
ちちははと寝て月を見よ星を見よ(姉の納骨)  
みな春を待ち侘ぶ小千谷村の雪

秋田県 湊 修水

黒田家にうれしめでたいお正月  
九条にまもられ平和なお正月  
大津波絵にもかけない怖しさ  
ストレスがたまりあばれた海の神

西脇市 七反田 順子

つつがなく母は年輪刻んでる  
バリアフリー背筋も伸びて視野広く  
巣立つ子は真っ直ぐ飛んで行きました  
ぶり大根煮込んだ味は母ゆずり

八尾市 中島 春江

寒の水飽食の胃をひきしめる  
大きな夢こわれ小さな夢をみる  
お気楽なひとり暮しも人恋し  
昭和の常識お人好しだと孫は言う

奈良市 田中 賢治

皇太子天機をもらす明り窓  
天井の海老の姿は値段並み  
ポラリスに天祐託す赤い糸  
セールスへ留守番ですと妻の声

唐津市 岩崎 實

午前四時人影ぼとり音させて  
割り勘が一番いいと食べおわり  
後始末いつも引き受け帰る人  
差し入れの銚子でつなぐ顔と顔

横浜市 長島 亜希子

幼子が使うケイタイ使えない  
花の名の由来浅学知らされる  
辞書片手藤村を読む冬休み  
ほろ酔いでまた嫁した娘に電話する

横浜市 布山 嘉信

故郷の誇り気高い信濃富士  
幸せを抱いた年賀の顔写真  
温室の花店先で震えてる  
安全の祈願の帰り事故に遭い

鳥取市 岡田 信恵

初歩き踏みだす一歩あの笑顔  
年賀状孫の写真は泣き笑い  
人脈ですいすい泳ぐ人もいる  
何もかも背負いすぎたよ背伸びした

八尾市 赤木 妙子

あなたとならば飛び越せる溝  
落款でバランスをとる墨と紙  
爺ちゃんの広い背中にある威厳  
バランス取って渡るこの世の丸木橋

犬山市 金子 美千代

被災地の踏ん張りに酔うルミナリエ  
ドリンクが効いてきたよう大掃除  
幸せが逃げないように作る笑み  
六十の青春ちよつと飛んでみよ

岸和田市 坂口 英雄

酒飲むと自慢話をしたくなる  
二年目は変わるか岡田タイガース  
につこりと笑って来れば何かある  
一年の計より今日の酒のあて

寝屋川市 岡本 勲

山里の灯り奪った震度7  
お雑煮もお屠蘇も旨いありがたさ  
環境破壊緑の地球泣いている  
余生今生きて喜びかみしめる

愛知県 河合 ますみ

歌哀し難聴の母口ずさむ  
ポツネンとおもちゃの残る部屋に居る  
心憂き日の逃げ場所は本の中  
買わないとわかってからの無愛想

八尾市 田中 トシエ

方言の対話の中に嘘はない  
単線に乗り換えました八十の旅  
長電話行って話せる距離に居る  
鏡拭く昔の顔に逢えるかも

八尾市 平川 幸枝  
のんびりの人が沸かしたかくし芸  
鯛大根煮えて佳境の本を読む

新しいハートに替わる年おんな  
食事会一葉さんが姦しい

出雲市 川島 和歌子

ストレスを溜めているから眠れない  
大家族朝の混雑戦です  
健康で日々平凡の暮しぶり  
温暖化小春日続く十二月

吹田市 二宮 栄子

核家族揃い部屋中灯がともる  
合併に里も市になり初便り  
子の手前まあるい母で押し通す  
ヨン様よりきよしにしばれ笑われる

和歌山市 寒川 武

ポケットの拳に我慢させている  
寝転んで行儀作法の本を読む  
謙遜もそこまですると嫌みです  
澄んだ目で母は叱ってくれました

宝塚市 丸山 孔一

ひと月で新車に傷のああ無情  
北風に負けず花咲く蘭ひとつ  
木洩れ日が落葉の煙縞に染め  
寒鳥枝で思案の一人旅

昭島市 野口 忠

災の字は去年限りでもう御免  
中越は雪割草と春を待つ

睨めっこしたくなるよなダルマ市  
ゴメンネのその一言が出不精で

高岡市 青井 はつえ

大吉をお守り代わり持ち帰る

仕事一途生きたこの身へ肩たたき  
久しぶり夫婦漫才フルムーン  
パツク詰め元の姿を子は知らぬ

静岡市 中西 雅

雪原の鶴舞めでた酉の年

誕生日君はあの日の若いまま  
京みやげ亡き友がいる香袋

バリ知らずシャネル五番をプンプンと

大山市 関本 かつ子

吐く息の白さも忘れ初日の出  
好きな花いっぱい植えてお正月

いいことを今日も書き留め床につく  
血圧の話題にやっと座が緩み

尾張旭市 三浦 きぬ

七草のねたが揃わぬ今朝の粥

天災が多すぎ逃げ場ない地球  
この世からあの世へ渡る橋欲しい  
初夢に見ない富獄の色紙掛け

滋賀県 萩原 藻根

生き急ぐなかれ山茶花続く径  
生と死のくるくる冬の風ぐるま  
あの頃の私に還るジャスマミン茶  
温暖化の祖国の世相寒すぎる

京都市 三宅 満子

脳からの指令通りにいかぬ家事

犬同士じゃれて喜ぶ顔見知り  
ごめんねが言えず気づけば遠い人  
古巣から飛び立てぬ鳥ニート達

大阪市 伏見 雅明

一年のほこり払って福も逃げ

韓流に大騒ぎする平和呆け  
孫ふたり機転利く子と利かない子  
願いごと草書で書いてルビを振る

大阪市 池上 清治

世渡りの上手横目でやり過ごす  
世間体気にしてるのは自分だけ

冬ソナのアンは気にせぬ世間の目  
和やかな世間の縮図喫茶店

大阪市 中井 萌

腹八分言いたい事は爪の先

舶来の野菜で作るママの味  
息子居て娘も欲しい欲の皮  
妻めとり息子他人の顔となり

今年こそ幸せください福寿草

街頭で聞かすギターも冬の音

大寒の風もいとわぬ万歩計

振り袖を着てもブーツの歩き方

災の字が悲しアジアの大津波

七十歳怒る役所の無駄遣い

会長が辞めたら払う受信料

正月は解禁 医者が屠蘇をくれ

紫陽花も新芽を出して春迎え

リモコンの操作一つでいい湯だな

書かないと忘れてしまふ漢字だが

春近し遍路の旅の身支度を

宝くじ番号見ずにしまつてる

信じても信じきれないことがある

夢を買う勇氣が欲しい福袋

葉牡丹の渦に煩惱たたみこむ

添書きに親しみ込めて年賀状

四苦八苦煩惱はらう百八つ

申送り後振り向かず西迎う

鼓動聞き今朝も生かされ見る朝日

大阪市 吉内タカ子

大阪市 平井露芳

大阪市 吉川弘泰

東大阪市 米田水昇

大阪市 中村れんげ

同業が偵察に来る流行る店

あれ瘦せるこれも効くよで薬漬け

帰る所あつて寛ぐ旅の宿

起こされた目覚し睨む冷えた朝

年輪の軋み愛しいしわ白髪

西年や世相もやもや吹飛ばせ

早う起きと猫が私の肩たたたく

久闊の友の年賀に安堵する

合格で心も金も飛んで行く

妻よりもおれをよく知る縄のれん

孫と祖父繋ぎ止めてるお年玉

マニキュアを塗つた六十路の指に皺

太るから我慢してたがえい儘よ

金毘羅宮横目にうどん食い歩き

うどん食い食い食い巡る遍路みち

音の無い世界に手指舞う如く

失語の父何を言つてもうなずいて

先生に気にして貰う果報者

秋日和する事多し何もせず

被災地祈る雪が降らずに春を待つ

大阪市 寺井弘子

大阪市 吉田富美

泉大津市 助川和美

河内長野市 坂上淳司

河内長野市 内海綾乃

岸和田市 堤 植代

豊中市 源田 啓生

ボケ防止祈って神の煙あび  
お年玉子供にもらう年になり  
食べて寝て増えるばかりの体脂肪  
捨てられぬやっぱり私戦前派

岸和田市 中岡 香代

富田林市 古田 千華

痩せ葉いっぱい飲んで肥えたママ  
気軽にとサラ金保険コーマーシャル  
不意打ちにされたキスから心ゆれ  
オレオレで祖母が年玉出し渋り

岸和田市 森元 ふみよ

誇り捨てリラックスする定年後

東大阪市 今岡 貞人

こっそりと呆けない本を読んでいる  
侘しさの芽をもぎ取って旅に出る  
孫の筆年賀挨拶今年より

堺市 荻野 象山

枚方市 小川 良吉

心斎橋売れてんかいな人通り  
どん尻が後ろ気にして振り返り  
子はなれたゆとり介護へボランティア  
寄って来て春を賑わう三世代

高槻市 大崎 侑子

藤井寺市 増井 ヨシ枝

ブランドを買って世間に並んだ気  
世渡りの上手い人には距離をおく  
世の中は成るように成る焦るまい  
長電話用事伝えぬまま終り

初笑いもみじの手から立つちから  
針千本飲ませぬ嬉し嘘もある  
神様と喧嘩してでも子を守る  
死ぬるまで頑固通した亡父が好き

悪がきに泣く友かばう心みた  
クラス会鬼籍の友がまたふえた  
こわい顔刺身が美味な鬼オコゼ  
除夜の鐘消えまた欲がむくむくと

如月の夕焼なぜか亡母恋し  
枯野行く二人の僧の袖に風  
初雪の師走に父の忌が巡り  
暖冬は今日でさよなら寒波くる

藤井寺市 鈴木 いさお

いのち少し分けてあげたや一葉に

毎年のことです三日坊主です

子の甘え突き放すのも親の愛

賢を病み初めて賢の場所を知る

藤井寺市 吉田 喜代子

新年の挨拶まずは犬仲間

基敵が逝って嚴父の小さな背

修行僧ゆれる煩惱傘の雪

酉年の老春楽し飛んでみる

八尾市 寺川 はじむ

担がれて一度は渡る義理の橋

やかましいやつで憎めぬ無二の友

叱った孫に筋通されているタバコ

人の子だなあそっと担いでいる縁起

八尾市 笹倉 ひろし

妻にまで本心上手く伝わらず

コッコッコ西が賀状でやってきた

禅の庭枯れ山水の異空間

酉年も幸せ求め暮れの寺

大阪府 小栢 こずえ

予定表書いてときめくカレンダー

月冴える冷気が顔をなめにくる

生きている間に生きた金遣う

判押したようにポストに行く日課

大阪府 畑中 節子

梅一輪華やいでいるお正月

御神燈灯して晦日の雪光る

蟹鍋の湯気越しに見る雪の庭

幸せはアハハで受ける家族の輪

大阪府 高木 道子

おしゃべりがおしゃべり嫌っている不思議

裸木に生きる手立てを垣間見る

国語力低下すれども口達者

一を聞き十を悟れず日々生きて

神戸市 山田 婦美子

我儘を通した方が勝つ文化

蓮根のように見通しほしい年

初雪にほっと一息熱い爛

田舎にはむかしむかしが生きている

尼崎市 古川 正子

屠蘇がわりワインを開けておめでとく

初詣で東寺参拝小雪降る

芒原秋の名残の風が吹く

夕茜明日は天気と寒い風

尼崎市 小池 幸子

手作りおせち笑顔で囲む三世代

これからも自由気儘に惚けけう

御無沙汰の友の賀状に近況を

朱のお椀年の始めの晴れの役

篠山市 谷田 多美子

御先祖を新居に移し屠蘇を酌む  
真つ白な新年翔んで鈴を振る  
ありがとう素直に言えて朝のパン  
丸い顔揃えた孫にお年玉

篠山市 永井 かほる

大風も知らずねてたと笑われる  
炊きたての御飯のにおいで目がさめる  
嫌な事心の奥で鍵をかけ  
野菜皆雪のペールで元氣です

三田市 辻 開子

信念は腰まがつてもまげないよ  
島めぐり心癒され消えた愚痴  
母娘して厄除け祈願初詣で  
松が明け川の字とけた部屋寂し

兵庫県 安達 厚

こたつから出られぬままに昼の声  
ごそごそとすれば仕事の種つきず  
里の山我になにやら言いたそう  
今日のこと明日へつなぐ日記書く

兵庫県 黒崎 美紗子

朗らかに買う気にさせる店の人  
ポーナズと縁切れたまま話の輪  
行く末を案じ携帯持たされる  
運良くて座るポストの暖かさ

兵庫県 岩本 美緒子

蘭玉の賀春呼び込む玄関口  
紙吹雪受けようわたし傘寿です  
活入れて儲け余生を楽しまん  
孫の笑み大人になったなと思う

生駒市 小西 稔

天高く馬も肥満が気にかかる  
神詣で自然まもれと天の声  
和を持って残る余生は笑い顔  
古代から残る遺跡に謎ひそむ

橿原市 藤永 実千代

暮れ掃除普段の付けが襲い来る  
死に急ぐ子等に少ない選択肢  
目も耳も衰え今は口達者  
修練が体の芯を太くする

和歌山市 根田 よしこ

初夢におどり出ましたドラエモン  
パソコンの腕まだ元氣年賀状  
元日に去年消し去る雪が降る  
わたし流手話も交えて老母と居る

和歌山市 坂部 かずみ

絵手紙をイモ版で返す背比べ  
オン様とどこへも行かず三が日  
けつまずき誰にも告げず備忘録  
片付けてまた捜し出すゴミ袋

和歌山県 木村 徑子

ころもむ一時辞書に助けられ  
視野無限ふくらむ夢は虹の色  
臆病のベンが跳ねてるホラ吹いて  
本流へ押された木の葉戻れない

鳥取市 近藤 秋星

気合いだ気合いだと元旦の朝飛び起きる  
酉年や無からは何も生れない  
手を温め心温めて書く賀状  
妻無口雪も黙って降っている

鳥取市 山口 千代子

年賀状曾孫の写真見ては笑み  
前向きに歳を気にせず夢を追う  
事無きを幸と思つて感謝する  
被災地に思い寄せれば我慢出来

鳥取市 鈴木 一弘

懐のぬくもる誘い眉に唾  
浅学を根と年間で埋めました  
軽い口責めが重たくのしかかる  
軽はずみあとにもどれぬ鞠ころび

鳥取市 河田 のり代

背広着た新成人の孫に惚れ  
泣き笑い八卦に任す年始め  
自慢して食べた餅数今は夢  
初夢は赤いドレスでダンスした

鳥取市 山岡 久枝

新年のさかずき心して受ける  
さかずきを両手に受けて福を待つ  
鶯が鳴くまで待とう冬ごもり  
火燵出て春を探しに田んぼ道

鳥取市 谷岡 清子

一人とて嘆くな影がいると言う  
遥か山屋根に古里重ね見る  
座つても立つても一人隙間風  
初夢に昔の彼が会いにきた

倉吉市 酒井 芙美子

やりくりが上手になつて主婦の顔  
何を待つ訳ではないがポスト開け  
子供から生きる希望をもらつてる  
恥ずかしや子供に見せる背がない

倉吉市 前田 喜美子

議事堂の空晴れやかな日は遠く  
今のことヒョイと忘れて気が重い  
世直しの黄門さまを待っている  
五年後に笑る柿の木植えました

境港市 中井 虎尾

左右見てお守りを見てはい発車  
酉年も飛ばずに歩くマイペース  
気のせいか千支の鴉のカーに艶  
定速で走れば抜かれ抜かれ行く

境港市 遠藤 那珂子

どうしても笑い袋がほどこけない  
手を添えて嫁と姑で初詣で  
たつぶりの愛を盛り込む朝の汁  
好きだけど心の奥に入れない

鳥取県 毎田 信雄

家毎に門松立てたなつかしさ  
旧暦の方がわたしの性に合う  
勉強に光足りない窓の雪  
如月もはや佐保姫の声掛かる

鳥取県 岡村 孝明

元老にされて口出し封じられ  
年重ね気配りの裾広くなる  
募金箱美人の方へ足が向く  
排気ガス吸わされ松は泣いている

松江市 松浦 登志子

損するとかわかっていても開く口  
太陽にやたら会いたく睦月かな  
年明けて母の眼力いい予感  
平和だなツナミの来ない街に住み

雲南市 福岡 博利

世の乱れこの手のとどくことでなし  
唐紙を張替え気分も青い天  
枯葉舞う姿みとれる風のみち  
与野党からねらわれている消費税

安来市 原 煩惱児

知恵の輪を解かず母が逝き給う  
市になって八岐大蛇面映い  
門閤もなくて三食昼寝する  
災年を締める慶事の紀宮

鳥根県 松本 聖子

初春や亡夫の夢見た七回忌  
味噌汁がやっぱり美味し呑み疲れ  
ゆとりない年金またも減らされる  
親馬鹿と言われまだまだ逝かれない

岡山県 矢谷 富士野

ひっそりと生きて不足のない命  
暦はぐ老いの我が身をはぐように  
脱皮するたんびに変る風の彩  
閻魔様亡夫は元気でおりますか

宇部市 高山 清子

初めての船旅傘寿幸の秋  
信じたい彼言いつが多すぎる  
まだ女年齢にふれない誕生日  
傘寿の恋逢えるよろこび髪を染め

東かがわ市 向山 治延

霜とけて春はそこだとフキのトウ  
孫帰り部屋に温もり残して  
信頼をして居る瞳裏切れぬ  
見舞うたび淋しい友の目に出あう

《最新刊》 田口 麦彦 著

楽しみながら上手くなる

# 穴埋め川柳練習帳

クイズを解いてきみも達人

現在活躍中の川柳作家の秀句を例題に、キーワードを埋め字することで自然と川柳が上達する本。クイズを解く楽しみと川柳が上達する喜びを同時に手に入れることができます。例句はテーマに分けて出題してあるので体系的に学ぶことができます。また原句の答えだけを紹介するのでなく詳細な鑑賞も掲載してあるので十分に納得することができます。三章からは各句を埋める問題で捉え方や適切な措辞の方法まで理解することができます。四章の添削コーナーでは段階的に推敲添削を紹介、実作に役立つように配慮しました。

四六版並製 240頁 定価税込1680円送料210円

《好評発売中》

## 川柳表現辞典

田口麦彦 46上製箱入  
税込三三〇円送210円

現代川柳の秀句六九二七句、見出し語一五四二語をあげて語の意味等説明。表現の方法と技術を示した

## 川柳技法入門

田口麦彦 46上製カバ  
税込一九八〇円送210円

川柳上達の技法を九二五句の引例で説明。一句の完成までの推敲添削他 風刺・ユーモア・比喩等の方法

## 現代川柳入門

田口麦彦 46上製カバ  
税込一九八〇円送210円

川柳の基本から作句の心構え、自由に人間と社会を現代の言葉で例句をあげて説明。実作者への入門書

## 時事川柳入門

田口麦彦 46上製カバ  
税込一八三五円送210円

現在を17音で切りとる諧謔精神の表現方法やサラリマン川柳の即興性など、九五三句の例句で説明

〔ご購入はお近くの書店か直接小社まで・各書の内容見本進呈〕



# 愛染帖

## 波多野五楽庵選

弘前市 高瀬 霜石  
 ナメケモノ他人のような気がしない  
 赤くなる南天の実も家計簿も  
 死ぬまでに一度押したい非常ベル  
 私を透かすと蒼いあおい海  
 まだ続く紆余曲折の自分史よ  
 感情線冷やして恋を閉じ込める  
 和歌山県 三宅 保州  
 ありふれた顔で中肉中背なり  
 風邪ひとつ引かぬ私の花粉症  
 和歌山市 木本 朱夏  
 生き恥のひとつふたつは勲章だ  
 閉じて開いて生きてゆく日の冷蔵庫  
 富田林市 池 森子  
 シミュレーションは完璧指先まで頭脳  
 指切りの中途半端に雪が降る  
 弘前市 斉藤 荔  
 電光ニューズ寒々と一字ずつ  
 切り取り線まっすぐ切れぬ手の震い

弘前市 高橋 岳水  
 マジシャンの袂に深い森がある  
 逃げ水に幻惑された現在地  
 和歌山市 安土 理恵  
 好ると知らぬ花芯に邪気はない  
 還つておいで冬の蛍の亡骸よ  
 大阪市 川原 章久  
 虚と実を混ぜると川は渦になる  
 包丁のリズムが軽い今日は晴  
 尼崎市 長浜 美籠  
 振り出しに戻る覚悟の鶴を折る  
 メールより頬が染まっている電話  
 海南市 堂上 泰女  
 五里霧中こころが勸の呀え所  
 型少し崩し世間の風に乗る  
 和歌山市 榎原 公子  
 露のとう風の隙間を窺いぬ  
 アンクルを変えて居場所を確かめる  
 西宮市 門谷たず子  
 まだ読めぬ亡夫の日記と冬ごもり  
 戦場へ聖書一冊持つて行く  
 大阪市 伏見 雅明  
 伝統の鼓打つ掌に血がにじむ  
 東大阪市 中岡 妙  
 通りゃんせ開いてる方に鬼が棲む  
 わたくしを忘れるちよつとした眩暈  
 藤井寺市 高田美代子  
 その心昨日はここに在ったはず  
 唐津市 仁部 四郎

鳥取市 土橋 螢  
 今死ぬと惜しい男と言っだらう  
 藤井寺市 大田扶美代  
 指切りを忘れて草の実が落ちた  
 和歌山市 桜井 千秀  
 身を引いてじんわり温さ確かめる  
 四條畷市 吉岡 修  
 吹きだまり春にはきつとここを出る  
 高槻市 田中千孝子  
 茶も愛も濃すぎて人を眠らせぬ  
 東京都 やまぐち珠美  
 喉仏おとこへ追ってくる山河  
 和泉市 西岡 洛酔  
 三月の靴よ歩調を上げないか  
 鳥取市 吉田孔美子  
 身辺の纏めはすでに不可能だ  
 弘前市 相馬 銀波  
 約束のひとつ消したい雪がある  
 弘前市 福士 慕情  
 雪明り首を竦めている布団  
 弘前市 都倉 求芽  
 初鏡 小指の紅がよく喋る  
 三田市 久保田千代  
 無になつて緞帳上がる時を待つ  
 羽曳野市 吉川 寿美  
 掌を返す裏も表もみなわたし  
 和歌山市 楠見 章子  
 生きている証 冬の絵がたまる  
 泉佐野市 備後三代子  
 鶴形が哭いた歴史をまた見るか

米子市 白根 ふみ  
ふるさとを捨てれば母が老いやすし

西宮市 牧淵富喜子  
いずれまた花の噂を聞きに行くと

熊本県 高野 宵草  
お流れをいただく世辞は考えた

海南市 谷口 義男  
何もかも金で始末を付けに来る

八王子市 播本 充子  
西歳のレンズを広角に代える

鳥取県 竹信 昭彦  
鋸の歯になって水平線冬日

弘前市 宮崎ヒサ子  
どっと雪今朝も変らず味噌を溶く

美祿市 安平次弘道  
墜落しているのはやはり昼の月

和歌山市 武本 碧  
自己責任背負って生きるかたつむり

和歌山市 福本 英子  
ここだけの話が溜り狂いそと

鳥取市 土橋はるお  
なみだ拭き笑って月の出を待とう

倉敷市 小野 克枝  
消え失せた愛よ女の砂時計

吹田市 岩屋 美明  
あなたを見ると酸素不足になつてくる

鳥取市 徳田ひろこ  
太陽もメトロノームも速くなり

八尾市 生嶋ますみ  
坂かかも知れぬ気配の親離れ

黒石市 相馬 一花  
ご自慢の鎖骨も見せて弾くピアノ

八尾市 吉村 一風  
つき合つていけぬ新語にいじめられ

大阪市 小谷 集一  
酒一合情けふつつ沸いてくる

岡山市 井上柳五郎  
不器用に生まれて損も得もあり

富田林市 古田 千華  
優しさは思いやりではないはずだ

西宮市 西口いわゑ  
丸とバツ間違えられてからドラマ

高槻市 乙倉 武史  
残り灯を掻き立て挑む残夢抄

八尾市 井尻 民  
生涯の焦りと悟り入り乱れ

堺市 矢倉 五月  
継ぐ人はないが棚田に春の陽が

唐津市 樋口 輝夫  
身のほども知らずに跳んだ水溜り

唐津市 井上 勝視  
逆らえぬ老いに反抗してみたい

大和高田市 鍛原 千里  
好奇心たべる女でまだ若い

交野市 田岡 九好  
六畳の日溜りにある寂光土

米子市 林 瑞枝  
スタミナをまだ秘めていた落ち椿

松江市 安食 友子  
タバコから蓼食う虫となつた亡夫

堺市 志田 千代  
仏壇へ亡母の植えた花を切る

出雲市 園山多賀子  
内視鏡まだ飲まないが生きている

松江市 川本 畔  
見えぬ糸にたくり寄せては泣きじやくる

鳥取市 福田 登美  
運命の巡り合わせに逆らえず

岸和田市 雪本 珠子  
現実と夢のはざままで深呼吸

大阪市 古今堂蕉子  
極上のB型薬に生きています

京都府 丹後屋 肇  
安堵感ふたりで啜る午後のティー

河内長野市 植村 喜代  
何変ろうと雪の白さは変らない

鳥取市 山岡 紀子  
初春に五感がふつと目を覚ます

和歌山県 森下 順子  
狂いそうな私を掬う冬銀河

米子市 青戸 田鶴  
冬の画布に裸木ばかりかいている

八尾市 村上ミツ子  
キリギリスに始末した金せびられる

富田林市 片岡智恵子  
燃えつきた形で夢が遠ざかる

西宮市 片山 忠  
予定表見せて己を膨らます

香芝市 大内 朝子  
はしたないわたしを入れる火消し壺

岡山県 福原 悦子  
情炎もいつか埋み火となる余生

寝屋川市 森 茜  
一睡のあとオリオンの瞬きと

大阪市 神夏磯典子  
八方に目がありません 抜けれぬ

横浜市 金森 徳三  
本当の自分を探す鐘の音

鳥取市 福西 恭子  
孝行のシナリオ描いたまま未完

奈良市 米田 恭昌  
丸眼鏡の訥弁について騙される

尼崎市 田辺 鹿太  
後悔の種を作ったのは自分

羽曳野市 森下 一知  
終の地になるとは知らぬ途中下車

堺市 桜沢 千世  
スイートピー軽いコラムを選つて咲き

八尾市 高杉 千歩  
呆けだして本音出てくる面白さ

東かがわ市 木村あきら  
鬼の面外せないまま黄昏れる

神戸市 山田婦美子  
迷路にもきつと出口はあるだろう

唐津市 山口 高明  
ライバルの絵馬もおんなじ願ひ事

唐津市 田口 虹行  
二人揃うて寺にも行ける俸せよ

高知市 小川てるみ  
ボジョレーを空けてリッチな夜とする

今治市 塩路よしみ  
句読点打つてシナリオ練り直す

吹田市 太田 昭  
手袋の母の温みに会つて寒

尼崎市 春城 年代  
福袋かるい期待をしましょう

寝屋川市 籠島 恵子  
クロスワード・パズルの中におく本音

高知県 桑名 孝雄  
阿吶の呼吸むかしは合つていたらしい

羽曳野市 吉村久仁雄  
見渡せば丸い地球に角ばかり

兵庫県 中上千代子  
お変わりもなくと褒めてもらつた歳

弘前市 櫻庭 順風  
合格で都会が近くなりました

弘前市 岡本 花匠  
寺町を抜けて気安い縄のれん

高槻市 富田 美義  
スママセン受付嬢もロボットで

岸和田市 土橋 房枝  
落ちつかぬ気持ちで座る善意席

枚方市 海老池 洋  
逆回りしたい日もある古時計

米子市 小塩智加恵  
ストレスを溜め置くかめがまだ買えぬ

鳥取県 石谷美恵子  
切れ味の良過ぎる友が恐くなる

豊中市 水野 黒兎  
私鉄とは匂いがちがうーR

三田市 堀 正和  
七輪の上の鯛のもだえよう

鳥取市 武田 帆雀  
鯖の首パッサリと切る妻は武士

大阪市 津守 柳伸  
ふくらんだ蓄へ猫のスケジュール

倉吉市 米田 幸子  
ゆうゆうのその日暮しも乙なもの

鳥取市 田村 邦昭  
木枯らしが去つていつものいい夫婦

大阪市 井丸 昌紀  
発泡酒君も随分薄情だ

大阪市 三浦千津子  
これからの肴に新春の酒を酌む

東京都 岸野あやめ  
同じ絵に二度とは会えぬ万華鏡

羽曳野市 徳山みつこ  
北風は生者にきついいお葬式

倉敷市 撰 喜子  
初日の出毎日見てるはずなのに

岡山県 山本 玉恵  
くぐり抜けた茨の中の愛の唄

奈良県 渡辺 富子  
源流を辿れば母の鈴が鳴る

大洲市 花岡 順子  
独楽回る他人の顔をして回る

鳥取市 夏目 一粋  
山眠る僕も女房も息ひそめ

宇部市 平田 実男  
王よりも飛車をかばつた負け戦

# 誹風柳多留二四篇研究 76

やはり辛子。  
清 矢張り、初鯉の辛子が利いたのでしょう。  
江戸時代、鯉は辛子味噌を付けて食べた。こ  
れも江戸の食文化の一つ。  
佐藤 同。

小栗清吾・山田昭夫  
伊吹和男・大野秀二  
橋本秀信・粕谷長生

清 博美・佐藤 要人

605 大きなどら八春の笠秋の下駄 芹又

小栗 宗春と綱宗の句。

尾張徳川宗春は、本體甲の笠を被って三浦屋の春日野の許へ通い、仙台伊達綱宗は伽羅の下駄を履いて三浦屋の高尾の許へ通ったとされる。

主題句は、この二人が大きなドラを打ったというだけの事だが、「春」＝春日野「秋」＝高尾、「笠」＝宗春「下駄」＝綱宗、と対照的な語句を配置した作句がミソ。

春ハ笠秋ハ下駄にてきつい事 天七1015  
高尾ははかせかすがのかぶらせる

橋本 贊。また、仙台の宮城野は、秋の萩の歌枕として有名。  
清・佐藤 贊。

606 しもばかて下る三日のかみがより

馬古

603 百両で綿に包んだいもが来る 如雀

小栗 いもは痘瘡。あばた。綿は綿帽子で嫁入りの意。

川柳で百両といえは持參金。ひどいあばた故に百両の持參金付きで嫁に来る、ということを一ひねりして表現した。「芋」のような低価値の物を、見栄えよく大事に綿に包んだ、という意にも通わせるか。

百両ハなく成り顔ハのこつてる 一三12  
式百両か芋を買て一生くひ 傍四38

橋本 贊。婚礼のとき、綿帽子をかぶつて顔が見えないようにして奥入れする様を詠み込んでいる。

山田 橋本兄補説贊。礎後半不用。  
清・佐藤 贊。

604 なんだをぬぐいよくきいたく 榎水

小栗 辛子の句と思う。辛子酢あるいは辛子味噌などで、辛子がよく利いて涙が出てくる。それを拭いながら「よく利いたよく利いた」と誉めている光景。「涙をぬぐい」という言の方は、浄瑠璃などの愁嘆場にありそつな気がするがわからず。

からし酢と辞世涙をふいて誉 一〇六16  
泣て誉るハ義太夫と辛子味噌 六九1

橋本 贊。「なんだ」というような漢語読みは「太平記」などの軍記物に出そうな言葉、いわゆる講釈師の口調か。

山田 この辛子は辛子味噌で、初鯉の句ではないか。初鯉にありつけ感激の涙。  
伊吹 贊。初鯉の句であっても、効いたのは

小栗 上掛は、能楽で観世・宝生・三流を呼ぶ称。金春・金剛・喜多三流を下掛と呼ぶの対。  
(二江)

正月三日夜、江戸城内で行われた御謡初の句。当夜、列席の諸侯より観世太夫へ肩衣を賜るのが恒例とされたので、三日の上掛が上演される夜には、肩衣が無くて「下ばかり」の服装で、江戸城から下がるというのである。因みに、「東都歳事記」「正月三日」の項に次の通り記述がある。

今夜御謡初敷斗目長袴にて酉の刻出仕、御謡代御大名衆より御島臺献上あり。大手御門、櫻田御門に於て御簾あり。諸御大名登城四座の猿樂大廣間の御板縁に並居て、老松・東北・高砂三番をうたふ。此夜諸侯より観世太夫へ肩衣を下賜ること恒例なりとぞ。  
三日の夜上みア説して下も斗り 七三  
地謡がすめハ諸侯も下ばかり 一六五  
清・佐藤 賛。

607 銭はうへのかね持ハ芝にあり 丸水  
小栗 寛水寺と増上寺の句。銭は寛水通宝で上野所在の寛水寺のこと。銭に対して金持ち(鐘持ち)は、増上寺の大梵鐘で芝所在。

山といへバ上野寺といへバ芝 一一五  
てうちんあさ草つりかねハ芝なり 一六

天五高<sup>2</sup>

山田 賛。銭と金との縁語仕立。

伊吹 賛。縁語仕立賛。芭蕉の「花の雲鐘は上野か浅草か」が裏にあるとは考えられませんが。

清 賛。多少芭蕉が匂うが、そこまで考えずともよからん。

佐藤 賛。

608 勘助を女にしたを暮によび 未学

小栗 暮の嫁の句。

勘助は、武田信玄の軍師であった山本勘助。「躬姫小で跋、それは面黒く片目」(辞彙)であったといわれる。

句意は、暮れの払いに窮して、持参金目当てに勘助を女にしたような醜婦を娶ったということ。

内證か武田勘助の娘をとり 一四二  
持参金も巻つ無いと目くらなり 安四宮<sup>3</sup>

清 醜婦の見立てに使われたのでは、勘助氏も気の毒というほかはない。

佐藤 賛。

609 はらい扇子箱見たをしはじめ也 丸水

小栗 扇子箱は扇箱、扇を入れるに用いる細長い箱。桐、また杉で製したもので、江戸時代には、これを足付の台に載せて正月その他の祝儀に贈答したのである。就中、正月には年玉にこの箱を多く受けて積む事が一つの見得であった。(辞彙) 見倒しは品物を適正価格よりも安く見積もって買う。二そく三文に買う。屑屋・古着屋・古道具屋などの常習。(二江)

正月の年玉として受け取った扇箱は、玄関に井桁に積んで置いた後、行人(払い扇箱買い)に売る。「わすれのこり」に

二日にもなれば、払ひ扇箱買多く来りしとあるように、払い扇箱買いは正月早々やって来て扇箱を買ひとり、これから年始に出かける人に売ったり、来年用に買い溜めておいたものらしい。いずれにしても価値のあるものではないから安く買いたたいたようので、それを今年の見倒し初めだといっているのである。

大へひに売ハ女関の扇子箱 二六  
扇箱はつかしくない払ひ物 二八

清 賛。極小ではあるが、これも江戸時代のリサイクル活動である。

佐藤 賛。

# 尚香のむ

政岡日枝子選

溝ひとつ容易く跳んだのはむかし  
も一人のわたしは逃亡癖を持つ  
芽吹く時天に向かつてみな動く  
身の周り綺麗に年はゆるゆると  
煮こごりが亡母を呼んでる雪もよい  
雪月花そのたびわたくしも変わる  
音たてぬ下駄の心がわからない  
ポストへのきよりはわたしの助走みち  
マンネリの私に欲しい塩胡椒  
大ジヨッキあけて仲間にももらう  
不思議な種が播いてある水面下  
老木が大きく揺れて起こす風  
神様はあなたばかりを泣かせない  
ヒト族の進化みるよな子の育ち  
長男が時々杭を打ちに来る  
ワンチャンス逃した日から外野席  
もう背のび止しなと小さい影法師  
雑学が気どらず放つ燻し銀  
信じよう美人予報士言ったこと

和歌山市 古久保和子  
藤井寺市 太田扶美代  
米子市 林 瑞枝  
藤井寺市 鴨谷瑠美子  
西宮市 門谷たず子  
藤井寺市 高田美代子  
松江市 川本 畔  
西宮市 牧瀬富喜子  
尼崎市 長浜 美籠  
西宮市 西口いわゑ  
鳥取市 徳田ひろこ  
和歌山市 榎原 公子  
八王子市 播本 充子  
海南市 堂上 泰女  
羽曳野市 吉川 寿美  
富田林市 片岡智恵子  
大阪府 米澤 俣子  
鳥取県 佐伯 やえ  
堺市 志田 千代

水いっぱい飲んで涙を溜めておく  
一枚を考えさせるのし袋  
明日はあす今日にすっかり鈴つける  
愛されて指の先まで透き通る  
奔放な私に皿が小さすぎ  
追うものがあるって歳を忘れそう  
ありきたりの気遣いになり封を閉じ  
一年中パーゲン欲しいものがない  
シナリオは独演劇という卒寿  
八十歳何かと言えばふて寝する  
おだやかな余生でいたい花時計  
梅さくら会いたい人がたんとあり  
山茶花のもろいくずれも女なり  
深追いをしてはいけないバラの花  
花言葉花は納得しましたか  
不揃いな縫目で届くちゃんちゃんこ  
蛇口からぼつりぼつりと独り言  
すんなりと話せぬ訳を見逃そう  
夫婦歴今穏やかな無関心  
愛無限 春には春のお物業  
我が儘をきいてる脈があるらしい  
どう死ぬかどう生きるかにかかつてる  
晴れてよし雨でも嬉し花の四季  
西年はプラス思考の道えらぶ  
味のある人で無駄口たたかない

大阪府 川久保睦子  
大阪府 古今堂薫子  
米子市 白根 ふみ  
富田林市 中井 アキ  
倉吉市 野口 節子  
寝屋川市 籠島 恵子  
寝屋川市 森 茜  
八尾市 高杉 千歩  
出雲市 園山多賀子  
豊中市 安藤寿美子  
米子市 青戸 田鶴  
堺市 西村りつえ  
大和高田市 鍛原 千里  
八尾市 村上ミツ子  
橿原市 安土 理恵  
和歌山市 福本 英子  
大洲市 花岡 順子  
熊本市 岩切 康子  
橿原市 居谷真理子  
大阪市 津守 柳伸  
和歌山市 楠見 章子  
神戸市 田中 章子  
和歌山市 武本 碧  
大阪市 星野さらり  
八尾市 生嶋ますみ

千の夢乗せて新年走り出す

これだけの絵馬に神様迷うかな

絶え間ない災害地球壊されちゃう

ときめいた昔の道は風ばかり

ひい孫はももちゃんもものほほを持つ

たつぷりの愛で育った子の笑顔

味方だと思っていてしまうことにする

兄弟みな母の味覚の中にいる

節料理 孫に敬遠されている

年越して静まりかえる冷蔵庫

嫁たちの愚痴をポロポロ小正月

妻の愚痴くんもり盛った白い皿

青空へ今日の命をありがとう

マイペース夢の続きを追っている

何事があっても意地は曲げられぬ

煩惱のすこしみだらを生きている

ほほ笑みのうちには痛み溜めている

偽りの心チクタク痛みだす

言い勝ったしこり笑顔にふれて解き

亡父の尺<sup>さし</sup>亡母の鉄は未だ元氣

赤ペンではじき出されるのが怖い

病床で母の訃報を聞く哀れ

冗談に流して区切りつけておく

さぐり合う心を抱いて離れ住む

童唄いつか幼き日に還る

三田市 久保田千代

兵庫県 黒崎美紗子

尼崎市 春城 年代

米子市 澤田 千春

米子市 中井 ゆき

境港市 遠藤那珂子

東大阪市 中岡 妙

八尾市 井尻 民

大阪市 板東 倫子

寝屋川市 太田とし子

横浜市 長島亜希子

奈良県 渡辺 富子

東大阪市 北村 賢子

兵庫県 中上千代子

藤井寺市 若松 雅枝

香芝市 大内 朝子

鳥取県 石谷美恵子

岸和田市 雪本 珠子

鳥取市 奥谷 彩子

交野市 山川日出子

堺市 桜沢 千世

鳥取市 福西 茶子

弘前市 宮崎ヒサ子

倉敷市 小野 克枝

米子市 門脇 晶子

心無になるから好きな超多忙

陽は昇る水平線にある希望

亡母の味もうちよいなのになにまだずれる

夢ひとつかなえてはまた次の夢

他人井そんな顔する反抗期

揺れ動くばかりで本音掴まらぬ

ジャカラランダに染まり故郷遠くなる

逆縁に物事も手につかず

この世から恩ある人は去って逝く

真心の重さで命支えられ(心臓手術後八年)

惚けぬように心に夢を咲かせよう

枯らさぬように老いも上手に使われる

この部屋へ何の用事で来たのやら

迂闊にも察の車を追い抜いた

縁側消え日向ぼこする母も消ゆ

雰囲気美人という褒め方もあるのです

箕面市 出口セツ子

今治市 塩路よしみ

松江市 安食 友子

芦屋市 黒田 能子

倉敷市 撰 喜子

岡山県 山本 玉恵

シドニー 坂上のり子

和歌山市 玉置 当代

和歌山市 山口三千子

大阪市 三浦千津子

東大阪市 笠井 欣子

鳥取市 福田 登美

三田市 石原 歳子

倉吉市 米田 幸子

八尾市 中島 春江

西子市 黒田 茂代

和子さんの句―何をすることも不可能という事は無かったむかしが、自分の中から消えていかない作者の目を感じるが、追憶はあくまでも追憶、今日なしうることに全力を注ぐエネルギーをも感じられる句である。扶美代さんの句―心の声に従って、ひと休みすれば、何か見えてくるものがある。気づいた時が実行の時、逃亡先は問わないが、きつと何かを掴んで帰れることでしょうか。瑞枝さんの句―特に寒かった被災地の冬、不況の冬、これらを跳ね返してくれるような、おおらかさ、温かさに惹かれる躍動の句である。瑠美子さんの句―自分で人生を仕上げ、自分で幕を降ろす。焦点を絞れば、旅人の背中が詠んであるのに、柔らかな句いの残る、ゆるゆるとくる句調が面白く、物悲しいものがある。

準備

藤井 正雄選



新札を孫の数だけ準備する  
明日逢つて話す言葉秘めている  
母さんはいつも間際に準備する  
いつ来るか知れぬ津波へ浮き袋  
晩年の地図をリュックに詰めている  
遠くから老人ホーム下見する  
一日をあなたに使う汗でした  
空揚げの肉は半日ほど寝かせ  
客の目になって立つたり座ったり  
手抜きした料理を自慢する女  
母になる娘へ妻が忙しい  
子育てに今問われてるしつけ糸  
あいつはこれぞこれやとオールドバー  
春を待つ種に微かな息遣い  
人家から拝借熊の冬支度  
念入りに仕掛けた罫に芸がある  
やがて散るその日の準備華の服  
香爽いて待つ人が居るにじり口  
手占摺った準備完了喫う煙草  
正月準備母の振り子は止まらない  
鬼こっこ準備不足で遊べたね  
延命は嫌と主治医に告げておく

美 明 三 德 三 千 枝 子 沁 丘 次 根 波 根 波 権 悟 松 煙 哲 男 美 津 子 一 知 茶 子 伊 津 志 弥 生 柳 弘 武 史 四 郎 度 四 郎 あやめ

エビローグはちぼち準備しなければ  
準備には何より先に金が必要  
わたしらしく終るシナリオ準備中  
準備まだ整わぬ間に子が育つ  
名コック下ごしらえに隙がない  
とりあえず山かけておく一夜漬け  
いずこから手をつけようか義母が責  
百歳を生きたる準備のキーボード  
増税へ海外移住する用意  
心の準備できないままに罪と罰  
準備した原稿しやべらしてくれぬ  
時間割合わせて眠るランドセル  
口裏を合わせ招かぬ客を待つ  
愛の巢へ準備いそいそピンク色  
用意ダウンうまいかないタイミン  
佳

恭 昌 典 子 理 恵 重 人 尚 士 雄 洋 七 子 美 代 子 一 風 照 子 志 華 子 ミ ツ 子 章 子 彩 子 隆 盛 た も つ 扶 美 代 朝 子 霜 石 三 宅 保 州

叶わぬと知りつつ渡すラブレター  
ライバルに叶わぬものがひとつある  
願ひ叶いあたり一面春になる  
親の目に叶う彼女でよしとする  
人生の序曲が叶う呱呱の声  
晩年に見る平凡な夢叶う  
夢叶う神の選んでくれた絵馬  
叶わない恋と知りつつ春を待ち  
叶う夢捨て戦場に行った人  
叶ったら次の願ひが押し寄せる  
条件を下げればきつと叶います  
正夢になって恋しい女がくる  
叶うなら翼が欲しい青い空  
玄宗も叶わなかった不老不死  
叶うまでお百度石は磨かれない  
一ランク下げると希望叶いそう  
茶碗酒叶わぬ本音眠らせる  
気楽さが叶い淋しさ倍になる  
ヨソ様と握手した手が火照つてる  
叶わない夢を飛翔のバネにする  
叶え給え絵馬を一番上に掛け  
叶うまい吊した絵馬に誤字二つ

永田 俊子選



一 花 庸 佑 富 子 正 劍 隆 盛 美 明 房 枝 晴 翠 康 子 登 春 雄 藤 朗 次 根 伊 津 志 花 匠 德 三 千 莞 子 勝 巳 勝 視

勉強はしてきた給馬もあげてきた  
年輪刻む祖父の知恵には叶わない  
叶わない夢に青春してる古希  
夢を追う努力神の目に止まり  
亡父の年越えても父に叶わない  
叶うまでた力いっばい走ります  
叶うまでただひと筋に遍路道  
つぶやいた事を叶えてくれた子等  
夢一つ叶えてほしい流れ星  
十字路で夢叶う道間違えた  
燃え尽きた形で拍手浴びている  
四分六で母さん似ですよかつたね  
ショーウィンドー中に叶わぬ夢がある  
なん度でも整形します叶うまで  
終章へわたしに叶う色探す

母と妻組んだらとても叶わない  
大願成就サクラの花がバツと咲く  
叱る日の母の涙にかなわない  
叶うならやり直したい過去がある  
心願がみんな叶うてはげがきた  
叶うまで母は無償の鈴を振る

あれほどに望んだ椅子の固いこと  
キリストもアラアも叶うまで戦  
白鳥になる夢叶ったトウシューズ

軸 天 小西雄々

四郎 愁女 久仁雄 敏子

あずま 重人 浜丘 柳杏

妙 柳弘 充子 霜石

奥五月 輝夫 保州 慕情

あずき 茂代 セツ子 あやめ

碧 人 地 天 和

正和 小西雄々

正和 小西雄々

ポイント

西原 艶子選



野の花へポイント置いた万歩計  
ポイントを押むと風もなびくもの  
一票差これから彼はただの人  
目標のポイント上げて自己研磨  
ポイント替えて欠陥カバーする  
ポイントの切替えできず喪が明ける  
ポイントをつなぎ合わすと読めてきた  
点滴のポイントこなすいのちの灯  
常識を集めポイント切り換える  
弱点は残らず見せて生き上手  
ポイントを突くと会議は踊らない  
嫁ぐ娘へ和のポイントを掌に持たす  
母の愛しつけポイント返し針  
ポイントはずしやんわり子を叱る  
ポイントのないおしやべりは女の輪  
ポイントに愛情込めた隠し味  
ポイントは笑顔で生きたマイウエイ  
ポイントを稼ぎたいので辞書を繰る  
ほへえみをわたしのチャームポイントに  
ポイントが多くて神も困り果て  
ポイントを結ぶと謎が解けてくる  
定年後妻がポイント押えてる

（渡）富子 ヒデオ 鐘造 輝夫 康子 花匠 四郎 章子 久仁雄 和枝 勝視 千里 智加恵 重人 朝子 美代子 扶美代 次男 正剣 奥五月

（若）康子 たく子 修 花匠 四郎 章子 久仁雄 和枝 勝視 千里 智加恵 重人 朝子 美代子 扶美代 次男 正剣 奥五月

（若）康子 たく子 修 花匠 四郎 章子 久仁雄 和枝 勝視 千里 智加恵 重人 朝子 美代子 扶美代 次男 正剣 奥五月

（若）康子 たく子 修 花匠 四郎 章子 久仁雄 和枝 勝視 千里 智加恵 重人 朝子 美代子 扶美代 次男 正剣 奥五月

（若）康子 たく子 修 花匠 四郎 章子 久仁雄 和枝 勝視 千里 智加恵 重人 朝子 美代子 扶美代 次男 正剣 奥五月

（若）康子 たく子 修 花匠 四郎 章子 久仁雄 和枝 勝視 千里 智加恵 重人 朝子 美代子 扶美代 次男 正剣 奥五月

（若）康子 たく子 修 花匠 四郎 章子 久仁雄 和枝 勝視 千里 智加恵 重人 朝子 美代子 扶美代 次男 正剣 奥五月

句読点打って明日の靴を履く  
ポイントで人間評価のふりますか  
ポイントを稼ぐ淑女のきりかえり  
ポイントがずれる受話器を持ちかえる  
ポイントがはやけて前へ進めない  
ポイントへはつはつ登るいばら道  
五十から先は忘れの誕生日  
ポイントを切り替えてみる四面楚歌  
ポイントを挿んでからは上り坂  
ポイントで小さな夢が叶えられ  
ポイントをひとつ挿んだまわり道  
飛び切りの笑顔ポイント上げて  
手編みセーターポイントを付ける愛  
ポイントを切り替え明日へ出直そう  
ポイントを集めて春の風を呼ぶ

典子 霜石 碧 敏子 徑子 保州 雅枝 茂代 庸佑 みつこ 強一 可住 雄々 弥生

典子 霜石 碧 敏子 徑子 保州 雅枝 茂代 庸佑 みつこ 強一 可住 雄々 弥生

典子 霜石 碧 敏子 徑子 保州 雅枝 茂代 庸佑 みつこ 強一 可住 雄々 弥生

典子 霜石 碧 敏子 徑子 保州 雅枝 茂代 庸佑 みつこ 強一 可住 雄々 弥生

典子 霜石 碧 敏子 徑子 保州 雅枝 茂代 庸佑 みつこ 強一 可住 雄々 弥生

典子 霜石 碧 敏子 徑子 保州 雅枝 茂代 庸佑 みつこ 強一 可住 雄々 弥生

典子 霜石 碧 敏子 徑子 保州 雅枝 茂代 庸佑 みつこ 強一 可住 雄々 弥生

典子 霜石 碧 敏子 徑子 保州 雅枝 茂代 庸佑 みつこ 強一 可住 雄々 弥生

典子 霜石 碧 敏子 徑子 保州 雅枝 茂代 庸佑 みつこ 強一 可住 雄々 弥生

# 初歩ノ教室

題一 合併

三宅 保州

佳句を書く!

当社の「本社新年句会」において、河内天笑主幹は「佳句をノート等に書き留めよう。鑑賞力や作句力が向上するのみでなく、その句を通じて作者との交流のきっかけにもなる」という趣旨のお話をされました。

麻生路郎祖師もその名著「川柳とは何か」で「柳書、柳誌、句集の中から名吟だと思ふものや、先輩から名吟だと教えられたものを常に抜き書きして、一冊の句帳を作り、それ等の句を繰り返し精読味読するのである。句が巧く作れるようになるのは、この方法より外にはないのである」と喝破されています。また、この方法を行っていない方は、早速ノートや手帳に「佳句を書く!」をモットーに書きをして、何回も声に出して読み返す習慣を身につけてみませんか。作句力等が向上し、柳友が増えることも請け合いです。

(今月は添削をした句を多くしましたので、批評のスペースが殆ど無くなりました)

【同想句】

「合併で名が消えることを詠んだ句」

原 合併で古き良き名がおしまれる 順子

添 合併も古き良き名が残るなら

原 合併で消えた由緒ある社名 時雄

添 合併で消えた由緒のある社名

原 合併で消えた元名がなつかしい 稔

添 合併で消えた名前を懐かしむ

原 由緒ある地名一括して消去 淳司

添 削除キー押された由緒ある地名

原 新市名よそに住んでる気にもなる 亜希子

添 新市名都会に住んでいる気分

原 今年限り旧町で書く年賀状 満子

添 旧町で今年限りの賀状出す

原 合併に飲まれて里の名も消える 清

添 合併に吞まれて里の名も消える

原 合併を重ね元の名何だっけ 孔一

添 合併を重ねて元の名を忘れ

原 横文字で二つ三つの社を束ね 勝久

「銀行の合併を詠んだ句」

原 銀行すぐ債務増えた合併する 綾乃

添 合併を重ね銀行生き残る

原 合併で街の支店が廃屋に 萌

添 合併で駅前支店まで消える

原 合併したマトはどこへ言ったやら 忠子

添 合併後トマトも店も消えました

原 銀行が遠くに行った田舎道 かずみ

原 合併で銀行名が変わりすぎ きぬ子

原 すぐに名が出ない合併後のバンク 好

「学校の統合を詠んだ句」

原 小規模校合併されて跡地のみ れんげ

添 小規模校統合されたドーナツ化

原 合併や子居ぬ校舎の金次郎 (蘭)洋子

添 統合をして残された金次郎

原 学校の合併母校二つ持つ 喜子

添 学校統合母校が二つできました

「合併症を詠んだ句」

原 老いる身が合併症で賑やかいかい 映子

添 老いの身に合併症の賑やかさ

原 遺伝子を継いだ因果か合併症 道子

添 遺伝子も合併症に加担され

原 合併症怖れ目がない甘い菓子 徑子

添 合併症怖れて菓手に手が出せぬ

原 合併症低カロリーを我慢する こずえ

添 合併症低カロリーを我慢する

原 合併症なりたくなくてダイエット 水昇

添 合併症ならなくてダイエット

原 こまごまと合併したらどうなるの 美紗子

添 合併したら気になることばかり

原 合併化してもサービス変らない (河)洋子

添合併にしてもサービスマネージメントで  
 原村合併の理由は税上がる  
 添合併をしても税金上げないで  
 原合併劇場の裏がさわがしい  
 添騒がしい合併劇場の舞台裏  
 原合併も過疎は過疎なりふえませず  
 添合併をしても過疎には変わりなし  
 原ああ平和町村合併如何が名か  
 添ああ平和合併劇で採めている  
 原市町村合併までの自我と非我  
 添合併へせめぎ合っている町同士  
 原合併も名前でもめて延期する  
 添合併の名前いちばん採めている  
 原無駄はびく合併急ぐ議員さん  
 添無駄省く合併ならば急ぎたい  
 原合併をいやがる人と賛成は  
 添合併の話は町を二分する  
 原DNA合わせ持つ子が前に居る  
 添DNA合わせ鏡のような子  
 原合併をするのは進歩か後退か  
 添合併は進歩ばかりと言えますか  
 原合併のシワ寄せ私リストラに  
 添合併の結果リストラされました  
 原村が町農機野良着も派手になり  
 添合併をしたら野良着も派手になり  
 原合併のひずみでコップ中がゆれ

信子  
 はじむ  
 利子  
 ミヨノ  
 賢治  
 智加恵  
 タカ子  
 みね代  
 益子  
 のり子  
 典子  
 節子  
 俊子

添合併のひずみで揺れているコップ  
 原合併があらゆる部所ではやり出し  
 添合併の風が列島吹き抜ける  
 原合併も身売りも新規参入も  
 対象を省略しすぎませんか。例えば  
 添合併も身売りもできぬ小商い  
 原合併で市長の職を棒に振り  
 市民の立場から詠みませんか。  
 添合併は市長替わっただけのこと  
 原合併で町長いやに張り切って  
 「合併」の題の許容範囲の添削で。  
 添町長が狙っているのは市長の座  
 【少し工夫すれば佳くなる句】  
 原合併に一役買った縁結び  
 添合併にひと役買った山と川  
 原合併の裏ではじいている打算  
 添合併の裏でそろばん弾いている  
 原合併に草の根までも踏まれてる  
 添合併後も聞くべし草の根の意見  
 原合併後山坂越えて共白髪  
 添合併後山坂越えて行く役所  
 原合併をしても猪出る街に  
 添猪も出るが新市になりました  
 原市になった村の景色は替らない  
 添市になっても里の景色は替わない  
 原破産する早く合併しなければ

光枝  
 いさお  
 藤朗  
 信雄  
 像山  
 政子  
 起世子  
 孝明  
 イセ  
 章司  
 那珂子

添合併を急がなければ破産する  
 原合併は美酒に酔って苦い水  
 添合併の美酒に酔うて苦い水  
 原おらが里やがて市になる出世村  
 添おつたまげた市になるらしいおらが村  
 原付き合おう合併症と仲良くね  
 原合併の陰でリストラ見え隠れ  
 原合併をされると僕の椅子がない

【佳句】  
 合併で絞り出せるか水膨れ  
 合併で不協和音が混じる杜歌  
 アメリカと合併したい永田町  
 合併へ犬は尻尾を振り続け  
 村挙げて合併しない心意気  
 合併で図体ばかりでかくなり

【今月の推せん句】  
 合併も吸収もない小商い  
 合併の話も来ない離れ島  
 合併の出来る市町村や大手企業はよいけれど、小商いや離れ島など弱いものは合併すら出来ないという穿ちの効いた二句です。  
 合併はしても変わらぬ国訛り  
 「国訛り」にすべてが凝縮されています。

【私の句】  
 合併へ鞭を振り振りチイパツパ

千華  
 昇  
 きぬ子  
 弘子  
 准一  
 つよし  
 英旺  
 美義  
 夕胡  
 武  
 雅明  
 樹本 宏子  
 堀 正和  
 吉村 幸

# 秀句鑑賞

同人吟 田中正坊

—2月号から

藍愛に沸いたゴルフと卓球と

杉澤 汀

「秀句鑑賞」と簡単に言うが、厳密な意味

での秀句は、そうザラにあるものではない。作品が発表されて何年、いや何十年経つてからも、多くの人によって高く評価される作品こそ、秀句の名に値する。

これとは反対に、悪い句はすぐに見分けがつく。平然と誤字や誤用をしている作品、盗作まがいの類想句、何が言いたいのか、さっぱり句意が分からないような作品は、駄句・愚作と言つてもいいと思う。

問題はそれ以外の多くの句について、どのようにして優劣を決めるかということだ。複数の選者で共選した場合、一致する入選句は約三割と言われ、一人が上位に抜いた句を別の人が無視するケースもある。

人の顔が違つように個性も異なり、感性もさまざま、したがつて選句は、それぞれの感性にもとづくメジャーによらねばならない。今回、鑑賞の対象となる秀句は、私の感性のアンテナにかかったものに過ぎないことを、前もつておことわりしておきたい。

丸い物を見ると蹴りたくなつてくる

谷口 義

当たり前の気持を当たり前に詠んだ作品。ポールや空き缶が転がってくると、足が勝手に動いてポンと蹴りたくなる心理をサラリと言つてのけた軽みが何とも言えない。

自分史の空白戦時下の日々よ

片岡 智恵子

戦時下の何年間かは、その人にとってきつと空白の時間だろう。智恵子さんは何をしておられたか知らないが、軍隊生活を過ごした私にとつては、およそ思い出したくないことばかりで、もし自分史を書くことになれば、プランクにするか、一行ですませるだろう。

物故者が増えて消えそなクラス会

瀧 本 きよし

私が幹事をしているクラス会も、ここ二年間に三人も物故し、遂に卒業時の三分の一を割つた。今年は何とかして会を開くつもりだが、果たしていつまで続けられるやら。やむを得ぬことながら、寂しいの一語に尽きる。

これは明るい話題。スポーツ番組はあまり見ぬ私もアテネ以来、孫のような愛ちゃんにはまつている。表情がいいし、試合前後のちよつとした仕種も可愛い。そして、宮里藍さんの颯爽とした打球ぶりもお見事。日本スポーツ界の未来に希望が持てる。

癌という字体何ともおぞましい

村上 玄也

この恐ろしい病気が多数の人命を奪つており、私の近親・知友の何人かも、これに取りつかれた。早期発見すれば助かる人も多く、やみくもに恐れる必要はない訳だが、やはり「癌」という字を見ただけで怖気づいてしまふ。女也さんの一日も早い快復を祈りたい。

普通の子普通の人が罪犯す

林 昭三

性善説二ユースを聞いて死語とする

市丸 晴翠

悪人が悪事を働くのも困るが、隣近所にも居る普通の人間が、目をおおいたくなるような残酷な行為を犯すのだからやりきれない。人の善意を信ずる心を失いたくないが、連日にわたつてこのような二ユースが続くと、ふと性善説を疑いたい気にもなる。

### いつからを余生と区切る豆の数

田中 千莞子

おそらく千莞子さんは、節分の豆を数えながら余生を考えておられるのだろうか、この問いに答えるのは難しい。「余命」なら統計的に数値を出せるが、「余生」は多分に主観的なもので、生涯現役の人には余生はない。やはり自分できちんと区切りをつけ、生活のスタイルを考えるのがいいだろう。

### 灰汁がぬけきってつまらぬ人となる

夏目 一粹

個性が強くて時には毒舌も吐き、ブンブン臭った人も、年とつてすっかり角が取れてしまふのは、どんなものだろうか。人間には多少は灰汁（あく）が必要で、それがなければ存在感がなくなってしまう。そういう人には、おそらく誰も寄りつかないだろう。

### 法相が言葉知らぬ国に住み

三好 専平

法務大臣と言え、法をつかさどる重要なポスト、昔は長老級の政治家がその任にあたった。看護師出身で法律を知らぬとは言え、ここに再録をはばかるような差別的言辭を吐き、そのまま居座るとはもつての外と言ふべきだろう。そして任命権者である小泉首相も、その責任をまぬがれることができない。

### ホップステップこの辺までにしておこう

黒田 能子

次は当然、ジャンプと来るはずだが、その一歩手前でこれくらいにしておこうと思えば人は踏みとどまる。もとより跳ぼうと思えば跳べないことはない訳だが、あえて跳ばないのは、それなりの考えがある訳で、これを消極的な生き方と言つてはならない。

### 約束もストレスとなる老年期

瀬戸 まさよ

何か約束すると、まずきつちりと手帳に書きとめるが、それを果たすまでは気になって夢にまでみることがある。ストレスが少ないと言われる老人だから、そのようなことまでストレスの種となるのだろう。しかし、少しはストレスがあることも必要で、全くなければ惚けやすいとも言われている。

### 傘寿まだ夢の欠片を抱いている

野口 節子

節子さんと同じく傘寿を越えた私も、そう大きな夢を描くことはできない。しかし終生、夢だけは失いたくはない。人さまから見れば欠片同様の夢でも、しっかりと抱いてあたためたいと思う。さて、どのような夢かと問われれば困るが、これまでにやり残したことや、孫の未来についても夢を持ちたい。

### 電飾の街にあふれているニート

生嶋 ますみ

近頃の街は、建物から樹木に至るまでイルミネーション満開。それはどうでもいいが、問題はその街に群れているニートたちだ。学ぶ意欲も働く気力もないわかものをニートと呼ぶが、何が彼らをそうさせたか、これをどうすればいいのかが問われている。

### 神様が逃げないように縄を張る

伊藤 寿美

へえ、そうなのか。これは世紀の大発見だ。今年も初詣でに出掛けたが、お社の周りには縄が張りめぐらされていた。私はメ縄というものは、汚れ多き俗人どもが神聖な領域に立ち入らないように張つてあるとばかり思っていたが、実はありがたい神様が逃げ出さないようにしてあるらしい。意表をつく奇抜なユーモア句。

### 鬼の首取る気で探す誤字脱字

樋口 輝夫

この句には苦笑してしまった。目についた句をチェックしながら、ふと見付けた誤字に赤鉛筆を走らせている私。それで鬼の首を取つた気になる訳ではないが、「生涯一編集者」の習性は、恐ろしく、悲しくもある。独断と偏見の秀句鑑賞で失礼した。



## 西村早苗氏のご逝去を悼む

恒松 町 紅

西村早苗氏の訃報を聞いたのはその翌日、一月四日の事だった。そして五日付新聞のお悔やみ欄に名前が載っていたので氏のご逝去がよく判ったが、最近は一無沙汰していたので、ご病氣のことなども知らなかった。そう

言えば、本誌「自選集」には十月号までお名前が載っていて十一月号からパツタリと消えている。だから九月頃あたりから作句意欲を失うほどに、病んでおられたのではなかったであろうかと想像する。葬儀は五日に行なわれたようだが、なんせ松江からはマイカーならいいが、最近はずの便もなく、汽車は本線から支線に乗り換えて行く遠隔地で、また式場もわからず、高齢ゆえに失礼して弔電を打たせていただいた。

西村氏の本名は政則、雅号の早苗は女性らしくて、よく女の人だと勘違いされることもあった。どうして女の子のような「早苗」という雅号を付けられたのかは、永い間付き合

って来たが、一度も聞いてみたことはない。手許にある島根県川柳史を披いてみると、仁多川柳会について次のように記されている。

「仁多川柳会は昭和五〇年九月二〇日創立、会誌『仁多』は同年一〇月一日創刊。大正期『頼杖』で活躍した太田亀甲を会長に、そして昭和一〇年八月頃から松陽柳壇でデビューした。西村早苗が編集責任者として座り、川西幹伸がアシスタントで傍を固める清新な川柳団体である。(一部割愛) 同人の中には、すでに故人となった岡崎祥月、原独仙や、現存の長岡鉄花人、吉岡きみえ、竹内すみこ氏らの名もあった。

通巻三七号は三周年記念号として発行、表紙に創刊以来の『仁多』を写真で飾り、経て来た三年の道のりを回顧、尼緑之助、津川紫吻の行き届いた指導が光っている、という一文もあり、末尾に西村早苗の一句。

ふくらんだ胸へチラツと秋の陽が 早苗  
かつては仁多川柳会の編集責任者として関わり、太田亀甲氏亡きあと今日まで会長として地域川柳発展のため活躍、会誌『仁多』は表紙付きの冊子で、地方としては立派なものであった。編集もすべて一人でやっておられたようで、そのご苦労も並大抵ではなかったのではなからうか。惜しいかな後継者が育たなかった事もあって最近になって、いつしか隔月発行だったり、併合発行だったりでありに休刊になってしまった。

『川柳塔』誌九月、一〇月号の早苗氏の作品を見るとなんとなく頷けるものがある。

眼を閉じて帰らぬ日々をのむコヒー  
花ほめて友達ほめてワンカップ  
紙の蝶百羽折っても飛びたたぬ  
今更に遠い記憶を思っても

指十本指切りすればみな疼く

突然のやさしさに逢う日暮れどき

やわらかな果たし状がぐる花冷える

むらさきの雨に情けが燃えてくる

ここからは一人でお舞い蝶々さん

享年八十五歳、川柳歴七十年、永年の川柳発展への功績を讃え、謹んでご冥福をお祈りいたします。

合 掌

柳友の訃報哀れむ西の春

町 紅



社説書く人大臣になつて欲し（平成十年度川柳塔賞）

## 長谷川 淳さんを悼む

丹後屋 肇

淳さんの死は、私には痛切にこたえます。奥さんからの電話では、まさに眠るが如く逝きました。長い闘病の果てでしたから、これほど慰められたことはありません、ということでした。

淳さんと知り合ったのは二十数年ほど前で、車社会が円熟の中、私がふと思いついたハンドレテーブルがきっかけでした。知人から、それなら恰好の人がいると言われ、初めてお会いしました。私の提案したのは、折りたたみの収納し易く使い勝手も簡単という物でした。元々理工系の方なので私の意図するところを全面的に受け入れて、早速設計して下さいました。その上、発明協会にも出向いで、いろいろ問い合わせして頂き、また特許出願手続も丁寧に教えていただきました。これは結局先に発表者があって、既に申請されていて不許可の通知がきました。何度もお会いする中で、偶然万葉集や蕉門

十哲などの話が出て、「実はね私、いま朝日カルチャーで、薫風、つとむ先生について勉強しているですよ」と言つて、朝日なわ柳壇に入選した十数句のコピーを見せてもらいました。理工系の方が川柳とは少し意外でしたが、長谷川淳語録が次から次に飛び出しましたが、私はそれにつられて後を追いかけるような恰好になりました。今思い出せば、その語録が私と川柳を結びつけた太い絆になったと言えるでしょう。

「要はね、単なる説明句や抽象句では、人の共感に訴える力にはなりませんよ。具体的な現実を素材にして、平明な言葉で自分という人間そのものを、五七五で主張することですよ。同じ題でも、人それぞれに顔が違うように、全く相反する人生観が表現され、多様な人間模様が織り込まれて、こんな面白い文芸はありません。一面的なものの方でなく、多面的な人生の歩みを許容する包容力も身に

つき、人間としての幅も広がることでしよう。さらに川柳は新境地を拓く発明によく似ています。あなたの発案は失効したとはいえ、その創意工夫が新しい世界を開拓し、個性的な句を生むことに繋がるでしょう。思わず膝を打つて納得する句、自分に照らして笑いがこみ上げてくる句、世事世相の矛盾を抉って溜飲の下がる句、また自分の内面を時に荒く、時に穏やかに、海の変化のように捉える句などなど。作句が出来てから、ある距離を置いて推敲して句姿を整えることも忘れてならない作業ですよ。」長谷川淳語録はこのように私を圧倒しつづけました。

こうした時期を経て川柳塔への参加を促され、川柳塔まつりにも参加させていただきました。淳さんのお蔭で数多くの優秀な柳人諸賢との交流もとり持つて下さり、今日同人の一人として毎月出句させて頂き、楽しませてもらっています。

いわば大恩人の死は、私には大打撃ですが、その語録を基礎に精進することを肝に銘ずることが最大の供養ではないかと、ひそかに心に誓っている次第であります。

長谷川淳さんのご冥福をつつしんでお祈り申し上げます。長い間、ありがとうございます。

合掌

# 本社 二月句会

二月七日(月)午後一時  
たかつガーデン

立春は過ぎたものの冷たい風の中、アウイ  
ナ大阪は改装中のため、たかつガーデンで  
12名の参加者を得て定刻開催された。

はじめに一月に亡くなった西村早苗氏と、  
長谷川淳氏を偲び一分間の黙祷を捧げる。

お話は木本朱夏さん。吉川雉子郎つまり吉  
川英治の生い立ちから世に出るまでを川柳と  
の関わりも含めて語った。

彼は「桂庵に踏み倒さるる類の瘦け」で  
井上剣花坊に認められたことから生涯を恩人  
として敬まったという。

晩年にも喜んで色紙に書いた川柳を紹介。  
貧しさも余んで果ては笑いあい  
この先を考えている豆のつる

世の中におふくろほどなふしあわせ  
初出席に西脇市の七反田順子さん、平野区  
の吉内タカ子さんを迎える。(義記)

月間賞は安土理恵さん(檀原市)に輝く。  
(司会)朝子(記名)月子・恵子  
(受付)茜・五月(清記)恵子

## 席題「ロス」 太田 扶美代選

ロスタイムさあ起きようか寝てようか  
お迎えが来るまでしばしロスタイム  
ロスタイム時々小さな恋をする  
自分史に自己陶醉のロス一つ  
正念場逆転もあるロスタイム  
エステ通いの妻にロスだと言えませぬ(矢)五月  
あまりにも戦争のロス大きすぎ  
保険庁浪費のくせはなおらない  
家計簿のロスパチンコでカパーする  
銀行に愛想笑いもロスでした  
飲む金はみんなロスだと妻が言う  
何よりもロスだと思っ出たおなか  
ロス時間りこうに回すポランテア  
とんだロスそんな戦争まだつづけ  
窓際の椅子で社のロスよく見える  
七十路は充実めざすロスタイム  
ポーとする時間ロスではないように  
株のロス取り返さねば死ぬません  
春近しロスを承知なウインドー  
言葉の無駄でした何も聞いてない  
時のロスほど残念なものはない  
入院をロスタイムとは思わない  
ロスタイムだから誰にもせぬ遠慮  
膝小僧抱いて詩人のロスタイム  
ロスのようにどうも言われているらしい  
人生の仕上げに使えとロスタイム  
一日をロスにした夜の立ち眩み

淳司 尚士 アキ 柳弘 玄也 能子 桂作 希久子 義 章久 見清 タカ子 洋 鐘造 寿海 かりん かつみ 夕胡 深雪 正坊 セツ子 楓楽 ダン吉 昭三 美代子

働いているのが僕のロスタイム  
人生の逆転もあるロスタイム  
ロスタイムとは思わない迷い道  
ロスタイムひとりで騒いだだけのこと

佳  
よい勉強でしてとロスを口にせず  
ロスいくつ重ねて人のぬくい影  
ロスゼロがいつも良いとは限らない  
人生のロスを長寿でカパーする  
ゴミ箱に生活のロス顔を出す

人  
段取りが悪くて時間ばかり食い  
ロスタイムまだ挽回のチャンスあり

地 天  
風掴む女に少しロスがあり  
余命表多少のロスは含まれる

兼題「芽ばえ」 中井 アキ選  
雑草がリードしている春の庭  
二輪草チヨコレートから芽生えだす  
犠牲打に連帯感の輪が芽生え  
尊敬が恋の芽生えに変わる時  
江戸川柳政治ひはんの芽は生まれ  
すばらしい芽だ大空を向いている  
先生にチューしてもらいたい園児  
忘れてあげよ草木の芽吹く音がする  
ふと疑問芽生えたらしい妻の勘

保州 直樹 夕胡 千里 萬の たもつ 洋 いつぶみ れんげ 玄也 章子 倅子 充子 泰子 富美子 雅文 桂作 重人 保州 扶美代 修

胸さわわ恋が芽生えてきたらしい  
ひこばえは森の命を守つてる  
膨らむ芽風が耳打ちしてくれる  
欲捨てた辺りふつくら芽ばえてる  
芽柳を五指でやさしくふれてみる  
義理だけで贈ったチヨコが芽を出した  
面白いほど日に日に伸びる春芽ばえ  
夜遊びが楽しくなつてきた芽ばえ  
待ちきれずちよつと首出す土筆ん坊  
一滴の水にもいのち咲く芽生え  
今頃になつて芽ばえてきた野心  
韓流に小母さま族が再芽生え  
慈しむ心芽ばえて母となる  
逆風に九条再びの芽ばえ  
健ちゃんに上げるんやねんチヨコレート  
恋らしき芽生えよ三月のわかれ  
根の半ば腐つているが芽が動く  
春の絵具溶けは芽ばえてくるやる気  
芽が出たと大にも見せている花壇  
輓梅がチラホラ亡母の独り言  
どん底で芽ばえた愛た放せない  
五線紙に芽生える愛と春の詩  
思春期の芽ばえ部屋にもロックする

楓 楽  
千里  
隆盛  
瑠美子  
文

見清  
章久  
恵子  
いつみ

直樹  
倫子  
昭三  
尚士  
ダン吉

天笑  
いつみ  
公誠  
富子  
耕治

扶美代  
鐘造  
孝一  
美籠

義子  
一風  
潤子  
賢子  
保州

花時計恋の芽生えのちいらちら  
芽の出ない父で無遅刻無欠勤  
高一の息子がコロンにおわせる  
ナゼナゼと全て知りたい子の芽ばえ  
好きやねんと告白されたたこ焼屋

佳

人

暗嘩ばかりしていたはずだあの二人  
深雪

陽に風に芽ばえるものはみんな春  
森子

通せんばあれが初恋だったのか  
正坊

こだわりが解けて青い芽が弾む  
柳弘選

お喋りがしたいヘルパーさんを持つ  
充子

畏まつてもいつか大阪弁になる  
義子

都合悪いことまで喋る九官鳥  
英子

九官鳥亡母の口調がそのまんま  
理恵

私が喋ると風が騒ぎ出す  
希久子

お喋りな猫を余生の道連れに  
朱夏

黒枠が無ければ喋り合えるのに  
保州

オクターブ上げて喋っている妻だ  
笛生

相槌を打つて本音を喋らせる  
鐘造

お喋りにマスクが邪魔になつてくる  
ますみ

結論を喋らないのが勝ち残る  
公誠

早口になれば美女かて河内弁  
かすみ

よく喋る影が一番淋しそう  
千里

よく喋る男は靴音も軽い  
みつ子

ほどほどがよい重い口軽い口  
夕胡

喋るより聞いてる方がおもしろい  
洋

ふところの温い女はよく喋る  
昭

大阪のこ婦人ツアーお静かに  
淳司

死ぬほどの勇氣もなくてよく喋る  
千里

饒舌の男強りが恐くなり  
昭

まだちよつとこの世にいたい喋りたい  
ばつは

平熱になるまで喋らせておこう  
森子

長々と喋りはつたがなんやつた  
天笑

河内弁今日は喋らぬ裾模様  
いつみ

公誠

かすみ

千里

みつ子

夕胡

洋

昭

淳司

千里

昭

ばつは

森子

天笑

いつみ

公誠

かすみ

千里

みつ子

夕胡

洋

昭

淳司

千里

昭

ばつは

森子

天笑

いつみ

公誠

かすみ

千里

みつ子

夕胡

洋

昭

淳司

千里

昭

ばつは

森子

天笑

いつみ

公誠

かすみ

千里

みつ子

夕胡

洋

昭

淳司

千里

昭

ばつは

森子

天笑

いつみ

公誠

かすみ

千里

みつ子

夕胡

洋

昭

淳司

千里

昭

ばつは

森子

天笑

いつみ

公誠

かすみ

千里

みつ子

夕胡

洋

昭

淳司

千里

昭

ばつは

森子

天笑

いつみ

公誠

かすみ

千里

みつ子

夕胡

洋

昭

淳司

千里

昭

ばつは

森子

天笑

いつみ

公誠

かすみ

千里

みつ子

夕胡

洋

昭

淳司

千里

昭

ばつは

森子

天笑

いつみ

公誠

かすみ

千里

みつ子

夕胡

洋

昭

淳司

千里

昭

ばつは

森子

天笑

いつみ

公誠

かすみ

千里

みつ子

夕胡

洋

昭

淳司

千里

昭

ばつは

森子

天笑

いつみ

公誠

かすみ

千里

みつ子

夕胡

洋

昭

淳司

千里

昭

ばつは

森子

天笑

いつみ

公誠

かすみ

千里

みつ子

夕胡

洋

昭

淳司

千里

昭

ばつは

森子

天笑

いつみ

公誠

かすみ

千里

みつ子

夕胡

洋

昭

淳司

千里

昭

ばつは

森子

天笑

いつみ

公誠

かすみ

千里

みつ子

夕胡

洋

昭

淳司

千里

昭

ばつは

森子

天笑

いつみ

公誠

かすみ

千里

みつ子

夕胡

洋

昭

淳司

千里

昭

ばつは

森子

天笑

いつみ

公誠

かすみ

千里

みつ子

夕胡

洋

昭

淳司

千里

昭

ばつは

森子

天笑

いつみ

公誠

かすみ

千里

みつ子

夕胡

洋

昭

淳司

千里

昭

ばつは

森子

天笑

いつみ

公誠

かすみ

千里

みつ子

夕胡

洋

昭

淳司

千里

昭

ばつは

森子

天笑

いつみ

公誠

かすみ

千里

みつ子

夕胡

洋

昭

淳司

千里

昭

ばつは

森子

天笑

いつみ

公誠

かすみ

千里

みつ子

夕胡

洋

昭

淳司

千里

昭

ばつは

森子

天笑

いつみ

公誠

かすみ

千里

みつ子

夕胡

洋

昭

淳司

へそくりが貯つてやめた無駄づかい  
 それからは仏に案内してもらう  
 核をつくりそれから地獄見た地球  
 それからを聞いて褒めたり采れたり  
 社名カタカナそれから少し持ち直す  
 まず飯だそれから仕事始めよう  
 それからは言わぬが花と蝶される  
 それからは知らぬ一人の始発駅  
 それからは心開かぬ蝸牛  
 核心にふれてそれから不仲なり  
 ふり出しへ戻りじつくりやり直す  
 それからの男にボケベルは鳴らず  
 それからの話は胸に秘めておく  
 出かけますそれから先が書いてない  
 それからの社会悩んでいるニート  
 守るものなくてそれからよく笑う  
 にせ札が出てから疑い深くなる  
 手を噛まれ人の心の裏を読む  
 いい夢で目覚め一日浮かれてた  
 それからの噂は聞かぬ福娘  
 それからの流れを変えたキノコ雲  
 信管を抜いてそれからおもむろに  
 言い勝つてそれから身の置きどころ  
 それからは身辺整理してて妻  
 それからは非常袋を持つて寝る  
 冬帽子脱いでそれから深呼吸  
 その後は聞かないことにしています  
 それからは忘れたふりをしてくれる  
 それからは憎い男の世話をする

哲男 蟹  
 ダン吉  
 和夫  
 正雄  
 三喜夫  
 庸佑  
 潤子  
 美籠  
 俣子  
 一風  
 茜  
 祥昭  
 見清  
 雅文  
 千里  
 度  
 みつ子  
 月子  
 恭昌  
 ますみ  
 正雄  
 楓  
 楓  
 蕉子  
 保州  
 富姜子  
 月子  
 恵子  
 美明

そしてそれからわたくしがしゃしゃり出る  
 それからは貴方任せの彩になる  
 それからは事後承諾と決めている  
 それからは父は背中で見守つた  
 微笑んでそれから棘が飛んでくる  
 涙腺が切れそれから春にする  
 それからの話を聞いた三次会  
 禁酒禁煙それから髭が伸びません  
 それからは夫の靴を磨かない  
 その先は別料金で見えてあげる  
 喪があけて少し明るい紅をひく  
 それからのドラマ楽しくなるメール  
 わが道を行こうゴロは無いいけれど  
 赤道を越すと南が上の地図  
 煩惱を鎮めに帰る道がある  
 子の選ぶ道は一家で加勢する  
 一つの道極めた人の低い腰  
 回り道そこで学んだ処世術  
 一筋の道デゴイチがなつかしい  
 寄り道はしない親父のちびた靴  
 道ならぬ恋して五年若返り  
 寅さんが教えてくれた人の道

扶美代  
 鐘造  
 恵子  
 森子  
 篤子  
 冬葉  
 志千代  
 五月  
 志千代  
 天笑  
 萬的  
 宮口  
 笛生選  
 あやめ  
 哲男  
 扶美代  
 正雄  
 たもつ  
 光久  
 朝子  
 柳弘  
 天笑  
 恭昌

一筋の道を極める匠の手  
 平凡で幸せな道だったよね  
 どの道を行つてもいつか着くだろう  
 会うときはよく会いますね行き帰り  
 脈拍が正常になる遊歩道  
 極楽の道にきれいな花が咲く  
 畦道で一服しているワンカップ  
 日々好日無駄でなかった回り道  
 終章の道の綺麗にしておこう  
 裏の道知っていますという誘い  
 ブローチを無くして道を逆もどり  
 まっすぐに歩いた道を子に譲る  
 振り返れば曲がりくねつた過去の道  
 外国で道を聞かれたことがある  
 その道を極めた人のいい笑顔  
 どの道をどう帰つたか梯子酒  
 イラク戦和解の道はないものか  
 ささやきの小道独りのあほらしさ  
 この道を歩けば着ける俱会一処  
 道の駅トイレついでの中土産  
 生きる道あつただろうに餓死親子  
 火の道を夫婦ですもの越えられる  
 回り道しても苦勞はついてくる  
 パーリンロード娘の息を聞きながら  
 振り向けば思い出つる道がある  
 八十路きてまだ先見えぬ遠い道  
 道草で命洗濯しています  
 道連れになつて下さいお月様

寿美  
 美花  
 月子  
 耕治  
 充子  
 朝子  
 美籠  
 東吉  
 見清  
 忠子  
 雅文  
 萬的  
 保州  
 能子  
 いっかみ  
 楓  
 隆盛  
 楓  
 見清  
 一歩  
 ふりこ  
 (奥)五月  
 昭  
 夕胡  
 英子  
 かりん  
 保州

人  
自画像に道に迷った跡がある

富美子

地  
同じ道歩くふたりの泣き笑い

能子

天  
裏道を嫌い冷や飯食っている

玄也

軸  
いつか来た道へ九条揺れている

兼題「食べる」

河内 天笑選

食はずくて芸をするのに気がのらぬ

哲男

同じもん食べてかあちゃんだけ太り

玄也

今日三回食べた脳に言い聞かす

昭月

夢食べて少しゆたかになる心

昭子

豪快に手刀切って食べてくれ

泰子

悲しみの時もしつかり三度食べ

昭子

持ち味を食べるスパイス使わずに

冬葉

食べるのか喋るのか何方かにせい

忠子

トーストの食べなくなつたお正月

洋修

やさしさを食べると元気でる私

啓子

手料理を食べに来てよと誘われる

富美子

食べ歩く夢のプランをふくらませ

朝子

病魔から解放されたうまい飯

愛論

血糖値敵にまわして飲んで食べ

朱夏

旬のものを食べているから血がキレイ

則彦

手話交わしながら楽しむア・ラ・カルト

富美子

一つ鍋ついで垣根とり払う

啓子

アイディアの要る時食べるチョコレート

潤子

何食べても旨い当分大丈夫

飲んで食つて喋りまくつてもうねてる

修

巨神戦何度も箸の止まる父

正雄

年金の枠薄味に馴らされる

萬的

歩きながらたこ焼食べる大阪べん

一風

フオークには弱くて箸で食べている

ますみ

お命をいただきますと日に三度

(矢)五月

超元氣大阪中を食べ歩く

タカ子

食べ方の解からぬ土産見て茶漬

欣子

食べる物あるからみんな寄つてくる

義

今はもう老母越し老母の年食べる

弥生

社長室入園はずしてたべてはる

岳人

丸ごとの地球を食べているグルメ

ダン吉

七草がゆ食べて故郷懐かしむ

(七)順子

お育ちがちらりホテルのバイキング

和夫

いかなごを食べて季節をかみしめる

正坊

ポストのように何でも食べる胃袋だ

朱夏

持ち上げて眨して食べる評論家

孝一

かくし味誰も気づかず食べている

瑞美子

胎動の分もふつくらして食べる

能子

バイキング欲もいっしょに盛り合す

更紗

道草を食つた分だけ長く生き

正

のら犬と晚餐してるホームレス

深雪

機嫌よく食べる男は花丸だ

理恵

はじめからしまいまで口動いてる

軸

### 野村太茂津卒寿記念川柳大会

本年4月、野村太茂津先生が卒寿を迎えられます。

「長寿をお祝いするとともに、長年の川柳活動に感謝し、皆様の「賛同を得て左記大会を開催することとしました。」ご参加をお待ちします。

日時 4月10日(日)

開場 午前11時 開会 午後1時

会場 JA会館(丁R和歌山駅前)

出句 各題2句(欠席投句拝辞)

祝辞 川柳塔社主幹 河内 天笑氏

事前投句 「寿」川柳塔社主幹 野村太茂津謝選

兼題 「役」とらふす川柳会 辻 スミ選

「癖」三幸川柳教室 木本 朱夏選

「天狗」番傘川柳本社 森中恵美子選

「播く」川柳塔社 西出 楓染選

「大らか」川柳塔社主幹 牛尾 緑良選

会費 2000円(軽食・発表誌呈)

懇親宴 5000円(事前申し込み)

塔句先 〒641-0012和歌山市紀三井寺1-11-2

牛尾緑良宛

(ハガキに2句 3月20日必着)

懇親宴の出欠を明記して下さい)

主催 川柳塔わかやま吟社

# 秀句鑑賞

— 2月号から

坊 農 柳 弘

## 食い扶持の年金削る熨斗袋

稲 葉 洋

生きている付き合ひ、生きてゆく年金、目減りばかりの年金暮らし、欠かせぬ祝い事、ほんに息が詰まりそう。生きている実感。

## 九条をもつ国に在るありがたさ

湊 修 水

改憲論議の中、世界に誇る「戦争放棄」。日本人としてありがたさしみじみ九条万歳。

## マジックで変身したい夢がある

脇 俊 子

世は、まさにマジックの時代、叶わぬ夢をマジックで叶えてみたい。欲張りではないが誰だってそう思ってる。それが夢でも。

## 今日は伊豆 明日は別府と温泉刺

吉 川 弘 泰

騙し騙されの温泉地。せめてわが家で温泉めぐり、金も暇もないけれど……でしょうが。

そんな顔するなと親父同じ顔

大 西 文 次

「俺に似よ俺に似るなと子を思ひ」にふと脳を過ぎる「路郎先生」の句だと。時代を越えても親というものは、嬉しいものだから同じ顔でいいじゃないか。複雑な気分でも。

一度きりの人生何故に死に急ぐ

藤 永 実 千 代

ネット心中、殺伐とした世の中、若者には希望が無いのか、生きてこそ人生なのに。

いつからか本音たてまえ分ける舌

小 川 良 吉

本音だけでは肩が凝る。建前はかりなんて、泳ぎ上手、生き上手、人間味を利き分けること、難しいけど年の功かも……。

なつかしい町の名を消す町創り

鈴 木 一 弘

市町村合併、生まれ育った町が消えていく、何とも寂しいものである。でも新しい町が出来る。時の流れか、国の都合か。

失敗の彼方を見ない木偶の夢

やまぐち 珠 美

失敗を気にしない、プラス思考でいい人はあくまでいい人。雑念のないまっすぐな表現、そして自我を捨てない、夢を繋いでゆく、そんな生き方が羨ましい、木偶でよい。

千カラットつけるときつと肩がこる

神 野 千 恵 子

可能性は無きにしもあらず、分相応で生きている、だから夢でも肩が凝るのかも。

学歴が光る時代よ遠ざかる

村 木 信 子

東大、京大、学歴に頼る時代は無くなりつつある。不況下の就職難、手に職、技術をつけて学歴は二の次。即戦力をという企業が、人物本位、やる気のある人待っている。

児童への安全地帯減るばかり

足 立 由 美 子

物騒な世の中、誘拐、殺人、安全地帯とは。通学路は勿論、楽しく遊べる公園などの確保は、守るべき大人が考える事だろう。

真冬でも四季が溢れる八百屋さん

富 田 美 義

スーパーや百貨店には無い近所の八百屋さん「まいど」に、人の温もりが伝わる。それがとても嬉しい。四季それぞれの幸を売っている溢れる愛が、毎日が楽しい庶民派。

量でない珍珠少しで旨い酒

吉 内 タ カ 子

わが家での珍珠は愛妻の手作りで、たんとは要らない。湯割りか燗酒あればそれでよいでしょうね。

# 工 ツ セ 一

## 丸い地球

林 昭 三

私は、中国地方の田舎に生れ育った。

今でこそ、地球は丸いものであることを疑う余地はない。小学校に入学して、学校に備え付けの地球儀に初めて触れ、不思議な感じでも何回も右に左にも回した。どちらに回しても赤く小さな日本が出て来た。何故だろうか、地球は丸かったのだ。

かつてヨーロッパは、小国でも冒険家が多く育った。新大陸を求めて西に針路をとり、アメリカ大陸を発見したコロンブスがあり、彼は、また東に針路をとりインド、アジア、最終は黄金の国、ジバングに着くつもりであった。

古くから、ギリシヤなどで天文学が発達、太陽、星など天体の軌道が算出可能となり、のちに大洋を航海する船舶の位置が計算されるようになっていた。

また、それらにより地球は丸く自転しながら一定の軌道を運行していることが判明し

た。

最近は大洋においても人工衛星「GPS」を利用し海上陸上を問わず、カーナビゲーションにも使用されて至便な時代となった。

私は以前海上勤務を経験したとき、この地球が丸いことの実感したことをお話しする。

あれは昭和二十三年の三月末頃であった。

日本は先の大戦に敗れ、海上で終戦を迎えた復員軍人と一般邦人を日本に帰還させねばならなかった。

戦後の日本には復員輸送に使用出来る船など浮いていない惨憺たる状態であった。

従つて、アメリカから、リバティ型（一般貨物船）と、LST（上陸用舟艇）を多く借り受け、日本の乗組員でビストン輸送をした。

当時復員輸送は続行中であつたが借りた船舶の逐次返還が始つた。

私は「LST」に乗組んでいたためその返還に、パールハーバーを経由し途中オークランド、サンジエゴを経て、最終は、カナダとの国境近くの海軍基地にて返還を完了した。

往復に約三ヶ月を要した。当時はまだ日本は敗戦国、連合国と講和条約も締結されていない時で乗組員の上陸もまかり成らず、岸壁には海軍の歩哨が警備に立っていた。これには乗組員の逃亡監視と、また別には逆に我々日

本人の警護もあつたようである。

数日後、返還船の日本人乗組員四百余名を乗せて、冬季の北太平洋を西に向け一隻のリバティ型で日本への帰途についた。

十五、六日の航海で今日の夕刻に横浜港外に到着する予定が船内に放送された。

朝食後どの位過ぎたであろうか、見えた、見えたぞー、と大声が甲板を走つた。当日はまだ三月末頃の北西の季節風も強く、空は真っ青に晴れあがり、海は青か紺青に輝いて多少の筋状の波を引いた西の水平線上に、八

合目付近であろうか真っ白な富士が太陽に映えていた。それを見て日本に帰りついた実感をかみしめた。

確かに日本は戦に敗れた、国民はまだ未曽有のショックから立ち直れずいた。

私は富士の霊峰を仰ぎ、国敗れても祖国ありという氣を抱かされた。

通常地理的な距離では、太平洋から日本に帰ると、千葉県の犬吠埼の灯台あたりが一番に視界に入ってくるのが普通であるのに、海岸より百八十キロから二百キロも奥地の三千七百七十六メートルの富士山頂が最初に見えたのだ。「矢張り地球は丸かった」。

半世紀を過ぎた今も、あの時の情景が懐かしく離れることがない。

# 川柳塔社各地川柳会代表者会

一月二十九日 於アウイーナ大阪

主幹は各地川柳会25代表を前に、十年前に比べて誌友が減っている現状に対し、代表者の知恵を出していただきたいと挨拶した。

総務部長より、総会の決定によって本会が持たれた位置づけがあり、司会進行役に渉外部の西内朋月氏を指名して進められた。

## 「各地川柳会の取り組み」

- ・高齡化、病氣等で会員が減っている
  - ・句報を駅などに置いて地域会員を発掘
  - ・選のあい間にベテラン会員のお話をきく
  - ・シニア会をつくり地域の新聞に川柳を載せてもらったり、公民館まつりとしてケーブルテレビで宣伝してもらう
  - ・秀句鑑賞や初歩教室を句報に入れる
  - ・土曜日の句会にして若い人の参加をふやす
  - ・家族ぐるみ、お茶の間的な雰囲気工夫
  - ・呑み会を持って会員を拡大していく
- 「取り組みの中で出された問題点」

- ・公民館活動として市の制約もあり、単純に会員の拡大ができない
- ・各句会、結社の交流ができていない
- ・川柳塔社のベテランの指導がほしい句会、不要の句会あり

## 「川柳塔社、役員、常任理事会への要望」

- ・五十代六十代の若い意見を求めたい
  - ・魅力ある川柳塔であってほしい。総会、常任理事会の谷間をうめる声を拾ってほしい
  - ・トップのやる気、ポリシー、決めたことを発信していく、塔社は発信が足りない
  - ・何を縦糸、何を横糸にするか方針をはっきりさせる
- 「川柳塔」にいい句を出していく
- ・ホームページの初心者教室は有意義
  - ・今日の意見を常任理事会で討論してほしい
  - ・句会の名称に川柳塔をつけることの是非
  - ・この会の窓口、責任者をはっきりする



当日の様子

本会のメインの「会員の拡大」については、時間制限のため今後の課題となったが、会合については評価された。

- ・初めての会合であるためお互いの勉強会、句会の抱えている問題点を出し合おう
- ・悩みを聞くよりも誌友同士の拡大をどうするか具体的に考えたい
- ・諸先輩の意見は会員の高齡化のみであった
- ・同人総会が形骸化しているさらいの中で、この会が有意義であった

これらの貴重な意見を土台に、この会の今後を常任理事会で話し合い、「誌友の拡大」の大きな問題に取り組みたい。

# 老世の城

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

## ローズ川柳会

山崎

君子報

議場では激論裏で手を結び  
千秋楽回り舞台で見得を切る  
点と点結ぶ浮かんでくるドラマ  
子や孫と結ぶケイタイ持たされる  
回り来る早や十年のルミナリエ  
ジョーカーが回つてくるまでの夢  
北朝鮮一度旅せり結び消え  
アリの紐の結び目緩かった  
回転木馬まだ告白を切り出せぬ  
生きるつてくねくね回り道もよし  
まだ夢を追うて冬至の南瓜食う  
帯しゅんと結べば覚悟ついてくる  
回転木馬とまると恋が終わるかも

## 川柳塔打吹 (前月分)

大森

孝恵報

清  
公恵  
善江  
照彦

歲月も美貌も金も逃げて行く  
逃亡の果ての平成佐渡情話  
木枯らしと仲よく帽子逃げていく  
過疎の村待つ人來すに熊が出た  
晴れを待つ天気女のお出掛けだ  
待つている嫁の顔より孫の顔  
待つてあいだ夢を楽しむジャンボくじ  
待ちぼうけそうだと土日はバスが來ぬ  
妻を待つ赤ランプ見る手術室  
やがて來る死を待つている笑い顔  
よろよろとよろめきたいなあの人に  
声援でよろよろの足踏ん張れた  
よろよろと危ない橋も渡らねば  
狂ったかヨソ様にキヤーと六十歳  
よろよろの隙を二番手見逃さぬ  
介護する方もよろよろ老いてゆく  
よろよろになつても見栄を張る男  
運命の女神よろよろしい壺  
袋戸棚二束三文らしい壺  
肩書きのとれた戸棚は粗大ゴミ  
戸棚から少しづつ出す知恵袋  
戸棚にはいつも十万隠しとく  
若かった母を覚えてる戸棚  
万華鏡冬の戸棚に仕舞い込む  
戸棚から下界見下ろす目が二つ  
ばあちゃんの戸棚は菓子の手宝箱

## 川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

完司  
石花菜  
久兼代  
和子  
富恵  
玲坊  
重忠  
螢  
たけ代  
義人  
博文  
克枝  
節子  
龍枝  
美知江  
芳光  
玲子  
幸子  
美美子  
禎元  
よしえ  
三津子  
勝見  
孝恵  
八重子

何時までも仲良し辻の六地藏  
空元氣出して大きな事を言う  
嫁からの心通わすバラの花  
峠越すその一言で安堵する花  
ハントルに遊びがあつたと母の愛  
長生きをしていいですか新世紀  
ヨソ様を冥土へ土産と追つかける  
逢う人に笑顔ふりまく道祖神  
天災は忘れぬうちにやつて來る  
父の吹く笛に踊るは母独り  
城跡に昔の栄華残る松  
夢乗せて天まで届け竹トロンボ  
竹割つた気性が受ける縄ノレン  
茶柱と家族の愛で退き祝い  
謀一手先行く老いの知恵

## 竹原川柳会

時広

あきら  
吟笑  
かおり  
放任  
いさむ  
文仙  
賢  
輝夫  
治延  
ひかり  
初恵  
よしみ  
勝  
寿々女  
貞月  
蘭幸  
笑子  
菁居  
榮恵  
房子  
太虚  
寿枝  
千枝  
史子  
孝枝  
静風  
幸子

## 一路報

この道のこらで君と眼が合った  
裸足になって全速力で走る  
ふたりしてよく走ったね喜寿だねえ  
空つ風きみといっしょに走りたい  
太陽を追っかけカゲが走り出す  
小走りして夫の達者に従いて行く  
走りつづけて元の二人になつていた  
人は皆光る長所を持ち歩く  
逆光のいたずら今日は超美人  
亡父の墓私が行くと光ります  
みんなみんな光っているよ神の子よ  
母の底力子供を光らせる  
一步一步の爽りへ金字塔光る  
人間も鳥も光るものが好き

高槻川柳サークル卯の花 田中千莞子報  
騒ぐほど騒ぎの大きくなる火元  
継ぎ足した噂話でまた騒ぐ  
責任のないのが騒ぐで困る  
血圧が高いと騒ぐから上がる  
結局はサービス残業せねばクビ  
口出して結局重い荷を背負う  
助言して結局火の粉被る羽目  
一局を打ち終えるころ打ち解ける  
一億円老兵たちの二枚舌  
誘惑をされた方にも罪がある  
まだ三つ罪をかかえて骨になり  
自分史に罪な伏せ字が一つある  
掌を合わす指から微罪こぼれ落ち

不朽 厚子 半覚 節夫 汎美 淑子 正宏 敬子 千代美 輝恵 慶子 一路 万年  
茂 美義 重人 きよし 治三郎 照子 活恵 昭 祐作 尚士 晴美 諷云児 宏章

切り抜けた修羅場に残す罪の跡  
虐待を罪と思わぬ変な親  
罪だよね一字違いの当たりくじ  
消しゴムで消せる罪ならたんとおる  
貧乏性何でもすぐに仕舞い込む  
捨つべきを貧乏性で片付かず  
エプロンをはずさぬ母の貧乏性  
貧乏性でリバーシブルがとても好き  
貧乏性で人の苦労も背負いこむ  
一生を貴方の籠で悪なし  
生半可な知識で話絡ませる  
爛酒に酔うも醒めるも一人なり  
ロボットが暮れのボーナス査定する  
家中のメモが重たいカレンダー  
ラーメンの湯気にも四季の色がある  
盲導大影の形に添う如く  
百点の妻でいっしか肩が凝る

東大阪市川柳同好会 森下 愛論報  
倒壊の被災地神の声いずこ  
雑草の踏み倒されて湧く力  
ヨソ様の人気が倒す人の群れ  
日本海ハンゲル文字が打ち寄せる  
断れぬ署名の文字の荷が重い  
絵葉書に色香ただよう女文字  
一年に一度はがきのおつきあい  
督促のハガキ冷たい顔で来る  
丸文字が草書に変わるラブレター  
このはがき持参して銀河鉄道予約

求芽 佳一 義史 武雄 泰美 遊美 スミ子 稲子 美籠 典子 庸佑 千莞子 孝一 秀夫 比ろ志 高栄 女  
弥生 朝子 緑 克己 章久 秀夫 とみを 信治 敏子 定男

新聞柳壇週に五枚のハガキ代  
ひらがなののがき老母を連れて来る  
季節の花を描くハガキで母と知る  
涙拭いてまた新人は強くなる  
赤ん坊がないての正直なる答  
呱呱の声分婉室で破裂する  
刃こぼれの太刀を伝える平家村  
刃こぼれの隙間に抜ける挫折感

川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報  
傷ついた地球を癒す初日の出  
密談のチップへ論吉無言なり  
深酒がしどろもどろに炎えて冬  
一人暮しキュートに酒を足している  
人生の節目を華にするお酒

佳句地十選 (2月号から) 小澤 幸泉  
人間が好き川柳の仲間たち  
でかい声やっぱりノーで決めている  
普通賞そつとあげたい人がいる  
ぼけた振りしてたんまり貯めてはる  
苦も柔も飲み込み人は地に還る  
もし僕が神なら地震などおきぬ  
おもろない時におもしろい顔が来る  
漫画家は洗い顔してベンを取り  
自己主張するに程よいイヤリング  
恋文も脅迫状も呑むポスト  
柳弘 柳 太一 三重子 太郎 ばっは 湖風 愛論 夕胡 伶 さち子 順子 万年 丹吉 岩夫 鎌太 和代 亜弥 利治 高鷲 当代 寿美子

呑みすぎたからなあととほけられ  
甘酒をいれて女の小正月  
洋風にワインで祝う誕生日

淑女より熟女に誘う酒を酌く  
晩酌がわたしの命長くする  
酒好きが会うと立ち寄る店がある

人生の節目節目の祝い酒  
嘘の無い十指が透ける初日の出  
生きるっていいなと思う初日の出

神秘的な力をくれる初日の出  
災害の涙でかすむ初日の出  
天と地を繋ぐ心に初日の出

山里の鶏が答える初日の出  
回り舞台へひとつ大きな初日の出  
初日の出雪に隠れて寝正月

未だ近けぬ人の夜明け初日の出  
お大師の山を拜んで初日の出  
穏やかな笑顔が揃う初日の出

真心に固い財布の紐緩む  
何だろウチップにしては多すぎる  
名調子チップが効いてきたガイド

時を得たチップやんわり効いて来る  
部屋係確かめてから出すチップ  
チップ後がらり変って丁寧語

飯風呂寝るチップはご容赦のほどを  
緑良

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

病みつきは馬券に花が咲いてから  
紋入りの風呂敷だけが知っている

伸子  
はるみ

克子  
朱夏

和

三男  
豊太

三喜夫  
紀久子

公子

保州

和子

英子

和香

美子

輝子

よしこ

佐一

稚代

智三  
泰女  
大輪  
裕美  
正博  
准一  
東吉  
緑良

仲直りするきっかけが見つからぬ  
きっかけがなくて話がきり出せず  
きっかけは蟻の行列ふんだとき

きつかけは蟻の行列ふんだとき  
仲直りきつかけつきたそばまんじゅう  
きつかけを作ってくれた鬼瓦

標準語より味ある出雲弁

京都塔の会

都倉 求芽報

回復期やつとオナラが出てくれた  
ごめんねと明日になれば言えるかも  
ごめんなさい僕にもあった軽い嘘

うろたえてばかりで時を過ごしたね  
この頃は印絆纏用もなし  
無印だけれど光っている男

無印で終り今では鬼コーチ  
貫通した帽子が語るイラク戦  
禁煙を貫くつもり三が日

信念を貫きあちこち傷だらけ  
こたわりを貫き過ぎて近寄りぬ  
ひと言が心貫きゴールイン

道ならぬ恋貫いて朽ち果てる  
黙々と初志貫徹の蟻の列  
組み立てて部言品が残り思案する

女房はうちの大事な部品です  
医の進歩部品交換長寿国  
脳の部品そろそろ老化あなた誰

それぞれが大事なパーツわが家族  
喜んでほしいと作る義手義足

かつ子  
聖子

恵美子

好栄

博利

清泉

白汀

郁郎

求芽

萬的

葉子

英子

正坊

鹿太

満子  
ますお  
典子  
輝美  
益子  
弘之  
則彦  
庸佑  
久留美  
高栄  
百合子  
百合子  
宏子  
啓子

あかつき川柳会

森村 美花報

西年の賀状平和の文字笑う  
胎内を蹴られてからの母性愛  
温暖化神の怒りか大津波

絶筆の母のノートは読まぬまま  
増税の迫った春は祝えない  
光と風友の手温い初日の出

明日の夢積み輝いているノート  
介護ノートに笑顔の頁減ってゆく  
提案をしたら実行迫られる

ユニセフへ貧者の一灯小正月  
生きている限りは迫る青いバラ  
ノートの片隅に謎解くメモがある

起源など知らぬ旨い新春の酒  
気苦労も笑いにかくす母がいた  
九条のラベル銘酒は訴える

初夢は核も地雷もない地球  
鉛筆は子のおさがりで書くノート  
我が先祖代代金に縁がない

ニセ札はあきまへんでと恵比寿さん  
ストレスをがながん書いているノート  
大増税迫る痛みを口にして

老人がいじめ抜かれて怒り出し  
闘病記ノートの文字が乱れたす  
さわやかさ売れるかこれでNHK

一見普通そんな殺人鬼が流行る  
名言をノートにうつす余生です  
私の記憶ノート見るより確か

純甲

侃太

東吉

富美

美智子

和香

ひさ乃

希久子

正坊

千歩

良知

祥昭

利昭

守彦  
保州  
佐代子  
見清  
一步  
朝子  
ダン吉  
幸泉  
一規  
宏  
扶美代  
敏  
シマ子

渾身の力で父の樹に迫る  
やめないで敬老バスをにぎりしめ  
約束をノートに詰めて若がえる

川柳塔おとり

西原

艶子報

初詣で二千五年の風光る  
太陽が光るこの世の果てまでも

新鋭に古参の鑑くずれだす  
新しい帽子かむつて転居する

自己反省新たに祈り丸く生き  
新年を笑顔で祝う家族たち

新札はまずはコレクトファイル入り  
哀しみの底をひとり歩いてる

赤ちゃんの笑顔未来の光見る  
現在も過去未来にもボクひとり

碑が詩の心を光らせる  
凭れ合う柱が欲しいひとりの日

川柳塔まつえ吟社 三島 浜丘報

クレヨン画未来いっぱい塗りつづす  
遊ぶ子がいない未来が映らない

ランドセル未来を担う列笑顔  
過去未来はごまか思案ばかりする

未来のことを考え頭切り替える  
精一杯生きて未来はついてくる

次の世は鶴になりたい四十雀  
うっかりと九官鳥がばらす私語

話し方覚えようとはせぬ鸚鵡  
鉄塔のガラス世の中気にかかる

重人 康男 たもつ 重人 康男 たもつ

幸子 知恵子 幸子

ほどほどの高さで青い鳥が飛ぶ  
窮鳥が飛び込む胸はあけてある  
干拓の地では漁民の一揆まで  
赤ちゃんの拳が地球拓く音

干拓地アワタチ草が喋りだす  
清水の舞台で道を切り拓く

前方が拓けるまでの山登り  
しっかりと未来を拓く子供の瞳

猿まわしいつしか猿の顔になり  
親に似て貧乏性が抜けきれず

ひょうきんな母に似てると言う誇り  
鬼瓦隣の屋根に負けられず

力んでもやっぱ俺は蛙の子  
何処の子かひと目でわかる鼻の位置

かしわ手の音で一日運試す  
かしわ手に一番乗りの音を出す

かしわ手で拝みたくなる妻といる  
かしわ手で大黒さまが聴いている

お願いにかしわ手だけは惜しまない  
柏手へ二千五年の千木映える

川柳大阪 高木 信酔報

どら息子面倒みるとほざく口  
ゆるゆると少しの坂は登ろうか

良く知れと天の怒りと地の怒り  
帰る家ありて平和をかみしめる

霜月の桜は色香控え目で  
村民の帰り待ってる鯉に牛

帰る家ありて平和をかみしめる  
霜月の桜は色香控え目で

霜月の桜は色香控え目で  
村民の帰り待ってる鯉に牛

霜月の桜は色香控え目で  
村民の帰り待ってる鯉に牛

幾子 たけし 蘭 多賀子 雪代 民子 小鹿 宏 すみこ ちえこ 喜美子 義良 浜丘 玲子 政子 長吉 昭二 茂美 芳山 町紅

ダンデイの気分忘れぬサンガラス  
腹ペコへ森の香りを吸うてくる  
家族無事顔がほころぶ避難先  
この命守つてみせるとレスキュー隊  
帰り道空しい心を月が射る  
何時やなく妻べつたりのボーナス日  
里みやげせせらせらぎの音持ち帰る  
安保理の常任なんかと音持帰る  
戦争をゲーム感覚恐ろしや  
里帰り母の笑顔に会いたくて  
ちちははは子の夢丸くまるく撫ぜ  
黄金の秋を拾った散歩道  
どっこいしょ口ではのうて腰が言う  
新潟に明日は我が身とリュック寄せ  
大阪のソースべつたりお好み焼  
キスマークべつたりつけてすまし顔  
赤子抱く甘い香りは久し振り  
ふるりに帰る母さんいないけど  
こつぴどく言われた帰路のコップ酒  
遠出したイルカ賢く無事帰る  
郷愁の里が帰れという茜  
べつたりとした厚化粧あんただれ  
一杯の酒にはぐした男意気

重人 笑風 鉄心 善純 青道 柳弘 川童 本蔭棒 喜楽 芳香 一風 民 章久 隆司 ひろゑ 東吉 楽子 丹吉 宏 夕か子 朝子 まつお 信酔 恵美 純子 美紗子 美智子

美しい思い出ばかり添うてくる  
父の樹に相談したい事がある  
せかせかの性親ゆずりかも知れぬ  
せかせかと嫁と姑の瓜二つ

川柳ささやま 遠山 可住報

せかせかと追い立てられる羅針盤  
せかせかと動いて今日も喪に耐える  
節約が身にかけて貧乏くじを引く  
先輩のうしろで貧乏くじを引く  
七五三せかせか気分美容院  
ポケットの中で先輩暖める  
せかせかと大根洗い豆を選ぶ  
朝散歩曾孫せかせかついて来る  
走れないせかせか言うて下さるな  
合理化で後輩いない職場です  
輪廻転生何をそんなに慌てると  
節約を口に出しては嫁ともめ

城北川柳会 吉岡

鈴つけてクマ追い払うランドセル  
無災害ふとんの温み身に染みる  
すすき野の故郷浮かび母思ふ  
おどろいたプラックリストに娘の名前  
病院嫌いする手術延ばしてる  
ずるずると同床異夢のまま老いる  
ずるずるといつか女房の尻の下  
ずるずると嫌いな事はあと回し  
半歩だけ譲るつもりがずるずると  
上見ればきりなりサンマ焼いている  
読み終えてまた消化せぬイデオロギー  
たつぷりと持つているので慌てない  
食卓はだんまり蟹をさせる音  
介護の手いずれ私の通る道  
差別語を喋ってまわり敵にする

文子 靖子 とみ子 多美子 開子 つや子 八重子 富子 君代 哲男 芳郎 可住

喜美子 静枝 美代子 久留美 政子 順三 八重 あき子 あやめ 典子 求芽 重人 一枝 高栄 タカ子

アンクルを変えればあなたお人好し  
通知簿のリストに泣いたり笑ったり  
おしゃべりのリストにのっているわたし  
満腹で目指す頂上足重し  
姉女房歳の差なんか気に入らない  
悪の道どうも魅力があるらしい  
家中で一番威張っている猫だ  
純粋な心を変えてゆくお金  
人の差を計る物差し捨てました  
飽食の主は消化がサジを投げ  
歳の差の違いを思う万歩計  
上客のリスト売る人買う会社  
見栄ひとつ捨てたら消化し始める  
よくやった差は問いません金銀銅  
リストから外され奮起したバット

ほたる川柳同好会 水野 黒兎報

去年今年炬燵の守りで鐘を聴き  
ケータイに守られている塾かばん  
初夢にバーティイイグルホルインワン  
親の方いそいそしてらるお見合い日  
花道をいそいそかえる勝力士  
イブの日はよく働くな子供達  
中道を守っていつも乗り遅れ  
健康を守る他にはない暮し  
残り福までいただいて傘寿前  
子を守る野生動物達の愛  
いそいそと成人式は振り袖で  
いそいそと逝きたいものだ次の世へ

とし子 あい子 倫子 柳一 はじめ 達子 昭子 ひさ乃 集一 正 志華子 史風 千里 公一

緑骨 春代 柳童 直次 長一 信男 昭子 桂子 敏子 雪子 正三郎 勇治

福袋あけるこの手がもどかしい  
吉野屋に親子并似合わない  
いそいそと妻に従う羊たち  
福を売る神社ご難の年始め  
七つの子昔童謡今脅威  
来年も実るか被災地の棚田  
のはほんともう一年か酉迎え  
うまみみる頃合いはかりあとすこし  
処方箋どこにも治ると書いてない  
そんなにも憎けりや寝首あげましょう  
風采の上がらぬ僕がいる写真  
法要の席のお酒の万華鏡  
誰か逝き誰か生まれて曼珠沙華  
出世するおとこ三倍努力する  
かなうまで何度も門をくぐるのさ

川柳塔唐津 仁部 四郎報

川柳塔鹿野みか月 土橋  
佐渡島いっしょに笑う春がきた  
漫才にくぎつけ正月を笑う  
一本より全体を見る美しさ  
嘘ついてるのが分かるけど笑う  
人間は馬鹿だとカラス笑ってる  
久々に笑い胃薬もいらぬ  
寒い寒いと笑うロボット人間不信  
笑ったり泣いたり歳をとって行く  
スッテンコロン人が見るから笑っちゃう  
さかずきを交わして今は仏さま

久子 祥風 黒兎 勝子 勝

螢報 虹汀 高明 輝夫 四郎 水笑 蜂朗 正劍 實 晴翠 勝視

根つからの下戸ださかずき置いてない  
盃をならべ明日の客の部屋  
酌み交わす赤いさかずき春の彩

くに子  
かおる

苦も染も共に飲み干すさかずき  
友情を酌む盃に羨なし  
さかずきは面倒くさいと茶碗酒

菊乃  
みどり

手に持ったまま盃と話す  
年占った大盃の舞いっぶり

永子  
みさ子

さかずきを五百羅漢とくみかわす  
返杯の盃紅を拭いている

喜与志  
富久江

さかずきを北へ向って叩き割る  
大きな輪みんな笑って花になる  
笑ったら借金取りが逃げだした

小鹿  
陸子

ブーと出て顔に紅葉の初笑い  
敵か味方かいつも笑ってばかりいる  
生きている笑劇場を演じている

石花菜  
彩子

大声で笑うと腹がすいてくる  
太陽が笑い日本は小六月

蟹郎  
汲香

川柳塔なら  
坊農  
柳弘報

気楽さと自分に戻る独り旅  
友情がわたしのハートまるくする  
年月の苦勞は顔のしわが書く

盛桜  
諷人

味気ない男やめめの夕ごはん  
独り言聞いてくれている辻地蔵  
ピカソ展きつと逆さに吊ったんだ  
重き肩独りで守る家屋敷  
逆さまの切手に愛を碎かれる

ふりこ  
孝子

独り居の自由気ままが板につき  
定年離婚考えているのは女  
心臓破りの丘で鍛えているハート

春雄  
冬葉

逆緑の疵へ癒しの花遍路  
ヨソ様へ独り相撲の恋をする  
ハートマーク遊び心で描いてある

惠美子  
弘盛

百歳を生きてひとりの広辞苑  
歳月が固まつている坐りだこ  
アルバムに歳月がある髪がある

富盛  
隆子

独身を謳歌その内泣くだろう  
鮭遡上母なる川にある記憶  
歳月よ母から生まれ娘を産んで

太一  
弥生

従順に歳月という船に乗る  
妻は旅白い時間を食べ飽きる  
人間のハートになっていく胡座

秋雄  
國治

一の坂二の坂次も真綿ひとり  
宮様のハート射止めたい笑顔  
傷心に触れずみつをの書を贈る

理恵  
真理子

ボジティブに独りを生きた白い地図  
逆光で見る人生の奥深さ  
歳月は遙かに青い薔薇が咲く

秋風  
登美子

西宮北口川柳会  
黒田 能子報

喪が明けて半音高く春の歌  
支え合うころへ歌を輪が揺れる  
キツンで亡母の十八番の歌うたう

道子  
博一

告白の口火を切ってまっしぐら

正坊

口火点けあなたの返事待ってます  
口火切る理路整然と標準語  
迂闊にも口火を切って火傷する

嘉彦  
石舟

口火切り続けるほんわか締めする  
膨らんだ思い一気白い画布  
膨らんだ声明日への夢をふくらます

鹿太  
いたる

老けられぬ夢も気合いだ今年こそ  
夢のあるうちは輝く眼とこころ  
八十路まだ見果てぬ夢を追っている

美代子  
能子

六十年昨日のように親の夢  
日々増える被害者の数インド洋  
散ることに未練は見せぬ落葉樹

松煙  
朋月

親友の名が消えそうで便り出す  
シャワー全開今日の匂いを流し切る  
どこまでが本音だろうかシクラメン

光子  
求芽

いいお酒ですなと言われ丸く生き  
どう春を先取りしようか花鉢  
この世でも男を待たせよあの世でも

曙蝶  
美籠

ポルトガル種子島へと火縄銃  
ITの世にやはり混んでる絵馬の山  
常識がずんずんずれる三世代

順子  
文

ポインセチア並べば心燃えてくる  
白味噌の雑煮に馴染み嫁が春

哲子  
トミエ

川柳塔みちのく  
小寺 花峯報

ただ一人テレビ相手に初笑い  
見上げればオリオン冴えて寒の入り

誠子  
洋子

寒月と別れ話を聞いている  
初孫の拳の中にある未来  
寒行僧の太鼓しじまに凍りつく  
吹雪空お寺の屋根も道も白  
新年を祝いお酒でほんのりと  
初御空お山津軽に晴れ渡り  
助言からほんのりにおう親ごころ  
一月一日戦の地にも初日の出  
盆梅の祝賀ほんのり客酔わせ  
桜湯にほんのり浮かぶ縁結び  
初孫を両家でりレーする祝  
書初めの一字一字を虹にして  
メルヘンを生むカマクラのほのかな灯  
白無垢で包む胎児が良く動く  
冷戦が続いたままの初氷  
初釜に足がしびれる裾模様  
保護色は白にこだわる雪鬼  
逝つた子の手元で弾む白い毬

三幸川柳教室

古久保和子報

魂を濡らす童話を溜めている  
白百合は月の滴に濡れて咲く  
濡れながら狐の嫁入りみてる野辺  
濡れ縁のひだまり猫と舟を漕ぐ  
残された子はびしょ濡れのまま育つ  
正論も世代違いで怪我をする  
正義感燃えて作つた怪我の跡  
うっかりとした舌先で怪我をする  
怪我をした時から活字好きになり

あすなろ  
きよし  
ヒサ子  
隼人  
順風  
銀波  
ふさふ  
花匠  
雅城  
井蛙  
黙人  
岳水  
慕情  
花峯  
一花  
五楽庵  
起世子  
桂香  
孝義  
信子  
公子  
かずみ  
義男  
次根  
武

忘れようちよつと怪我したような恋  
母さんのポツケにいつも傷テープ  
切り傷のイロハを知つた肥後の守  
かすり傷だけど甘える母の膝  
転ぶたび強く丸くと神の声  
追い風を味方と信じ飛んでみる  
とびつきりの笑顔只今修業中  
父の背を飛び越えてゆく竹とんぼ  
肝心なことは飛ばしてある答え  
飛ぶという文字は確かに飛んでいる  
足腰の骨がぼきぼきサインだす  
小骨まであつて無害になり切れぬ  
ワレモノ注意骨粗鬆症ですわたくし  
やさしく抱いて骨がごきごき軋むから  
鯛の鯛 雑魚にも雑魚の骨がある  
骨っぽい男に惚れたのは男  
喉仏秋刀魚の骨が騒がしい  
骨つぱしの強い男の楷書がき  
雑魚だつて骨はきつちり揃つてる  
京言葉はんなり鬼の骨を抜く  
飛び抜けて光る椅子への風当たり

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

眉あげてあしたの風に吹かれよう  
眉ちよつと動かし返事してららし  
初春の眉はんなりと祝膳  
左遷にも負けぬ男の太い眉  
大吉のみくじに眉も目も笑う  
眉がどう動くかじつと返事待つ

智三  
朱夏  
町子  
幸  
登美代  
徑子  
清史  
准一  
保州  
イセ  
さち子  
千秀  
和代  
和子  
光男  
美枝子  
八重子  
章子  
昇  
みね

心電図騒いだほどに乱れなし  
偽札の騒ぎで二〇〇五年明け  
物騒な国も支援の声あける  
赤ちゃんがクシヤミをしたと皆騒ぐ

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

皿の数読んで決断することに  
未来図の彩見付からぬ絵の具皿  
皿一枚犠牲に妻の乱終る  
百万と言われその気で見る絵皿  
皿一枚割つて女の意地通す  
皿を持ち右往左往のバイキング  
立飲みを受け皿すすり今日終る  
大皿に盛られた僕のチョコレート  
方言の大皿匂をてんこもり  
皿洗いシエフを夢見てする修業  
母さんが洗うと皿が光り出す  
花柄の小皿に弾んだいい話  
引退は受皿しだいと居する気  
嬉しい日皿いっばいに笑顔盛る  
白い皿介護の色を盛つて春  
初詣で無神論者も鈴をふる  
祈る如く一息吸うて海女もぐる  
合掌の姿感謝の福寿草  
ふりむけばみんな祈つた過去を持つ  
群青の祈りに満ちたミレーの絵  
現実を受けとめ明日への祈り  
百度石百の祈りを踏む素足  
もう一つお願いしてもいいですか

喜美子  
香住  
欣史子  
シマ子  
ダン吉  
一風  
春蘭  
まつお  
直子  
加津子  
浩三  
弘直  
欣之  
宏至  
たもつ  
昌子  
頂留子  
ますみ  
欣子  
とみを  
きよみ  
柳伸  
美代子  
あかり  
巳代一  
秋雄  
芳香

母さんを待つて折った小さな手  
折るだけ折ってみようもう一度  
過去完りきれいな未来を画く折り  
初春の無事を折つて漕ぐ舟出  
病む猫を撫でやるしかない折り  
仮設の灯やつと点して手を合わす  
きらり

川柳塔きやらぼく 福代 天雀報

今日もまた亡母と語つて日ですごす  
神さまにすがつて泣いたことがある  
何事も中弛みだな活入れる  
コンビニの売上覗むにぎりめし  
ひびき合う星よささむいね午前一時  
赤勝で白勝で同じ歩幅の八十路坂  
朝のベル友のやさしい声を聞く  
紅葉も散つて上父の法事もすみました  
光らない螢は苦い水嫌い  
五里ヶ浜も松くいう虫にしてやられ  
右往左往しているうちに年の暮れ  
うしろ姿みんな淋しい冬木立  
ティータムちよつといさの繋ぎ目に  
また一つうれしくもない歳重ね  
バランスがとりきれなくて歳悟る  
一枚になつてしまつたカレンダー  
仏との隙間を埋めるパンを選ぶ  
生きる知恵分相応に弁える  
正月を待たず義弟は星となる  
眼で笑う愛は手のひら往き来する  
野菜とりにと米寿の叔母が電話くれ

菜月 弥生 いつふみ しまり  
那珂子 やえ 玲子 恵子 ゆき すみえ 章江 晶子 なみ 亜弥 てい子 田鶴 ふみ 蘭 天雀 杏 千絵 初枝 春枝 瑞枝 寿々子

ねんねの森から幽かに亡母の子守り唄  
輪の中に大きな声がひとりいる  
ライバルと仲好しだったのは昔  
あれこれと總めて夕日消えてゆく  
紫泉 日枝子 富美子 千代

長柳会 村上 直樹報

被災地の庭にもきらり福寿草  
球界に新鮮な風イギリス  
偶然に逢つた夜道の寒の月  
手づくりを新鮮だと謙遜し  
福笑い恵比須大黒福の神  
靴持ちいずれ持たせる夢を抱き  
侘しさに無性に妻を抱きたい夜  
新鮮な風のささやき聴く古道  
選りに選り開けてがっかり福袋  
グルメ旅舌が答えを出す鮮度  
福助のマークなつかし足袋を履く  
福々しい顔してきつことを言う  
言いそびれた言葉を抱いて除夜の鐘  
福福しいお顔の人がよく怒る  
老友の意外と若い抱負知る  
福笹に願ひ託して娘は嫁ぎ  
新鮮な頭脳に沁みてゆく絵本  
千の愚を抱いて脇道迷い道  
手の平の福はこぼさぬローヒール  
通帳をしっかりと抱いて老妻元氣  
すき間から覗いた福をたぐり寄せ  
みどり児を抱いた時から平和主義  
山古志を思えば私福だらけ

直樹 もこ 明子 明信 靖博 たけし 敬二 三和子 武男 和代 ひろし てるこ けい子 靖子 芳野 正一 一慧 まさみ 和子 幸雄 よしお 正子

春の海生きとし生ける物を抱く  
被災地へ是非暖冬を贈りたい  
かわはら川柳会 上田 俊路報  
好道 静子 登生 かず恵 悦子 泰良 雅子 余史子 寿子 俊路 富美子 淳司

富柳会 池 森子報

逃げ道は残して叱るうちの嫁  
青春は逃げ足早く夢の中  
災害で逃げる生活もういやだ  
言い訳の裏で駄金逃げまじう  
逃げる人追わずに彼と共白髪  
民営化過疎のポストはノートという  
ラプレター入れたポストに手を合わせ  
このごろは嫁のポストが上らしい  
誤字当て字ポストはみんな知つてい  
ふるさとにふるいポストのある安堵  
花咲かすコント温めてきた月日  
煩惱をまとうて膝の毛糸玉  
出番なく欠伸している糸車  
去年より髪うすなつた誕生日  
過去語る瞳はぬれて枯れすすき  
みんな去り私ひとりの鬼ごっこ  
毛糸編み日向縁側鼻眼鏡  
手編みです愛も嫉妬も詰めてある  
秋なのに私の彩が決まらない  
縁台の将棋がくれた歩のころ  
想い出を編んで残り時間を温める  
大根を切れれば静かな白き円  
さよならを言わせる合鍵の軋み  
紅紫朗 扶美代 高鷲 伸雄 富美子 鐘造 隆彦 和子 順子 淳司 英子 奈保美 アキ

一大刀は真正面から振り下ろす  
紅葉の道で拾ってきたコント

強がりの私泣いてもいいですか  
中立と豆腐ばかりをついついてる

火も水もぐりぐりコントが生きている  
皆他人切り取線の向う側

噂話が男一人を消した午後  
じつくりと時が旨味を連れてくる

手のとどく深さへ母の語をためる  
どの指も答えを拒む秋夜長

暖かいコントを探す投書箱  
人間のコントずしりと愛と憎

いま今の景色の中で愉しまん  
風船の放浪命ある限り

足音も風も殺して過去にする

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

気持だけ開けた障子に猫帰る  
福を呼ぶ恵方の扉開けておく

傷ついたお椀があの日語り継ぎ  
幼顔すつぱりかくれる祝い椀

お年玉あげる子曾孫二人です  
五百羅漢の顔の一つに去り難し

すぐ逃げる自由の好きな青い鳥  
七度目の干支を迎えて身構える

ひと言が過ぎて孤独の風に遭う  
捨てるのは至難の技よ年重ね

冷えこんで住所録から消えたひと  
寒空にうすれゆく下弦の月

巳代一

浩子

奏子

夕子

信子

宏至

政義

和代

鬼焼

萩乃

深雪

欣之

ひろこ

春蘭

森子

遥かなる放縦の日々椿落つ  
落椿みごとなパントマイムだな

はびきの市民川柳会

重いもの軽く語るもお人柄  
福袋重たい方はやめておく

正月は体重計を隠しとく  
九条の重み総理よご存知か

重い荷を手伝う友よありがと  
りんごころ重いドラマを愛しました

余生とは私も知らぬ持ち時間  
容赦ない時間へベンが走らない

あの日から時間止つた広島忌  
ほんやりと過ごす時間にある至福

甲斐の無い化粧に時間かけている  
すんなりとかかぬからこそ夢もあり

すんなりと言葉が出ないプロポーズ  
厄年もすんなり過ぎてもう傘寿

ネットシーは僕のロマンを掻き立てる  
ライバルが二人仲良くお茶してる

ミス터리抱いてるらしい喉仏  
掛け違うボタンに絡むミス터리

マドンナが僕にウインクしてくれた  
名も知らぬ人から届くバラの花

灰色の夕陽と沈むミス터리  
神様に値段があつた祈祷料

値札から外して欲しいゼロ一つ  
正札で買うて来るとは気の弱い

半蔵門  
芳子

徳山みつこ報

かつみ

一壺

章司

ダン吉

敏

みつこ

久仁子

庸佑

いさお

美代子

六平

たけし

真一

坪川柳会

這つても孫の式には出ると言う  
嬋り馬鹿正直にほぐされる

嘘真互いにからむ除夜の鐘  
雪やこんこん童話の中はあたたかい

知らぬ事続く男がする世帯  
喚声が岩肌弾く舟くたり

青空に仰ぐ紅葉絵の具なし  
税務署で嘘とまごとの顔並ぶ

おばさんが歩道ふさいで長話  
古毛皮身にまとつての通夜の席

霜焼けも鼻たれも見ず世は平和  
正直を曲げて記憶にございません

傷いくつ野良の毛皮の日向ほこ  
虎の皮座るんじゃない見せるだけ

朝霜に映える葉はたん誇らしげ  
震度7地域の絆光つてる

生き甲斐は日々の暮らしの中に見る  
足元に蝶かと思えて落葉舞う

この一年体に負けてあたふたと

高知川柳社

叱られる孫をかばつて叱られる  
助っ人の勘が外れた答案紙

助太刀へむつとしていいるへボ将棋  
それなりに老人会の旅プラン

助太刀が足手まといになつてい  
豊かさ心の中は埋められぬ

八十田洞庵報

年子

みやこ

和香

俣子

信博

富姜子

茂平

洞庵

里子

桜琴

とみ

幸

和美

蛙城

功雄

孝雄

快風

幸

ただし

悦子

勝

悦子

鉄男

貞夫

令子

和

松風報

川竹

悦子

心から墓前で詫びる親不孝  
良心も虚栄も包むのし袋  
真心が届かぬままで恋終る  
子育ての中で学んだ親心  
いつまでも友で居たくて句を捻る  
心まで売らぬ少女の瞳がきれい  
青年の主張未来へ血が騒ぐ  
傷心へ女は紅の色を変え  
のりしろに心残りの疵がある  
呵然大笑すると心が軽くなる

川柳ねやがわ

森

カンニングするにも金が必要らしい  
人生の罪を削ってやり直す  
和服からスーツに仕立て替えてグー  
体当たりしてから反省しています  
弱い者に当る厳しい世が悲し  
良い嫁に当たったようだなあお前  
平穩に当りさわりのない返事  
思い当ることはがぬくいみつをの書  
まぐれ矢に当り私の現在地  
アンコール大合唱で幕を開け  
アンコール忘れ余韻に酔っている  
よちよちのポーズへ何度もアンコール  
アンコールまでは寝ていたコンサート  
アンコール嬉しい幕を下ろせない  
腰痛へ抱っこ抱っここのアンコール  
さあ気合入れよう辛くなる仕事  
はやされて気合オーバーに塩を撒く

蕪報

哲風

和江 良雄 千恵子 京子 竹萌 美々 典雄 松風 哲風 みるみ  
一風 さち子 博泉 ルイ子 弘風 朝子 恵子 三郎 茜 たもつ 弘一 寿子 仁清 亜也子 高栄

ここの一番気合で勝負処世術  
まだ古希と気合を入れてピンク着る  
スパイスのきいた弁当気合めく  
ときどきは気合抜きたい古時計  
七人の敵へ気合を掛け女将  
老い達者小春日和の日向はこ  
巡り来た千支に感謝の初詣で  
アベックが夕焼けスポーツ占拠する  
北風に思いつづのらす拉致家族  
軍靴鳴り砲火響いて年が行く  
進んでたはずの時計に油断した  
平凡に暮らせる毎日こそ奇跡  
五線譜が苦笑いする祖父の歌

サークル檸檬

吉田あずき報

美しい言葉だありがとう言われ  
旅立ちの春待つ心濡れている  
いい答欲しくて自問自答する  
美しい言葉で飾るむなしの日  
自閉症とでも綺麗な詩をつくる  
近所とのほどよい距離にある平和  
空振りにならぬよう靴紐しめる  
人を待つ時間は遅々と進まない  
美化された言葉心を素通りす  
美しくなると信じて化粧する  
美しく咲いて身のほど忘れおり  
夕茜有終の美を飾りたし  
どの神もいくさの好きな信者もつ  
美しく老いるに金もいりませんな

忠実 かすみ とし子 洋 庸佑 一笑 勇太郎 利昭 栄二 一炊 修 亜成 日出子 哲夫 遠野 楓楽 房子 扶美代 光久 義子 節子 あずき いわゑ 希久子 正坊 棲世 たもつ

岸和田川柳会

原さよ子報

糸くずを取ってあわてるひとの妻  
似た人を見返る空に昼の月  
オレオレサキどんなひとか出ておいで  
手作りを外しての温みで売れてゆく  
座布団をはひつてからが長い客  
政治家も布団も叩けける出るほこり  
長持唄と峠をこえて来た布団  
老母の手を便利に使う親孝行  
便利さが不便に変わる複雑さ  
全自動スイッチ押し主婦は暇  
ケータイの便利つけこむ罪の数  
組板の上で動じぬ鯉の自負  
荒れた手を誇りに思う家事育児  
母さんの誇り子供がみな元氣  
誇ったがゆえにしんどいブレッシャー  
つづがなく生きた歳月誇りたい  
賞罰なし笑顔と元氣誇ります  
核の数そんなに誇ることですか  
胸張って父の後継ぐ大工さん  
責任のない人の口よく回る  
戻したい回り舞台の絶頂期  
地球儀を回しながらの世界旅  
銘柄を褒めて次つぎ回し飲み  
利回りにさとお嫁の計算書  
回るドア一步が恐い老いの足  
偉そうな顔して政治家逃げ回る  
よく回る口だけ達者お姑さん

路子 みつ江 みね代 照女 笑司 穰一 野添 ゆり子 東吉 甚一 蛙城 仁祿 房枝 香代 岩夫 弘吉 ダン吉 鍊太 珠子 洋 みよ子 守 幸子 さよ子 寿海 ふみ代

着飾つてみてみてもかくせぬしわの数  
ひつたるあぶない通りを回り道  
何処違うヨソ様もひと俺もひと

豊中もくせい川柳会 江見 見清報

無作法が過ぎて孤独な影法師  
間違つてかかった電話にもマナー  
自己暗示かけて挫折を乗り越える

多い目に柚子賣うて二度柚子の風呂  
福笹におそまきながら老いの酒  
梅一輪穏やかなれと祈る日

冷えた手を温める間なし妻の留守  
目の上の瘤に気づかぬふりをする  
内緒のはなし裏へ曲れと恵比須さん

間に合うといつも笑つて頼み事  
私う気がないのにレジで小競り合う  
子と登る坂道だから明日がある

百八つ撞いても残る悔いひとつ  
胸痛むTUNAMIの爪の黒い痕  
自画像をどうせ画くなら美人画に

忘れっぽいのも幸せかもしれぬ  
我が人生変化重ねて今がある  
老いる今二人合せて一人前

十八歳おんなに脱皮する少女  
アンケート答えて自分再評価  
孫百風来ても来んでもいらいらと

呆け防止川柳句集読み返し  
マナー良く並び参拝清し  
間をもたずお茶がだんだんぬるくなる

力子 狸村 呂万  
庸 隆  
則彦 英子 和子 高栄 啓生 満寿巳 春 蛙  
尚士 慶子 幸雀 緑骨 郁子 寿美子  
タミ 知香子 正坊 玲子 千津子 久太郎 巴子 求芽

ハウス栽培季節忘れてる野菜  
失くしたけどうせはずれの籤のはず  
見清

川柳エスボ 山本 三郎報

メモ持つて師走のまちを市場籠  
ガラクタを並べて天国おらが城  
童謡にみんな童の顔になり

来年は災い転じて佳い年に  
旅に聴く馬子唄酒が身にしみる  
飲み会もままにはならぬ亭主持ち

星ふるごとアフガンの子にしあわせ  
百歳百句めざし傘寿の日々ひねる  
乗り継いで孫と運んだにぎり飯

繩のれん未完の夢を並べてる  
日本海手薄なんだよでもイラク  
幼な笑み末は女帝か愛子さま

生甲斐をくれる友いで合撃す  
店頭に酒粕並び冬と知る  
冬暮れて帰る家路の遠き道

紀伊山地時空を超えてこころ解く  
喋りたいけどこれだけは喋れない  
将来の実り信じて夢植える

挨拶のキャッチボールで街を行く  
初孫の誕生祝いサクラ植え  
日常がなぜか切なくいとおしい

ゆく年に残る煩惱くじを買う  
見清

萬的

三郎

高栄

一歩

一炊

恵美子

とよ子

団地

一幸

裏がある玉虫色の届けもの  
見届けた限りこの世はこんなもの  
手の届く小さな幸を忘れてる  
ラブレター届ける役目ばかりする  
偵察に出て飲まされてきたらしい  
六ヶ国語しゃべるポケットの居候  
おははんやから通訳なしで値切られる  
通訳が訳し切れない腹の底  
通訳を頼めば恋人までとられ  
日溜りで内緒話の市場籠  
通せんぼした手に溜る冬の風  
ストレスを溜めないように今日も呑む  
サーピス券ためて期限が切れている  
思いっ切り飛んだ処に水溜り  
歳月が五体に容赦なく溜る  
利口さと狡さストレス溜めたまま  
少しずつ秘密が溜っていく小箱  
速攻が得意で守りには弱い  
恋芽ばえ速攻で嫁にする  
レスキュー隊いま速攻で子を救う  
現ナマの威力速攻くいとめる  
ゆず湯のみ風邪速攻にやつつける  
札束をみればうつ病すぐに効き  
速攻の妻に弱点さらけだす  
意気ようよう二人で届け出して来る  
どん底で人の情の荷が届く  
速攻と聞いてへそくり出している  
お隣のセンス偵察する花壇  
偵察をするロボットも出来るかな

萬的 重人 朝子 ダン吉 アキラ (蘭) 修 章久 シマ子 更紗 度 遠野 弘子 寿美 楓楽 柳弘 千里 昌紀 弘泰 雅文 柳伸 叡子 憲太郎 集一 初太郎 ひさ乃 千梢 欣子 日出国

うぶみ川柳会

小谷美ツ千報

弱り目に祟り目余癡まだ続き  
どきよう度胸怖いものなど何もない  
獸道にピンチ来たる熊出沒  
経験でピンチを塞く勘が冴え  
裁判に負けぬ度胸で法廷へ  
二度三度ピンチ切り抜け今日の飯  
塞く日はポインセチアの赤を抱く  
度胸決める時女でも持つてます  
ピンチでもいつも笑顔は絶やさぬ  
靴の紐妻を信じて朝を出る  
荷で座席塞ぎのんびり船をこぐ  
小切手にものを言わない紐がつく  
苦も楽も飛び越え度胸此処にあり  
五感みな塞く極楽のパノラマ  
ピンチには爺が打ち出の小槌ふる  
綴じ紐が足りない波瀾万丈記  
雑巾でひと拭きすれば済むピンチ  
折らねばこのわたくしが潰れそう  
一つずつピンチを積んだ父の塔

静生  
黙光  
護  
くにお  
かつみ  
天人  
よしえ  
和

ざらざらと光る冬菜の中にいる  
炎える火をあなたの胸に写したい  
股のぞき天の橋立なら写す  
墨をすりただ黙々と写経する  
雨の日は写経三昧ウツも晴れ  
水仙と並んで写す土堤の春  
書き写す富士山の絵は一筆で  
色褪せた写真に過去がよみがえる  
越せそうで越せない父の背を写す  
写楽伝説の流行に泣かされる  
写しではなくて応募の襖絵だ  
つるべ井戸写す満月ロケの村  
複写したお金すかしで見破れる  
親展の便りときめきながら開け  
親展！と言つてアラレが窓たたく  
親展の封書が届く淡き恋  
親展の中味たいてい金のこと  
親展の再検診に眠れない  
親展に心弾めば請求書  
くり返し親展を読む夫の背な

あづま  
雄人  
芳江  
天雀  
登美枝  
重忠  
ひろ子  
宣子  
美ツ千  
帆雀

ざらざらと道も動じぬ蟻の列  
ざらざらには目を光らせる親がいる  
照子  
節子  
一瑠  
瑩

あづま  
雄人  
芳江  
天雀  
登美枝  
重忠  
ひろ子  
宣子  
美ツ千  
帆雀

ざらざらのマツケン不況吹っ飛ばせ  
たぬ

あづま  
雄人  
芳江  
天雀  
登美枝  
重忠  
ひろ子  
宣子  
美ツ千  
帆雀

岩美川柳会

石谷美恵子報

ストーカーざらざら蛇の目が迫る  
過去未来真ん中へんが光りだす  
ざらざらとしようペン枯れるまで  
ざらざらとしようペン枯れるまで  
ざらざらとしようペン枯れるまで  
ざらざらとしようペン枯れるまで  
ざらざらとしようペン枯れるまで  
ざらざらとしようペン枯れるまで  
ざらざらとしようペン枯れるまで  
ざらざらとしようペン枯れるまで

公乃  
瑩  
一瑠  
節子  
照子  
たぬ

倉吉川柳会

竹信 昭彦報

酉年の女を抱いて羽が生え  
擦り減った羽根を繕う古稀の鳥  
羽広げ男と二人雲に消え  
一葉や野口英世に羽根が生え  
羽繕いしたい故郷の川も消え  
酉年のわたしに羽根が生えてきた  
ふる里で羽を休めに汽車に乗り

和枝  
和子  
泰輔  
幸子  
酔美蓉  
喜美子

むらくも川柳会  
年金をそっくりおろしお年玉  
お年玉年金で不足手出しする  
お年玉親の財布が軽くなる  
お年玉用意採待つお正月

毛利  
幸報  
定子  
信夫  
明朗

お年玉やる子がいらないのも淋し  
お年玉やる子の数を指折って  
宝くじ心わくわくお年玉

初夢の中でもらったお年玉

お正月主婦にも欲しいお年玉

秋風がポストの底へ落ちた音

ストープを電気に替えて安心し

食欲にみのりの秋を感謝する

敬老の長寿の集い和やかに

ほけられぬ人の余生に学ぶこと

山茶花が今を盛りに咲き揃い

帰り道沈む夕日の美に出会い

帰る家あつて人生旅に出る

心外な風が千里の外にある

尼崎尾浜川柳会

山田

耕治報

お奇りやすと一声欲しい先斗町

見る人の心で変わる万華鏡

翔んでいた頃のまんまで初日の出

すき間から洩れてる明かり老いの城

しあわせはお腹いっぱい食べて翔ぶ

あれこれと視野にしっかり翔ぶ構え

やがて翔ぶ金の卵のお入学

蛍雪に学んだ人をふと忍ぶ

一・一七残る命が灯を点す

御神籤の吉へハードル上げて新春

満点でないが明るく笑う嫁

一瞬の表情ストロボ見逃さず

出る杭に先ずはなろうといつも翔ぶ

秀子  
英男

彰

安男

美保

恵美子

八重子

ます美

寿

ふさこ

美喜子

昭子

喜美

秀夫

かあちゃんは翔んでカルチャー今日ワルツ  
干支にない鯨にたよる地震予知  
翔ぼうよ友よ綺麗な花が待っている  
初恋の人と続いている賀状

バーゲンで一年分の明かり買う

あかあかと明日を染める茜空

明かり射す窓に明日の顔がある

先輩の助言で苦難のり越える

川柳塔打吹

大森

孝恵報

落ちついた古い町家の黒光り

七光やんちゃ坊主が出世する

我が子だけ光って見える入学式

日は光る特売場へ向かう足

人の世に二千五年の光りあり

四十二歳ひと際光る銀メダル

一円のみまで一円光ってる

自分史のところでどこにある光

白い血色とりどりの料理映え

手の上で皿と夫を転がそう

皿回し一本じめで技を終え

愛憎も人間の死も盛った皿

受皿が用意してある天下り

皿割ってみたがストレス逆もどり

晩酌に一皿添える妻の愛

膝の皿ときどき笑う昨日今日

皿回し縁起かついでおとつと

パラボラの皿が宇宙を食べている

夢を盛る皿は大きい方がよい

孝一  
義芳

比る志

江美

全彦

求芽

鹿太

美籠

京子

楨元

セツ子

玲子

螢

公恵

三津子

節子

和子

紀美恵

久芽代

克枝

泰山

博丈

清

幸子

義人

石花菜

芳光

冬の朝枯木に花が咲く理想  
七転び八起きの理想また逃げた  
理想の鷹が親の鷹をうとんじる  
連れ添って理想の夫に仕立上り  
人前で理想の夫婦演じてる

結婚の理想高すぎ行かず後家

百人が百の理想で生きている

おい息子理想の人を連れて来い

風呂沸かす薪に理想の火があった

お金だけくれる理想のおじいさん

盛り皿にのびる手の数一人増え

翠洋会

谷口

力強い鳴き声巣立つ日も近い

災を取り去り福を取り込む年であれ

古希過ぎて元気なだけが取り得です

紅白のとりでもめてる歌謡界

取り箸が揃い投げくうちゃんこ鍋

皇室に幸せ運ぶこうのとり

親友のとり持つ縁で泳ぎ着く

残り火を集めて捜す青い鳥

身のまわり世話してくれる西もいる

すき焼にとりが好きな京育ち

取り持った甲斐あり佳き日媒酌人

彩いろのとりが舞い込む年賀状

とりあえずしっぽつかんで仲間入り

飯粒を残せぬ癖が治らない

変らない去年の顔で初詣で

生きている全身麻酔さめた朝

勝見  
順子

重忠

龍枝

善江

芙美子

美知江

玲坊

照彦

完司

孝恵

義報

美籠

良一

恭昌

会美

孝一

満作

蛙

日の出

舞夢

春

絹子

志華子

蕉子

尚士

昭

正坊

生き下手の男と津波見る炬燵  
日の丸の旗にアイロンかけている  
無情にも被災地雪が降りつもる  
大阪の雪は木の枝飾るほど  
鎖持つて山に登った日も昔  
飾らない夫婦で隠し事が無い  
飾られた街に虚しさだけ残り  
年老いたボチの小屋にもしめ飾り  
梅一輪晴れ着の妻の髪にさす  
イヤリング噂話にゆれてる  
飾つても遺影は遺影声がない

川柳クラブわたの花 井尻

出口から逆走シルバー運転手  
ばあちゃんのあの一言がバズル解く  
やることはすべてやったがチャンス来ず  
恋あまた愛した人はただひとり  
肩の荷をおろせないまま黄昏れる  
道で売る野菜素顔で勝負する  
相談はするが決め手はいつも妻  
不即不離ゆつくり泳ぐ老いの紐  
億のつよ籤やめにして義援金  
負けぬよう勇気を持とうと深呼吸  
この年の災いの数極まれり  
輪廻する新芽枯野の下で待つ  
風をよみ一步に挑む古希の春  
ぐるぐるとう出口をさがす金魚鉢  
抜け道をたくさんつくり規正する  
明るく閉じるマッテンサンバ赤白に

富子 八寿子 義子 八子  
叡子 道子 宏子 宏子  
さと美 宏子 宏子 宏子  
千梢 宏子 宏子 宏子  
石舟 宏子 宏子 宏子  
千歩 宏子 宏子 宏子  
真理子 宏子 宏子 宏子  
理恵 宏子 宏子 宏子  
桃花 宏子 宏子 宏子  
みつ子 宏子 宏子 宏子

民報

(体)たえ子

クマさんも眠つたらしい年の暮れ  
担がれてへそくりまでも皆しゃべり  
数え唄歌つて聴いて寝かされて  
三億のお札数える夢を見る  
人の輪に出しゃばり過ぎて溝出来る  
孫来ぬ間財布しばしの骨休め  
御神酒上げ迎え入れます酉年を  
遠くに住むが気持身近ないやり  
筋書きを何度も直しマイウエイ  
悪いねと言いつつ上手い人使い  
生きているたまには弱音吐いたつて

堺川柳会

河内 月子報

確約を迫ると話そらされる  
初日の出まぶしき妻の薄化粧  
熱爛で夢買いに行く宵戎  
初釜でひつくり返る長い脚  
へそくりをたしか挟んだ本が無い  
初物を食べ長生きはせぬように  
セピア色だけと捨てない夢がある  
休肝日一日すらしロゼを抜く  
確かとは言わぬところが俺の自負  
百歳を夢みて葉飲んでます  
生きている実感が薄く初日の出  
目減りした夢を引つ下げマイウエイ  
不確かないのちですから慈しむ  
夢食べてここまで生きて来たのです  
喜寿祝う家ふくらむ路地住まい  
初耳のような顔してギヤグを聞く

女也 直樹 和夫 潤子 千代 時雄 好  
敏男 いたみ たか子 義明 春枝 知佐子 美代子 民

妻の座を守る小さなこの指輪  
ふとこの夢を取り出し陽にあてる  
一日を確かに生きてうまい酒  
口確かですが謀反の足と腰  
この世にはちよつと夢見に來てるだけ  
幸せは確かな脈の調子良さ  
ひとつずつ夢を實現した日々多忙  
転んでも転んでもまだ夢を追う  
木の香りを癒してくるログハウス  
気楽さが一番という老後です  
君となら行つてみたいな露天風呂  
森林を壊すとお魚が消える  
たしかめに來た内容を忘れたたり  
スフィンクス見に行く夢は捨ててない

冬 朋 半 像 小 篤 泰 かりん  
虹 月 銭 山 雪 子 子 子 子  
天 真 文 八 八  
笑 澄 八 千  
浩 浩 千 代

第2回大野風柳賞作品募集

雑詠 五句(未発表作品)

審査 大野風柳

○集句は記名選。五句一組として総合力で賞を決定。特選3句、秀逸7句、佳作5

0句を発表、6月26日柳都大会で表彰。

○大野風柳賞1名、準賞3名、奨励賞5名

(各々に賞品・賞金あり)

締切り 4月25日 1000円(小為替)

発表誌柳都希望者は500円加算

〒956 8891 新津局私書箱15号

柳都川柳社宛(全員に記念品呈)

# 柳界展望

底い合いぶどうの房は熟れていく 伊藤 玲子  
☆山陰中央新報新年読者文芸、川柳の部受賞者

〈特選〉

ふところに切り札入れた

まますう 伊藤 寿美

☆出雲総合芸術文化祭川柳大会は、11月20日バルメイ

ト4Fホールで開催された。当日の本社関係の受賞者は次のとおり。

〈出雲市教育長賞〉

ここはどこふつと分かれぬ時がある 新家 完司

〈出雲市川柳連盟賞〉

小魚がルールの上で跳ねている 竹治ちかし

君に会う今日のたのしみ倍にして 吉岡きみえ

ころがってみな輝いていた家族 原 章峰

☆いずも川柳会（竹治ちかし会長）は、平成16年いずも賞を決定。1月15日の新年句会で表彰した。

〈いずも賞〉

☆第8回（平成16年）なんなんタウン大阪弁川柳コンテスト入選作品は次のとおり。

〈佳作〉

おおきのに笑顔心の潤滑

油 出口セツ子

☆南大阪川柳会は、平成16年度下半期の成績を次のとおり決定。1月26日の句会で表彰した。○内は順位

①大内朝子 ②鍛原千里  
③西出楓楽 ④玉置重人  
⑤前たもつ

☆京都都塔の会は平成16年度成績を次のとおり決定した。

〈最優秀賞〉 都倉求芽  
〈得点賞〉○内は順位

①大野百合子 ②榎本宏子  
③都倉求芽 ④山田葉子  
⑤三宅満子

▽会長交替△

○川柳塔おっぱこ吟社は、1月から成重放任氏が会長に就任。木村あきら前会長は顧問に就任。

▽評 報△

○西村早苗氏（鳥根県・同人・仁多川柳会会長）は、病気のため1月3日逝去。

○八尾市民川柳会は、宮崎 享年85歳（追悼記事98頁）  
シマ子会長が退任。1月から宮西弥生さんが会長に就任した。

## 新同人紹介

横山捷也

— 薫風・みつ子・楓楽推薦 —

○長谷川淳氏（西宮市・同人）は、1月13日病気のため逝去。享年89歳（追悼記事は99頁）  
常任理事会 2月7日（月）たかつガーデン、出席者21名  
①代表者会の反省、渉外部から欠席者への報告について、各意見に対する常任理事会としての検討（各句会応援・バックナンパー活用他）  
②11回川柳塔まつりの件一次回までに考える  
③特別常任理事会について  
④新同人1名推薦  
次回常任理事会 3月7日（月）9時半からアウイーナ

▽御芳志御礼△

○瀧本きよし氏（高槻市・同人）から金一封を拝受。

○高田美代子さん（藤井寺市・参与）から金一封を拝受。

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳藤井寺	13日(日)午後1時から 赤・後ろ	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市藤井寺公園1-105 高田美代子
西宮北口川柳会	14日(月)午後1時から そのまま・逆風・押す・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南西出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわゑ
高槻川柳サークル卯の花	17日(木)正午から 歯痒い・塩加減・しんどい キャリア・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1031 高槻市松ヶ丘2-8-9 上砂真笑
岸和田川柳会	19日(土)午後1時半から 味覚・向き合う・名案・木簡	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-307 長谷川呂万
川柳ねやがわ	20日(日)午後1時半締切り 喧嘩・飲む・掴む・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	20日(日)午後1時半から ふわふわ・美人・ポケット	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい川柳会	21日(月)午後1時から 昼寝・軽い・決める・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
南大阪川柳会	23日(水)午後6時から 餌・抱く・ソロ・応援	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳クラブわたの花	25日(金)午前9時半から 平気・粗末・呟く・あたふた	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市川柳同好会	26日(土)午後6時から 耐える・ブランド・失礼・敵	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの市川柳会	27日(日)午後1時から 裏・葬式・ピアノ・「理屈」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳ふうもん社	27日(日)午後1時から 尻込み・ドリーム・半数	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京都塔の会	28日(月)午後1時から 橋・若い・愛嬌	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔みぞくち	28日(月)午後7時半から 花・噂・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

### 3 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　　ら	3日(木)午後1時から それから・花・面倒	奈良市立中央公民館4F(近鉄奈良④出口歩5分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
尼崎 いくしま	4日(金)午後1時から 重い・音・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
城北 川柳会	5日(土)午後1時半締切り 転ぶ・扉・リモコン・自由吟	旭区 老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口の左隣り 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
富柳会	5日(土)午後1時から その時・やわらかい・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉吉 川柳会	5日(土)午後1時から ピンク・机・切る	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 唐　　津	7日(月)午後1時半から 葉・放す・アルファ	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
尼崎 尾浜 川柳会	8日(火)午後1時から 純・雛・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
ほたる 川柳 同好会	8日(火)午後1時から 顔・戦う・さすが	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
堺川柳会	11日(金)午後1時から 叩く(共選)・雛 も・や・し(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳塔 打　　吹	12日(土)午後1時から 平凡・壁・破る	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879 高多博文
川柳塔 ま　　つ　　え	12日(土)午後1時半から 待つ・花・落書き・いろいろ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島裕丘
川柳塔 みちのく	12日(土)午後4時から 本音・いらいら・流す	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-0161 青森県南津軽郡平賀町杉館字宮元53-1 小寺花峯
八尾市民 川柳会	13日(日)午後1時から レンタル・幻・忘れる・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室(近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川柳塔 わかやま	13日(日)午後1時から 袋・秘密・オーダー (四字熟字)	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良

# 編集後記

☆53頁に六月号掲載の原稿を募集していますので、同人の方々はあるつてご応募願います。

☆皆さんにさががけて、私の思い出の曲を聴いていただくことをお許し下さい。その曲はタンゴ演奏の「奥様お手をどうぞ」。手回しの蓄音機で何度も聴いたのは、リズムが幼い心によほど心地よかつたからだろう。

☆サラーマンだった父が社交ダンスを趣味にしていたので、時々照れる母を相手にしたり、せがむ私に教えてくれたりした。戦局が厳しくなつて、ダンスホールが次々閉鎖され、せっかくの趣味も中断止むなくなったことは後日聞いた。

☆両親の庇護のもとにあつた幼い日を思い出すたび、

この曲がBGMで脳裡を流れる。

☆六月号で皆さんの大切にしておられる曲や歌を、沢山聴かせていただくのを期待しています。

☆1月20日付の朝日新聞、五木寛之氏のエッセー「みみずくの夜メロ」を読んだ。「ムムツ」と唸つた。何故なら、私もこの欄で取り上げようと思つていた矢先だったから。

☆それは、エスカレーターの左右どちらに立つかという内容であつた。東京では左、大阪は右、札幌はバラバラらしい。国民文化祭出席のため、昨春秋に訪れた九州では左であつた。どちらでもいいようなもの、統一して表示したら如何なものだろう。うっかり間違えようものなら、睨まれて旅の思い出に汚点をつけかねまい。

(ふ)

## ひとこと

### 健康に感謝

突然、体中に激痛が走り目が覚めた。喉がカラカラなので水を飲みに行こうとするが、手足に力が入らずベッドから起きあがれない。主人に起こして貰うも脚が硬直して一歩も歩けない。何故？

病名は「繊維筋痛症」。原因不明のため、治療法はないとの事。毎日痛み止めの薬を服用するのみ。

一ヶ月経過しても体中が痛くて寝返りも出来ない。不眠が続き、このまま寝たきりになるのでは？という不安が広がる。何とか自力で治す方法はないか調べて見ると、気力・運動・薬で状況が改善される事があるらしい。散歩・ストレッチ・気功の真似事・栄養補助剤の飲用等思いつくこと全て実行して四ヶ月。徐徐に手足も動き始め、今は殆ど元の体に戻っている。

(福西 茶子)

○小学校低学年への、よみ聞かせボランティアに参加して一年が過ぎた。私は一年前からの参加であるが、先輩達には、四年目の活動である。先日校長先生から新米の私を含む八名に感謝状を頂いた。「児童が本に興味を持つようになり、図書館での活動が充実し、豊かな心が形成されてきました」という内容に望外の喜びを感じた次第である。

○読み聞かせの時間は短い本を選ぶには時間をかける。季節や、子供の成長に合わせて、社会情勢から事件まで配慮しながら選んでいく。内容を咀嚼してお話することもある。

○三月三日は耳の日。一度に大勢の人の話を聞き分けたいと言う聖徳太子の児童向け伝説にはこんな事が書いてあつた。

○父の橘豊日尊(のちの用明天皇)は太子誕生の時、よい耳を持った徳の高い人になるようにと願つて豊聰耳皇子と名付けた。のちに撰政となつた太子は、よく民のことを考え、悲田院の建立、十七条憲法の制定等々の偉業を成す。父からは常々為政者は「よい意見がきちんと聞きとれるよい耳を持って」と教えられたそうである。聞く耳持たぬ政治家の多い昨今耳の痛い話ではなかるうか。

(希)

# 川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（5月号）地名

市 県  
姓・雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

<input type="radio"/> <input type="radio"/> 年 年 月 月 から から 一年 半年 9800円 5000円	紹介者	電話	住	氏名
			所	
〒 545-0005 大阪府阿倍野区三木町2-10-16 川柳塔社 (電話) 06-6629-6914 ウエムラ第2ビル202 振替 00980-5-33368				
該当の方に○をつけて下さい				

◎この用紙は必要があればご使用下さい



## 作品募集

川柳塔 (8句) 河内天笑選  
 水煙抄 (8句) 奥田みつ子選  
 愛染帖 (3句) 波多野五葉庵選  
 茴香の花 (3句) 政岡日枝子選  
 吟葉 (3句) 山崎君子選  
 放す (3句) 門脇晶子選  
 アルファ (3句) 藤村亜成選

5月号発表 (3月15日締切)

6月号 課題吟 「点」「式」「たっぶり」「サイズ」  
 初歩教室

## 本社3月句会

とき 3月7日(月) 午後1時開場・2時締切り  
 会場が元に戻りました。ご注意ください。  
 ところ アウィーナ大阪 4階 金剛  
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441  
 おはなし  
 兼題 「何」 吉岡修  
 「仰ぐ」 鴨谷瑞美子選  
 「慕う」 松原寿子選  
 「まさか」 池森子選  
 「人間」 春城武庫坊選  
 河内天笑選  
 席題 1題 当日発表 (各題2句以内)  
 会費 1000円 投句料 500円

## 本社4月句会 7日(木) 午後5時から

兼題 「象」「前向き」「透明」「吹く」「思う」

## 第23年度 夜市川柳募集

第10回「苦い」 泉比呂史選  
 ハガキに3句 3月末締切  
 投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3  
 河内天笑方 堺川柳会

### 「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページへの投句用紙を使用してください。
  - (2) 愛染帖・茴香の花・一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限ります。ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。
  - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
  - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにご利用いたします。

定価 八百円(送料76円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇〇五年(平成十七年)三月一日発行

編集者 河内天笑

発行人 河内天笑

印刷所 美研アート

大阪市阿倍野区三好町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

電話 〇六六六九六九一四番

振替 〇〇九八〇一五一一三三六八番

発行所 川柳塔社

# 第29回 全日本川柳2005年広島大会

日時 平成十七年六月十二日(日) 午前十時開場  
 会場 広島郵便貯金ホール(大ホール)  
 〒七三〇一〇〇〇一 広島市中区白鳥北町一九一  
 TEL〇八二(二)三三六三三六七

交通機関 JR広島駅から車で10分・バスで15分

宿題 第一部(事前投句、四月十五日締切)

- 「六」三浦 宏選 「親しい」久保田半蔵門選
- 「魔法」石田 一郎選 「廊下」早川 双鳥選
- ジュニア部門(小・中学生)
- 「光る」江畑 哲男選 「魔法」鈴木 泰舟選
- 「廊下」奥田みつ子選

投句料 一、〇〇〇円(定額小為替・現金書留)を同封して左記宛郵送のこと。

投句先 ジュニア部門は投句料無料  
 〒五三〇一〇〇四一 大阪府北区天神橋二丁目北一〇一  
 ステップイン南森町七〇二

宿題 第二部(当日投句、十一時二十分締切)

- 「世界」田中八洲志選 「事件」大場 可公選
- 「貝」高梨 宗路選

第二次選者 磯野いさむ・泉 比呂史・藤沢 岳豊

成田 孤舟・佐藤 良子

会費 四、〇〇〇円(昼食、記念品含む)

表彰 (1)文部科学大臣奨励賞 (2)参議院議長賞 (3)川柳大賞

全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ  
 全日本川柳大会実行委員長 定本 広文

## △表彰式典・前夜祭(ご案内)

◎表彰式典 平成十七年六月十一日(土) 午後六時

(功労者・平成柳多留入賞者・大会十年連続出席者)

◎前夜祭 表彰式典後、同一会場に於いて

会場 リーガロイヤルホテル広島(4F・ロイヤルホール)

〒七三〇一〇〇二 広島市中区基町六七八

TEL〇八二(五〇)二二二二

参加費 八、〇〇〇円(会食・アトラクション)

大会・前夜祭のお問い合わせ先

〒七三〇一〇〇四 東広島市西条町御園字六四七七一 白井孝司方

日川協広島大会事務局 宛 TEL〇八二(四)三三六六六六

大会・前夜祭参加費の送金先 四月十五日締切

郵便振替口座番号 〇一三七〇三二八二八八八

(会計担当) 弘兼 秀子 TEL:〇八二(七五)二七六一一

## △宿泊・観光ご案内

宿泊 リーガロイヤルホテル広島・広島全日空ホテルドミィーイ広島他

宿泊料金・泊朝食付・税込み 一四、〇〇〇〜八、五〇〇円

(一名一室希望の方はその旨記入して下さい。)

観光 二つの世界遺産を訪ねる(安芸の宮島・平和公園半日観光)

六月十一日(出) 十二時〜十七時 六、〇〇〇円

(各自昼食を済ませてご参加下さい。)

JR広島駅「新幹線口(北口)」十一時四十五分集合

申し込み三十五名以下の場合中止または、料金変更にて実施します。

宿泊・観光の申し込みは、別紙(ハガキ)申込書に記入し、ご送付下さい。

四月十五日必着です。

四月下旬に、担当旅行社より予約の受付確認書振込依頼書が送付されます

ので、確認の上ご入金下さい。入金確認後、宿泊確認書が送付されます。

宿泊・観光の問い合わせ先

(株)ジェイティービー 広島支店 担当者・龍門 康剛

TEL〇八二(五四)二五〇一五 FAX〇八二(二)四二(四)四九三五

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可  
 平成十七年三月一日発行(毎月一日発行)

創刊大正十三年 通巻九三三四号 川柳塔 三月号

定価 八百円(送料 七十六円)